



Puzzle文集 11



# 目次

二〇二〇年六月	1
うたかた	16
結果として	21
二〇一一年三月一日、備忘録。	23
マスクの下で	32
ヒカリノドケキ	45
二人羽織ンピズム	52
夜勤はまだ明ける	55
でもやるんだよ。	60
灰かぶり婆さん	64
月曜日	66
火曜日	69
水曜日	71
木曜日	73
金曜日	75
土曜日	77
日曜日	79
二〇二一年一二月 ～正月は初脂	82
全裸の夢	85
オイ、人間	95
奥付	
奥付	111



二〇二〇年六月

仕事のふりして書斎にこもっている。小僧は部屋に、妻は世の中を憂い寝室にこもっている。物音がした。連続的な機械音。マスクでも縫う気になったか。俺は小さくECDのナンバーを流す。ダッチマダハジマッタバッカ21サーキ。ミシンがシンクロ。そして、ブレイク。ブブってスマホが震えた。俺の部屋ではない。小僧の屁か。ここまで経済活動を絶たれたら二酸化炭素は削減されるのかしら。やっぱり地球が怒っているのかしら。終わらない開墾と植民の結末。幸い今月は食っていける。生涯食うに困らない輩もいる。明日の飯を悩むヒトへなにができる。なにより次の飯だろう。ノブを捻り部屋から踏み出す。

「私、おにぎりを握る」

ダイニングには真新しいエプロンを纏った妻。

「俺、一万の貧乏人とつながっているけど」

背後には斜に構えてスマホを付き出す小僧。

俺には何がある。一万の貧乏人とおにぎりをつなげる術は無いか。旋毛に指を立て、頭を回しはじめる。

無責任な掌編をアップしてSNSで報告。ネット民の反応を伺う。高評価のマークが三つもつけば上々。両腕をあげて背筋を伸ばしながら敷居をまたいで和室に倒れ込む。すっかり干からびたい草。不愉快な生活臭しかししない畳。独自に開発したストレッチで身体を捻る。気持ちがよければ何かしら効果はあるだろう。

「前衛的ダンスのようでも、あるわ」

多少色気のある声を漏らしてから、スマホへ手を伸ばす。なにか反応はないかしら。画面をスワイプで流せばタイムラインは某アスリートの発言でにぎわっていった。俺は顔をしかめる。天性の運動音痴だから身の軽い奴らへの嫉妬心がすごい。キングだのレジェンドだのが発信する言葉に欠陥はないか。成功者特有のフレーズになっていないか。粗探しに余念がない。所詮、日の丸を背負って云々という輩なんてデンデンでん。

鼻を鳴らしてスマホを放る。身体をさらに捻る。妙な声を発する。羊はメーで、山羊はポー、誰かが言っていた。より気持ちのいい方へ。畳の上でのたうち回りながら、全盛期だった頃のプリンスのパフォーマンスを思い浮かべている。七二時間限定無料公開のコンサート映像を観たばかりなのだ。自粛の最中、この手の動画配信が増えた。限定&無料の情報を掴んだからには観なけりゃ損々。特別ファンというわけではない。代表曲は幾らか知っている。一般的なプリンスとの距離感。

「パープーレイン、パープレイン」

のたうち回りながら知っているフレーズを口にする。明後日に向かって手を伸ばせば、スマホがふるえた。我に返って、そいつを拾い上げる。画面の隅にはハートマークが一つ。喜びも束の間、口角を下ろす。真っ先に反応したのは七〇を過ぎた母だった。溜息が漏れる反面、今日も生きていたかと一安心。離れて暮らす母が、ある程度情報技術を手にしているのは助かる。特に応答する必要もなかったが、こんな時期だ。

>なんか困っていることはないか？

いつもの定型文をダイレクトメッセージで送信。

>大丈夫。そっちはどう？

すぐに返信が帰ってくる。感染はしていないようだ。少なくとも自覚症状はないのだろう。

>大丈夫。お互いがんばろう。

送信をタップしようとして躊躇。

「がんばろう」か。

一字一字確かめるようにつぶやく。俺が餓鬼だった頃、がんばろうは無責任な言葉というカテゴリーではなかった。何よりも嫌いな学校行事だった運動会。いやいやながらもボイコットしようという気概はなく、小学生の頃であれば皆と一緒に声を張り上げていた。がんばろう。がんばれ。がんばるぞ。本当に赤組が優勝したらいいと思っていたから。オンリーワンよりナンバーワン。嗚呼、テツロウは誰よりも輝いていた。何よりも尖っていた。

>大丈夫。今度ハグしてやろうか

>遠慮しておくよ

すぐに窘められた。ネタ元はばれているだろう。母も好きな作家がSNSで呟いた言葉を模したものだったから。

>速くお嫁さんでも探しな

余計な一言を追啓。速く？ 早く？ そのはやくはこのはやくでいいのか？ スピード感を持ってがんばれということか。がんばれは中学生あたりから嫌になったんだよ。

>ステイホームじゃ無理な話だ。

>WEB合コンなんてのもあるらしいじゃないの。国も一〇万円くれるって。

給付金でWEBカメラと見栄えの良くなる修正ソフトでも買おうか。母親は情報技術に疎いくらいがちょうどいい。

玄関開ければ二分で到着。俺は今日も皿を持って拉麺酒楽の焼き餃子を買いに行く。

「毎度どうも。ステイホームせんでいいんか？」

ここの餃子はコロナ以前から世話になっていた。俺は苦笑いを浮かべる。反論せずとも店主は言葉をつないだ。

「ステイホームと叫ばれても、ここは俺の家だからな。商売したって文句はねえだろう」

昨日も聞いた台詞だ。今では食堂の入り口を閉ざし、窓だけ開けて、テイクアウトの餃子専門店と化している。店の前には何人かの客が列を作らずに散らばっていた。皿を

持っているのは俺だけだ。最近ではメディアに飽きられたようだが、一時期環境大臣がプラゴミ云々と騒いでいたろう。トゥーンベリ嬢の訴えもあって、地球へのダメージには多少なりとも気を使っている。どうせ家に帰ったら直ぐに食うのだ。たった二分の運搬のため、毎回使い捨てのパックに入れてもらうのもどうか。俺なりに考えた挙げ句、皿を持参するようになった。すると、本来六個の餃子が八個になった。俺の行動に感心してくれたのだろう。もしくは、六個の餃子にしては大きすぎる皿に気を使わせたのかもしれない。

厨房の奥ではいつだっておかみが黙々と一定のリズムで餃子を包んでいた。見入っていれば、窓から何も持たない店主の手がのびる。

「はい、お待ち」

どうやら俺の番だ。その手に皿を乗せると、へらを返して餃子を乗せた。

二分で家に帰れば、電子ケトルで湯を沸かし、即席の春雨スープにそいつを注ぐ。冷や飯をチンすれば餃子定食の出来上がり。春雨スープは六つの味から選択可能。何か足りない。糖尿病予防にはまず野菜を食えと聞いた。テレビは食物繊維が重要と伝えた。会社の同僚からは生野菜の酵素がいいのだと聞いた。俺は毎度「となりのトトロ」のワンシーンを思い出しながら、台所で水洗いしたキュウリの両端を齧って吐き捨てる。そして、餃子定食へ取りかかる前にキュウリを一本平らげた。

休日のステイホームは実に長い。昼飯をすませたら、日暮れのウィスキーを待ちわびながらスマホで情報を漁る。ウィスキーといっても上等なものではない。七二〇ミリリットルで八〇〇円もしない国産ブレンデッドだ。かつてはスモーキーだのピーティーだのと口にしたくて、スコッチに金をかけたこともあったが、結局、国産に落ち着いた。どうせ炭酸ののど越しも欲するから、余計な酸味が混じった状態で嗜むことになるのだ。

アルコールは日が暮れてから。そのルールは破らない。誰に決められたものでもないが、どこかだらしがないという思いがある。まだ餓鬼の頃、休日の親父は昼間っから酒を飲んでた。幼い俺を自転車に乗せながらも缶ビール片手にフラフラペダルを漕いでいたものだ。それがトラウマというわけではない。俺なりの線引きだ。アルコールを取り込むと睡魔に襲われることも問題で、休日の時間を昼寝で潰したくはない。やる事が無くとも暇は愉快だ。再び繰り返される平日までの時間をできるだけ引き延ばしていきたい。

ソーシャル・ネットワークという名の世間では検事の定年延長が話題になっている。「検事長法改正案に抗議します」とハッシュタグをつけて言葉を発信する者。それを叩く者。ソーシャル・ディスタンスを守って国会を囲む者が現れたかと思えば、ヴァーチャル空間に国会議事堂を建ち上げて、プロテスト・レイブを配信する者まで現れた。ステイホームはしてやるけれど自粛は御免だよ。そんな意気込みがたくましい。俺は電子ビートに脳味噌を揺らしながら、餃子を包み続けるおかみを思い返していた。

ステイハウスではなくステイホーム。ハウスとホームの概念を言及する者がいた。ハウスは建築物である家屋そのもの。本来政府が発信したかった言葉はステイハウスだったのだろう。ホームの概念は人それぞれ。家屋の中でもこの部屋こそが俺のホームと鍵をかける者もいるだろう。他人とのつながりを重視する者はどこまでもホームの枠を広

げていける。

一人暮らしでヒト付き合いの悪い俺にとって、ハウスとホームはほぼ同義語。名前も知らない坊主頭が垂れ流す音楽に鼓膜をふるわせながら、ヴァーチャル議事堂を前に踊り狂う人形たちを眺めている。辺りには抗議の立て看板が並び、映像はその間をすり抜けていく。三権分立、強行採決反対、火事場泥棒、アベヤメロ。そして、俺は拉麺酒楽のおかみと接続する。音楽にシンクロしながら餃子を包み続ける。

基本的に政治には無関心で、各種税金を引き抜かれるのが当たり前と考えていた（いや、考えもしない）俺だった。ソーシャルなネットワーキングサービスを利用するようになると、どんな言葉が自分にとって愉快であるのかを知る。気に入った言葉ばかりを拾い集めていけば、ノンポリでやってきた俺はアベガー寄りであることに気づく。俺のタイムラインはアベガー達の言葉に満ちあふれ、たまに目にするアベガーの言葉を嫌悪する。それが世間であると勘違いする。全国紙の世論調査では相変わらず均衡する支持と不支持。そいつに首を傾げるが、俺が目にする政治的発言はソーシャル・ネットワークでつながる匿名人物の声ばかり。俺だって匿名でリツイート。仕事をする上では政治的な発言、宗教的な発言を避けるようにと教育されてきた。主に対顧客においてだったようにも思うが、結局、同僚ともアベを主語に会話したことがない。

レイブの動画配信は途中から音が消えた。著作権がどうこうとメッセージがでている。無音の中でなにやらダイヤルを捻る坊主頭。この手の音楽が好きなわけでもない。若い頃はギターを握った。今でもテケテケした音楽よりはデンドケしたものを好む。坊主頭が忙しく操作しているそれにどんな意味があるのか分からない。無音になったコンピュータグラフィック映像、国会議事堂のまわりで踊り廻る人形達、ヴァーチャル立て看板には例の四文字単語など下品なものも目に障る。俺は映像を止めた。

多くのアーティストが無料の動画配信を行うようになると、今更グリーン・デイが好きになったりする。デンドケは以前から好みであったが、九〇年代、国内外問わずメロコア乱発された頃、どいつもこいつも同じだと嫌気がさし、「バスケット・ケース」が諸悪の代表格だと思い込むようになった。

コロナ禍になって、レディー・ガガが発起人となったオンラインイベントがあったろう。日本でも深夜に字幕付きでテレビ番組が流れた。エディー・ベダーを期待して録画したが、思いがけずピリー・ジョー・アームストロングが弾き語る「ウエイク・ミー・アップ・ホウエン・セプテンバー・エンズ」に心奪われた。親父を亡くした少年時代の心象らしいが、タイトルが今の状況とシンクロした。詳しい歌詞は知らん。

国内においても有名アーティストのサービス精神がこだました。中でも杏が弾き語る「教訓1」の澄んだ声には引き込まれた。パンクも、フォークも、若い頃からテケテケ以上に親和性があった。時折、部屋の隅に立ててあるギターを手を取る。出しておかないと触らないだろうと出しっぱなしにしている。お陰で触る度に埃を吹いて飛ばしている。買ったのは二〇年以上も前になるが、毎回、多少の調弦さえすれば俺の耳ごときに狂いは感じない。憧れだけで手にしたアコースティックギター。なんの情報も持たないまま、手ごろな価格と色合いの好みで購入した国産ギター。スリーコードを循環させて悦に浸ってから、CDつきの「ブルース・ギター入門」なんて教本を開く。タイトルも存在しないスローなブルースソロを弾きはじめる。何度も躓き、目を閉じて舌を出す。直



ぐに飽きて部屋の隅に戻した。

ようやく日が暮れ、シャワーで尻を洗って寝間着でウィスキーを嗜みはじめる。平日ならば仕事から帰ると必ずはじめにシャワーで全てをリセットする。全身にまとわりついた仕事モードを洗い流さなければ、飯も酒も楽しめたもんじゃない。週に二日の休日だって同様、酒の前にはシャワーを済ませておかないと何処か落ち着かない。大した量を飲むわけでない。それでも飲んだ後のシャワーはやはり煩わしいだろう。

毎朝一日分の米を炊いている。正確には前の晩に予約セット。即席の春雨スープにはしょっちゅう世話になっているが、カップ麺の類はストックしていても極力食わないようにしている。おかずは買って来た惣菜になる日も多いが、カップ麺は悪であると俺の脳にインプットされている。日中のアルコールと同様に。

俺はハイボールを嗜みながらフライパンを握る。冷凍野菜のほうれん草に、冷蔵庫の中で切らしたことの無い卵とソーセージ。適当に炒めれば上等だ。春雨スープは六種類から選べる。酒には年々弱くなる。ぼんやりと報道番組を眺め、眠りにつく。

WEB会議システムを立ち上げることが出社の合図。もともと出勤カードなどの仕組みはなかった。それでも九時になったら仕事開始のサインを送らなければならない。さぼっているやつを監視したいのか。効果のほどは不明だ。俺には考えも及ばない監視システムが働いているのかもしれないと、時間になればPCの前で背筋を伸ばす。情報技術には母親よりも疎い。ITがAIでWEB合コンというのが世間の標準らしいが、二一世紀が来る前に恐怖の大王が降ってくると思っていた世代だよ。

それでも、コロナ以前からたまには使っていたWEB会議システムだ。セットアップされたPCがあれば、隔週の部内会議ぐらい参加はできる。

「おはようございます」

ばらばらと寝起きのような声がこぼれる。

「みんな家かな？」

はじめに随分髭面となった課長がみんなの様子を確認する。

「俺、ちょっと会社です」

何かのアピール。

「用事が済んだら早めに帰れよ。ラッシュ時は避けるんだぞ」

定型の気遣い。

うちの業界は恵まれているのだろう。明日の飯が不安になるほどの影響は出ていない。それでも、こんなご時世だ。大した成果は見込めない。顧客とWEB面談がセットアップできただけで価値あるものとされる。結果が伴わなくとも新しい取り組みは好ましい。先週、俺も一番のお得意様とWEB面談の練習をさせてもらったところだ。ほぼ見込みのない商談について多少前向きに報告した。いつものあの人ね。誰もが思ったことだろう。みんなの顔がまっすぐ俺に向いている。なかなかどうして僅かな表情の変化も鮮明だ。俺は奥歯を噛む。妙な緊張感に襲われた。考えてみれば、リアルなミーティングであ

れば、課長以外はみんな一方向を向いているのだ。こんなに視線を感じる社内ミーティングもない。

「あれ、今日議事録誰でしたっけ？」

会議も後半になって言い出すやつ。最後まで黙っておけよ。誰もが黙り込む。

「録画してますよ」

情報技術にやたら強いやつが台頭する。髭の課長が褒めそやす。新しい取り組みは好ましい。すごいなののと矢鱈ざわつく。新しい生活様式なんて何処かで聞いた言葉を口にする。俺は、次のWEB面談のことを考えながら若干うんざりしていた。

以前であれば仕事帰りに駅前のスーパーで買い出し。その生活様式も変わりつつある。そもそも仕事から帰らない。そして、仕事が終わってから買い物に出かけなければならぬのだ。買い出しは三日に一度程度にしてください。そんなことを頼まれても、俺は毎晩その日の気分で惣菜を買っていたのだ。平日から自分のためだけに料理などしてられるか。

それ以前に、晩飯調達のためだけに駅前まで足を運ぶのも億劫だった。結果、歩いて二分の拉麺酒楽に通い詰める。餃子ならば栄養価も高いだろう。なにより美味しい。

「はい、毎度」

窓から店主の手だけが伸びる。はやくも俺の順番かしらと訝れば、近所で見かけたような顔が皿を差し出した。そこにはやはり八個の餃子が乗せられる。いつしか俺だけのサービスではなくなっていたようだ。

再び素手が伸び、俺はソーシャル・ディスタンスを保つ顧客を見渡してから自分の皿を差し出した。店主は少し声を潜める。

「よう青年。お陰で真似するのが増えてね。でも、大事大事。パックの量も減ったしね」

それは餃子を二つ増やすことに見合うものなのか。俺は気になって厨房の奥へ視線を運ぶ。おかみは俯き加減で、相変わらず餃子を包み続ける。心なしかそのペースが上がっているようにも思う。時折、首を一回転させた。

家に帰ったらシャワーだ。湯に打たれながら首を回す。少し濃い目にハイボールを拵え、その夜は、春雨スープを飲む気になれなかった。なんだか餃子も味がしない。コロナにかかったかしらなんて、こんな生活で誰から伝染るといふのだ。どうにも気が晴れず、歯を磨いてからYouTubeをつなぐ。杏の「教訓1」でも聞けば慰みになるだろうと検索すれば、直ぐ下にはそれを批判する動画がアップされていた。なんかダメなの？ 自分は世間に乗せられているだけなのかしら。ふと不安に襲われる。

「俺が好きなんだからいいだろう」

思いがけず声に出る。そして、杏をタップ。澄んだ声も、眼鏡のカーリーヘアも、ボーダーシャツにアコースティックギターも、全てが完璧じゃない。三回連続で聞いて、布団に倒れた。そして裏声で口ずさむ。

「青くう、なってえ、尻込おみなさいい♪逃げなさい、隠れなさい♪」

薄暗い和室で木目の天井を見上げれば、黙々と餃子を包むおかみが浮かび上がる。その顔を思い浮かべようとするが、どうしても皺くしゃの店主の笑顔が浮かぶ。最近では、

厨房の奥で俯く横顔しか見ていないが、かつては店内で注文を取ってもらったことがあったはずだ。

「青くう、なってえ、尻込おみなさいい♪」

俺は繰り返す。おかみの顔は現れない。

「逃げなさい、隠れなさい♪」

夢に杏が出てきた。ラッキー。

翌朝も在宅だ。不要不急の用件はない。俺の顔が見られないことで、その日の飯に困るやつなどいないだろう。「どうにもならないことなんてどうにでもなっていていいこと」甲本ヒロトの言葉。正直なんのことやら分からなかった。「シンプルにわかりやすく説明ができないことは実はそれほど重要なことではない」ホセ・ムヒカの言葉。そいつを読んだ時、おおよそ同義語だろうと解釈することにした。俺の仕事は自社製品のアプリケーションをコンサルタントすることによるソリューションのプロバイダー。腹を空かせた市民のために餃子を包み続けるおかみの足元にも及ばない。

九時になればPCを機動、WEB会議システムを立ち上げて「連絡可能」の緑サインを出す。すぐに課題が降ってきた。内容的に俺だよな。もやもやするからご指名で来いよ。とは言え、直ぐにソリューションをプロバイドできるとは思わんでくれ。メールに、会議システムに、SNSに、画面には次々メッセージが立ち上がる。急ぎの案件ならば電話が入るだろうというのは、どうやら一昔の考えのようだ。俺はPCの前で「連絡可能」のサインを掲げているのだ。そして、「一時退席」の黄色サインと、「応答付加」の赤サインの線引きが分からない。

電話は大抵不意に鳴る。アナクロニズムに攻めて来たのはあいつだった。

「おう美津濃、生きてるか？」

俺は確かにそんな名前だった。会社で呼び捨てされることも少なくなった。同期のあいつだ。あいつ、同期だよ。

「おう」

「どうした？」

「堂島っ」

「なんだよ」

すっかり名前が飛んでいた。とは言えない。しばらく会っていないからと言うより老化だろう。脳味噌の劣化。

「なんだよって、おまえが電話したんだろう」

「まあ、そうだな。とりあえず生きててよかったよ」

堂島は神戸支社の同期だ。

「なんだこの番号？ 事務所にいるのか？」

「いや、家だ。IP電話だよ」

「なにそれ？」

「パソコンからかけるやつ。有能なアシスタントが設定してくれた。細かいことは聞くな」

もともと一緒に本社勤務をしていたが、生まれが西日本だった。本人の希望なのかどうかは知らんが、こんな時期だ、生まれた土地で過ごせるのは精神衛生上きつと悪くは

ない。

「そっちもまだ外回り出来ないの？」

「基本、本社と同じだよ」

若い嫁さんと幼い子供の声が漏れ聞こえる。

「かわいい声がするな」

「嫁？」

「あ？」

ふつう子供のほうだろう。

「ああ、下は四月から小学校のはずだったんだけどな。エネルギー持て余してる」

「大変だな。ずっと家にいるの？」

「無理無理。上のやつに頼んで、公園に連れ出してもらってる」

前妻とのお嬢さんがいたはずだ。

「だよな」

それでいいのかどうかは知らんが。

「マスクしてな」

俺は電話を持ったまま二、三うなずく。PCの画面にメッセージが現れた。何かのミーティングが始まるようだ。普段であれば、ちょっとした立ち話で済んでいたようなことにもいちいちインビテーションがかかる。

「なんかはじまるみたいだから切るよ」

「ちょっと待てよ。別におまえの様子を確認するためだけに電話したんじゃないだよ」

そりゃそうか。

「今週後半くらいに一発アポ入れたいんだけど美津濃も一緒に入れられないか？ 例の新しいソフトのこと話して欲しいんだけど」

俺は予定表を立ち上げて週後半の日程を確認する。自粛がはじまったばかりの時は商売の話をするにも抵抗があったが、すぐに慣れた。お互い距離感を探っている。ならばこっちから詰めていけばいい。

「木の午後か金の午前ならいけるぞ」

木の午前と金の午後には、どうしても良さそうなミーティングときっと流れるであろうアポが一時間ずつ入っていた。

「じゃ、ちょっと空けといて、アポ決まったらインビテーション入れとく。忙しいところ悪いな」

最後のそれは皮肉ではないのだろうが、表情の見えない言葉たちがいちいち癪に障った。

在宅は昼飯が厄介だ。ストックの赤いきつねときゅうり一本で済ませてしまったから、業務終了後PCを閉じたときには随分と腹を空かせていた。一日中座っているだけとは言え、生きてりゃ消耗する。一〇〇年近くも動的均衡を保ちつつなければならぬのだ。食わなければ凹む。出さなければ荒れる。肉体の折り返し地点はとうに過ぎ、日に日に身体は不快になっていく。生き物のベースには不愉快がある。そんな言葉を聞いた

ことがある。人生の目的はハッピーの追求などではない。きっと、この不愉快を取り除く作業だ。まずは空腹感を取り除かねばなるまい。そして、今日も餃子を求めて拉麺酒楽へ。用を足してからにするか。

活動範囲が狭くなれば一人暮らしの日々はルーティンになってくる。洞窟から抜け出して乾いた大地に生えたわずかな草や小さな甲虫を摘まんで口へ運ぶ。雨が降れば水たまりを必死に守る。いつかモノリスは降りてくるだろうか。

「はい、毎度」

窓から店主の手が伸びる。宇宙の旅から目を覚まし、自分の両手に目を落とす。

「あれ？今日は皿ないの？」

やべ。忘れた。俺は小さく頭を下げた。厨房の奥でおかみが手を止めて首を回す。目があった。ほんの一瞬のことだったけれど、その顔を正面から見るのは随分と久しぶりだ。シワやシミは光を吸い込み、薄暗い厨房から瞳だけが強く光を弾いている。年齢でいえば俺より母に近いように見える。確認をしたことはないけれど、店主の配偶者なのだろう。

「はい、毎度」

そいつを口にしないと店主は手を伸ばせないのか。プラスチックパックには六つの餃子。当たり前のことに肩を落として、小銭を支払った。

ポストを覗けば、スマートレターなる郵便物が届いていた。手に取ると依頼主は何やら横文字の会社。俺は黒縁眼鏡の青年を思い浮かべる。

「モーメント・ジューンか」

細身の青年がライブ配信を行った時、アルバムのフィジカル盤を無料で送ると言い出した。そんなことして大丈夫なんかい。経済的に。大胆な発言に唾然としつつも無料には滅法弱い。俺はライブ配信終了後すぐにメールを打っていた。

「マジで来たよ」

割と時間も経っていたから正直忘れかけていた。部屋に戻れば早速PCに取り込みつつ再生。いい加減に肩を揺らしながら餃子を齧り、春雨スープを啜る。腹が満ちたら、ウィスキーを舐めながら過去のSNSを漁った。フィジカル盤を配るから余裕があったら何処かに寄付をしてくれとメッセージを残していたはずだ。どこまで気のいい青年なのだ。「いいね」していたような気がするけれど、他人の発言には割とすぐ共感してしまうものだから「いいね」に埋もれる。モーメントの「いいね」だけを検索することはできんのかしら。真っ赤なキムチでピンタ。真っ赤なキムチでピンタ。

「なんじゃそりゃ」

思わず吹き出す。往復ピンタを喰らいながら、鼻から春雨を出しながら、どうにか過去の発言にたどり着く。モーメントの名前で寄付したよなんて返信も投稿されている。それいいじゃない。リンクをクリックすれば、毎月の定期寄付と単発寄付の選択肢。単発でよろしく。そして、四段階の寄付金額。三〇秒ほど悩んだ挙げ句、中の下、下の上。

実際何に使われるのかは知らないが、多少晴れやかな気分になる。社会貢献というよりは、気のいい若者の言うことには口を挟まず従っておきたいおっさん心。ラストはYouTubeでも公開されていた聞き覚えのあるトラック。単発で聞いたときにはさほど響かなかったが、アルバムを通して批判と感謝を散らかせた挙げ句なのだろうと感慨

深くなる。知っている曲が出てきてオットとなっただけかも知れんが。

洗面所に立って大きく欠伸。薄くなってきた頭に手櫛を通し、軽く頬を打つ。

「真っ赤なキムチでピンタ」

すっかりお気に入り。重たい肩を持ち上げてストーンと落とす。そして、少し顎を持ち上げて鏡に接近する。これは多分間違いないと思うのだが、鼻毛の中には一日にセンチメートル単位で伸びるやつが混じっている。俺はそいつを摘まんで一気に引き抜いた。

「て」

顧客との面談が控えている日には髭くらい剃る。WEB面談でネクタイを締めるのはやり過ぎのように思えるが、フォーマルのシャツにジャケットくらいは羽織る。スタートアップのベンチャー企業ではないのだ。顧客面談にネルシャツで挑めるほどのカジュアルさは持ち合わせていない。結局、いろいろ考えるのも面倒になり、上下スーツで身を固める。胸から上しか映らないのだからベルトまでする必要はないか。

午前中にアポを設定してしまったことに少々心配している。マンションの管理人が共用廊下に掃除機を掛け出すのが大抵午前中なのだ。以前は気にかけてたことなどなかった。そもそも自宅にいなかったから。はじめてその事実気づいたのが社内会議でよかった。わずかに部屋の窓を開けたままWEB会議をしていれば、ゴーゴーとサイクロンが音を立て、ガリガリとヘッドが床を削りはじめた。

「あれ？ 美津濃さん、同居人がいるの？」

課長の髭面が晴れ上がる。俺は慌てて立ち上がり、皆に尻を向けながら窓を閉めた。トランク一枚でなくてよかった。

「あ、いや、すいません。管理人さんが廊下に掃除機を」

「とかなんとか言っちゃって」

同世代の輩は管理人さんという響きにあらぬ期待を寄せる。うちの管理人は爺さんだよ。サイクロンが過ぎ去るまでマイクをミュートにして無言を貫いた。

そんなこともあって、俺は管理人の動きを気にしながら、堂島に依頼された新製品のプレゼンテーションをこなしていった。新製品といっても、既存ソフトのマイナーチェンジだ。話し慣れた資料を画面いっぱい映していると、不意に挟み込まれる顧客の質問に対する受け答えが曖昧になる。

「いやいや、従来品からの変更点は分かったんですけど、結局こちらの要望は満たせないということですよ？」

返答に窮していれば、堂島がフォローに入る。

「すみません。まだローンチ前で、完全に情報をつかみ切れていないところもありますので、その点は、ちょっと宿題にさせてください」

俺はディスプレイのカメラに向かって小さく頭を下げる。聞き漏らした質問を堂島が繰り返す。

「ということで、よろしかったですよね」

ということでしたか。俺は慌ててメモを取る。答えは「できない」というので明らかだった。

「すみません。まだローンチ前で、あれなので、その点は、ちょっと宿題にさせてください」

俺は繰り返す。すると、サイクロンの音が近づいてきた。俺は、マイクをミュートにする。あとは堂島、おまえが何とかしてくれ。

「はい」

時折ミュートをはずし、合いの手を入れる。

「おっしゃる通りです」

こんな時に限って掃除が念入りなように思える。誰かが酔っぱらってゲロでも吐いたのか。このフロアは後回しにしてくれ。背後の窓を開けて何度叫ぼうと思ったか。しかし、それ以降、技術的な質問はあがってこず、堂島がうまいこと乗り切った。

「ありがとうございましたっ」

俺はディスプレイに向かって深々頭を垂れる。顔を上げ得たときには、顧客も、堂島も退出をしていた。

毎日往復二時間以上の通勤時間が削られる。PCを閉じる時間だって普段より早い。平日であっても夜の時間は長くなった。母親が言っていたWEB合コンなんてワードを思い返すが、そもそもリアル合コンすら縁がない。数少ない同期は皆結婚している。そんなものに参加する術を知らないし、相談できる相手もない。ネットで検索すればすぐに出てくるのかもしれないが、結局、その気がないのだ。

職場の中でもまだ若手だった頃なら、付き合っていた女くらいいた。学生時代には縁の薄かった女と偶然意気投合したり、同業の社員と展示会で知り合ったり。職場の飲み会では、古株の独身先輩を捕まえて、酔った勢いでどうして結婚しないのかと不躰な質問をぶつけたこともあった。

「一から知り合って関係を築くのがだんだん億劫になるんだよ」

「性欲が無くなると、男女関係ってのが面倒に感じるもんだ」

当時はおっさんたちの言い訳にしか聞こえなかった。しかし、自分がおっさんになると彼らの言い分が分からないでない。俺はウィスキーを継ぎ足し、テレビリモコンに手を伸ばした。

つるんとした顔のニュースキャスターが眉間にしわを寄せて、マスクも一〇万円もなかなか行き渡らない現状を伝えている。

「あったね一〇万円。何すりゃいいんだ？」

金を受け取ることすら面倒になっている。こいつも性欲の減退と関係しているのか。生物としての生存理由が繁殖だというならば、全般的な無気力は性欲減退によるものと考えられなくもない。要らないとは言わない。適当に振り込んでおいてもらえないものか。急がんでもいいから年末調整とひっくるめて会社で処理できんのか。贅沢な無気力かもしれないが、一人暮らしの会社員ならそんな奴も少なくないだろう。面倒な手続きというものが不愉快なのだ。マイナンバーカードがあれば手続きが簡便だとか聞いたような。マイナンバーの通知を受け取った記憶はあるが、カードを発行した覚えはない。通知すらもはや探し出せる自信がない。

テレビは別の映像を流しはじめ、俺も一〇万円のことは先送りにする。アメリカが荒れているようだ。息が出来ないとプラカードを掲げる市民。鎮圧のためには軍の投入も辞さないと宣う大統領。停滞する経済、広がる格差、どうせ経済的には中国に負けるんだから、グレート・アゲインを掲げるならほかの路線に行きなさいよ。あんたらの国なら世界に誇るいいものが幾らだってあるでしょう。

>人生とは不愉快を取り除く作業なのだよ。

フリック入力の後、発信をためらう。俺の言葉が発端で大統領が息の出来ない市民を蹴散らす決定を下したらどうしましょう。届くはずもない言葉に気を使う。誹謗中傷した発信者は特定できるって言うじゃない。削除しようにも、その前に画面キャプチャーするやつとかいるじゃない。二桁のリツイートも経験したことのない分際で、一言の発信による世界の混乱を妄想する。天井を見上げれば、薄暗い厨房でただただ餃子を包み続けるおかみの残像。テレビとSNSで映像を漁れば、声を張り上げる者、暴徒化する市民を諷める者、リズムに合わせてステップを踏む者、膝を突いて両手をあげる者。餃子を包み続けるおかみ以上に尊い者があるだろうか。

テレビは気象情報を伝える。全国に太陽が散らばる。明日の気温は例年を遙かに上回るといふ。

俺は入力した文字を取り除く。グラスの底に僅かに残ったウィスキーを飲み干し、ガリガリ氷を噛み砕く。歯も磨かずに敷きっぱなしの布団へ倒れ込んだ。

眠りが浅いのだろう。最近よく夢を見る。俺は弾けないギターを抱えて餃子ができあがるのを待っている。俺のほかに餃子を待っている人間が数名。皆、等間隔に広がって皿を握っている。餃子を包んでいるのはいつものおかみではない。カーリーヘアから僅かに覗く黒縁眼鏡、ボーダーシャツが粉にまみれている。それが杏だということに俺は差ほど違和感を覚えない。

「はい、毎度」

やはり店主はそいつを口にしないと手を伸ばせない。皿を持った一人の男が歩み出る。俺はそいつが何者であるか知っている。杏の「教訓1」を批判する動画を投稿した男だ。実際にその批判動画を観たわけではない。男の顔を覚えてはいないが、俺はその男であることを確信している。

男は皿を差し出し、薄ら笑いを浮かべる。今が好機と誹謗中傷をはじめようとしている。薄暗い厨房で、ただただ餃子を包み続ける杏以上に尊い者があるだろうか。俺はギターを抱えている。やるべきことは分かっていた。だけどギターには弦がない。きみに聴かせる腕もない。ネックを握って振り上げる。俺はいったい何がしたい。弾けないギターのネックを握り、ポール・シムノンの曲線美を思い描いた。

次第にこれが夢の中であることに気づきはじめる。いわゆる明晰夢というやつだ。血気盛んな男子であれば、ここで若い女でも探しに行くのかも知れない。しかし、これは精力も減退しはじめたおっさんの夢だ。ただ餃子を包み続けるおかみをもっと近くで観ていたい。それが杏だとしても。

こんな小窓から中を覗き込まずに、店舗の中へ入ってしまえばいいじゃない。かつて



好んでネギ拉麺を啜っていた時のようにドアを開けて中へ入れればいいじゃない。鍵がかかっているかしら。俺は誹謗中傷男を軽く突き飛ばし、扉に手をかける。あ、やばい。目が覚める。

布団を蹴り飛ばすと随分汗をかいていた。季節は夏へ向かっている。

「おはようございます」

隔週の部内会議が始まると、みんな随分と服装が変わっていた。がたいのいい課長は首にタオルをかけ、何度も額を拭っている。

「いやいや、あつついよね」

七部袖のサマーニットを羽織る者、まだ長袖Yシャツの者、Tシャツ一枚の者もいる。俺は三年くらい前に買ったユニクロのポロシャツ。

「エアコン着けりゃいいじゃないっすか」Tシャツは言う。

「まだ早いだろ。八月になったらとろけちゃうよ」課長は首を振る。

「きっと、この世代は人類絶滅に立ち会えるんでしょうね」

誰の言葉だ？ 小窓に並ぶ顔を見渡せば、皆一様に困惑の表情。課長は何も無かったかのように業務連絡を進める。

「まず今週以降の働き方についてですが、基本は今まで通り変更なし。原則リモートワークで、それでもお客さんとのタッチポイントを減らさないように各自工夫をしてください。このミーティングでも、面白い取り組みは積極的にシェアしてくださいね」

派遣スタッフの退職や部署移動の話聞けば、やはり影響はあるのかと気分が沈む。そして、新製品のローンチスケジュールがシェアされた後、各自の報告へ続く。俺は堂島とソフトの紹介をしたことに触れ、その際に要求された改善点を報告する。

「それって、できますよね？」

サマーニットはどこか気を使うような口調で指摘する。Tシャツが重ねた。

「前のバージョンで既にできるようになってますよ」

え、まじ？ 俺は歯を見せる。課長はタオルを額に結んだ。

「じゃ、あとでその手順を美津濃さんに教えてやって」

「分かりました。美津濃さん、会議のあと画面共有できます？」

「ああ了解。ありがとう。助かるよ」

Tシャツの顔が晴れる。アプリケーションをコンサルタントすることによるソリューションのプロバイダーという人種は、基本的に自分が知っていることをヒトに教えるのが好きだ。皆の報告はミュートにしたまま聞き流す。さて、堂島へはどうやって報告すべきか。できるのはよかったが、前のバージョンからできるようになっていたとは、なかなか言い出しにくい。

「そういえば、議事録は？」

「録画してますよ」

会議が終わると、すぐにTシャツからのメッセージが届いた。リンクをクリックすれば画面いっぱいドヤ顔が映る。

「お疲れ様でえす」

TシャツにはSAVE OUR LOCAL CINEMAS とのロゴが書かれていた。それは弄っ

て欲しいというサインにしか思えない。ひとまずそいつを読み上げる。

「セイブアワローカルシネマ？」

「セイヴ」

Tシャツは下唇を噛む。そして、それが関西のローカル映画館を支援するために販売されたTシャツであることを知る。

「関西出身だっけ？」

「いや。関西出張の夜に映画観たりするんですよ。たまにっすけど。俺、酒呑まないっすからね」

「そういや、昔、一緒に関西同行したな」

Tシャツがまだ入社して間もない頃だ。夜には堂島も誘って飲み屋に行ったが、あいつはとりあえずジンジャーエールで、そのあとウーロン茶だった。堂島がしばらくジンジャーと呼んでいたから、細かいことをよく覚えている。誘われて迷惑だったろう。あの頃は偉そうに背中を見せていたが、技術的なことなど若いやつほど飲み込みがはやい。

Tシャツによるトレーニングは一五分もせずに完了した。

「そんな簡単にできたのか」

「そうですよ。前のバージョンでもできますよ」

「新しいバージョンで、このあたりってなんか便利になってたりしないの？」

「いやあ、変わんないんじゃないっすかね」

「そうか」それは俺のニーズを満たしちゃいないな。

前のバージョンでもできますよ。

新しいバージョンでもできますよ。

新しいバージョンでできることを確認いたしました。

嘘にならずに自分の身を守るにはどうしたらいいかしら。「反省しているんです。ただ、これは私の問題だと思うが、反省をしていると言いながら、反省をしている色が見えない、というご指摘は、私自身の問題だと反省をしている」あれ至言よね。

卵やウインナーのストックが切れそうになれば、駅前のスーパーへ向かうほかない。ついでに春雨スープも補充しておくか。

仕事終わりと言え、空はまだ灰かに明るい。俺は緩やかな坂道を上っていく。正面から小さな人影がおりてくる。それが誰であるのかすぐに理解した。ギターを抱えた杏ではない。拉麺酒楽のおかみだ。餃子の材料を切らしたのかしら。いや、店舗は自宅だと言っていた。店主とおかみにも日々の生活がある。手押し車を押しているようだ。下り坂で引っ張られているようにも見える。手伝いが必要なほど老齢では無いだろうが、何か一声かけたい。

ふと初恋の女を思い出す。俺はながいこと奥手で、はじめて付き合ったのは十代も最後の歳だった。山羊はボーと鳴くと言っていた女。はじめてのキスは女からされた。それはつまり俺の人生におけるはじめてのキスであり、俺の人生ははじめてのキスが女からされたものとなった。

「あんまりも何もしようとしなから」

その言葉は妙に引っかかっている。そして、特に対女に関して自分から積極的にことを起こさなければいけないと思うようになった。

おかみの顔が認識できる程度の距離まで近づいた。なんだか妙に小さなマスクをしているが、おかみであることは間違いない。俺とおかみの関係を考えれば、こっちが客であるのだから向こうから声をかけていただいても不自然ではない。それでも、やはり俺から声をかけなければいけないような気がしている。ソーシャル・ディスタンスを保つためには二メートル以上離れたところで声をかけなければなるまい。かといって、あまり遠くから大声で声をかけるほど親しい関係ではない。三メートルあたりで声をかけようか。走り幅跳びなら今でも飛べる程度の距離だろう。

それは三メートル半でのことだった。おかみは目尻に品のいい皺を浮かべる。

「いつもありがとうございます」

不意をつかれ、咄嗟に返した言葉は、とっても形式的なつまらない言葉だった。

「いえ、こちらこそ。お世話になっています」

そして、二メートル圏内ではお互い無言になって小さく会釈した。手押し車は大きく膨らんでいた。三日分の買い物をまとめろという要請を律儀に守っているのだろう。息を止めておかみとすれ違う。三メートル離れたら振り返ろうか。俺は立ち止まる。振り返ったところで何を言う。俺は口元に手をあてた後、腕時間を確認する。一九時まであと一〇分。もうこんなに日が長いのか。店主は厨房を磨き、おかみは夕食の支度をはじめ。重ねた月日が目尻に刻まれていく。

一九時まであと一〇分。この時間であればまたこの坂道で出会えるのだろう。結局、俺は振り返ることなく卵とウインナーを求めて再び歩きはじめた。

「きっと、この世代は人類絶滅に立ち会えるんでしょうね」

それでも愛すべき人の幸せを祈る。

今日も不愉快を取り除きながら生きている。

## うたかた

その土地に縁も所縁もない俺が、なぜ多額の供託金を支払って立候補することを決めたのか。それは一票の格差を是正するための理由で、強制合区に押し込められた県民とともに怒りの声を張り上げるため。合区となった二県が、国政に対して異なる期待をした場合にはどうなる。両県民の思いを反映させることができないではないか。地方の国会議員ばかりを減らしてどうする。都市との格差はますます広がっていくばかりではないか。

去年の夏にストックした五〇〇ミリリットルのポカリスエットを常温で一気飲み。空のペットボトルが必要だったから。白いペンキに詰め替えてからカルピスの方が自然だったかしらと下唇を囁む。それでも青と白のコントラストが美しい。

その土地には縁も所縁もない俺だ。立候補したところで勝ち目はあるのだろうか。はじめから勝つことが目的ではない。そう腹をくくって立ち上がる輩はいくらもいる。この問題に一石を投じ、二県で一議員なんて半人前扱いされた県民の怒りを全国に知らせる。その目的だけで何百万という金を支払う覚悟があるか。政見放送で「スクラップ&スクラップ」と声を張る。街頭でレオタード姿になってマラカスを振る。先人のやり方を倣ったところで得られるインパクトは知っている。

リュックサックの両脇にはサイドポケットがないと許せない。左手を伸ばして右ポケットから折りたたみ傘を引っ張り出す。右手を伸ばして左ポケットからペットボトルを引っ張り出す。不意の雨から身体が濡れるのを避けるため。渴いた喉をいつでも潤せるように。外はからっと。中はしっとり。

その土地に縁も所縁もない俺には土地勘がない。合区となった彼の地で選挙活動しようとなれば、四国の東端から西端まで移動するだけでも大変なことだ。鳴門から宿毛までおよそ三〇〇キロメートル。一般道を走ったら車で六時間。「一日の総走行距離の限度として、高速道路なら五〇〇キロメートル、一般道なら二五〇キロメートルぐらいを目安としましょう」日本自動車連盟だってそう言っているではないか。こっちはワン

ボックスの選挙カーだ。高速道路を疾走するわけにもいかない。それにしても、J A Fのステッカーを見る度3 4 Fって戦闘機かしらと見紛う。そいつはどうでもいい。

ペンキ入りペットボトルは左サイドポケットに突っ込めばほとんど隠れてしまう。窓の外は雲一つない青空。右サイドポケットには喉を潤すための一本を差しておくべきかしら。しかし、両のポケットにペットボトルを差して歩いている自分を思い浮かべれば、何処か妙ちくりんだ。

その土地に縁も所縁もない俺にとって、四国横断ローカル列車の旅には多分な魅力を感じている。JR鳴門線、JR徳島線、JR土讃線、土佐くろしお鉄道中村線、土佐くろしお鉄道宿毛線、乗り継いで乗り継いで一時間。乗換駅で街頭演説を挟んだならば片道だけで二日間が必要だろう。なんのために生まれてなにをして生きるのか。こたえられないなんて、そんなのはいやだ！ JR土讃線と言えばあんぱんまん列車ではなかったかしら。「父ちゃん、あんぱんまん列車に乗ったことがあるんだぜ」息子に自慢する無精髭の自分を思い浮かべるが、その前に嫁を捕まえるハードルが高くそびえ立つ。

右サイドポケットにはやはり折りたたみ傘を差しておくべきだろう。窓の外は青空。家に帰るまで雨が降らないとも限らない。テーブルに置かれたスマートフォンを二、三タップすれば天気予報にたどり着ける。降水確率〇パーセントなどと目にしてしまったら心が揺らぎそうだ。腕を伸ばして傘を握ると無造作に畳んで差し込んだ。

その土地に縁も所縁もない俺が言うのもなんだが、一つ苦言を呈する。前回、令和元年七月二日執行の第二五回参議院議員通常選挙において、徳島県は全国最低の投票率三八・五九パーセントを記録した。その時、既に平成二八年の第二四回参議院議員通常選挙に続く二度目の強制合区。高知県から出た自民党現職・公明党推薦の議員が再選した。徳島県現職は第二四回から比例区に回されたのだ。そして、自分の名前や政策を連呼することもなく比例特定枠で当選。投票する気が失せるのは無理もないことなのか。その一票を持って公職選挙法の改悪を推し進めた現政権にNOを突きつける気概はなかったか。「誤解が生じているならお詫びの上で訂正します」

喉を潤すための一本を左サイドポケットにさして、ペンキ入りペットボトルをリュックサックの中に入れてしまうという選択肢もあるだろうが、今回に限っては避けたいのだ。〇・三五Lサーモス真空断熱ケータイマグにカフェインレスコーヒーを用意して、コートのポケットに入れておこう。

その土地に縁も所縁もない俺は、どんな政策を打っていけばいいだろう。一票の格差ごときがなんだと声高に叫ぶだけでは、県民の心には響かないだろう。四国のへそに立って東京者へ難癖でもつけようか。自ら望んでニッポンのへそへ吸い込まれていった分際が、いちいち文句を言うな。勝手に群がって俺の一票には価値がないと嘆くくらいなら四国へ来い。ここではおまえの一票は三倍以上の価値を持つぞ。合区となった今だって一、五倍以上の価値はある。ニッポンのへそが東京だというのならば、四国には三好がある。ルポタージュ絵画に土着のイメージや寓意性を重ねた山下菊二の出生地でもある四国のへそだ。

カフェインレスに何かこだわりがあるわけではない。母さんがネスカフェのカフェインレスだったから。身体にいいだろうという刷り込みがされている。ラベルにはポリフェノール習慣一日三杯と添えられている。上質を知るヒトでありたい。

その土地には縁も所縁もない俺であるが、山下菊二の作品には呑まれる。ビールケースをひっくり返して、拳を握りながら叫ぼうか。

「私はあくまで真実を曲げられないとして戦うヒトとともにありたいと思う。私の表現がその戦いの一環となり得ればと願っている」

山下菊二の言葉だ。母に「生きて帰ってこられたら帰っておいで」などと送り出された出征地では、剣先シャベルを握り、自分でさえ思いも寄らないほど残虐な行為をはたらいた。生きて帰れば因襲の絶えない村で被害者面を下げて過ごすことになる。そんな中、曙村で起きた活動家と貧農による地主襲撃事件。四国の事件ではないが、山下菊二は現地へ入り代表作「あけぼの村物語」として描き上げた。作中に地主らしき人物はいない。地主視点から描かれた被抑圧者の姿だという。顔の見えない貧しい娘、首を吊った老婆、溺死した活動家、人間とは異なる秩序や視点で佇む動物たち。矛盾を抱えた画家の心の奥底から湧き出るイメージを現実世界に溶かし込んだ。

春物トレンチコートのポケットにネスカフェカフェインレスの入ったサーモス〇、三五Lサーモス真空断熱ケータイマグ、リュックの右サイドポケットには自動開閉折りたたみ傘、左サイドポケットには白ペンキを詰め込んだペットボトル。俺はブーツの紐を結んで、青空の下へ踏み出す。

その土地に縁も所縁もない俺ではあるが、一枚の青写真があった。四国のへそに一大テーマパークを造り上げる。そして、新規事業とともに県民を取り戻す。遂には、強制合区などという公職選挙法のふざけた規定をひょいと乗り越えるのだ。社会問題を取り入れながらも安易な解釈を拒むテーマパーク。「四国あけぼのリゾート」、もしくは、「あけぼのスタジオ四国」でもいい。一步踏み入れれば封建的な村、閉塞的な空気、そっと

のぞき込むように意地悪い視線、永い因襲的な対立に吸い込まれるような不安感。「あけぼの村物語」を肌で感じることでできる体験型アミューズメント施設である。もともとあの油絵は紙芝居として制作される予定だったという。農民視点、地主視点のどちらからでも物語に参加することができます。老婆はどうして首を吊ったのか。活動家の死因は本当に溺死だったのか。ミステリー要素をふんだんに取り入れ、作品を知らない来場客も飽きさせない。そして、不穏な空気の中、赤犬、魚、鶏たちの視線が突き刺さる。

「おまえもだろう」

折角の青空ではあるが、俺は地下へ地下へ階段を折り返す。東京メトロを乗り継いで目的地を目指す。

その土地には縁も所縁もない俺だが、繊細な画家を生み出した土俗の闇に惹かれてしまう。現在、「あけぼの村物語」は都内の美術館に所蔵されている。俺はまた一三七センチ E 二一四センチの世界と向き合っている。闇を抉るように描かれた不可思議な油絵。画家自身、あの凄惨な事件の前から曙村と接点があったわけでない。それでも貧農たちの襲撃と激しい闘争があったことを認め、地主へ変革を求めるために武力は必要であったと擁護している。現代を生きる俺の脳みそは、武力は最低だという立場をとることが無難であると教育されている。

入館の際、ペンキ入りペットボトルについて指摘されることはなかった。ただし、リュックサックは前向きに背負えとのこと。俺はペットボトルと折りたたみ傘を操縦桿のように握る。自分の肉体をコックピットから操っているような気分だ。

その土地に縁も所縁もない俺が支払う供託金は三〇〇万円。どこの政党にも属さなければ、選挙区以外に戦いの選択肢はない。有効投票総数を改選定数で割り、八分の一以上の得票がなければ、没収されて国庫に納まる。次回、議席の半分を開け放ち、一二一の椅子取りゲームを争うのは二年先。一度決めたこととは言え、この思いが持続するかどうか保証はできない。なにせその土地には縁も所縁もない俺なのだから。

「不合理なことへ口を睨み、抑圧するものへ帰属し、服従する日本人の体質そのものであった」

その土地には縁も所縁もない俺に、山下菊二の声が尻をたたく。首から下を地面に埋められた逃亡者とその耳をシャベルで削ぎ落とさなければならなかった新兵。戦争手段を持つ階級に弄ばれる不条理を嘆く前に、逃亡者の首は焼かれていた。

展覧会に出した作品であっても、自身が満足できないものであれば何度も筆を入れ直した。いくら家族がもったいないと止めたところで真っ白に塗りつぶしてしまうこともあったという。写真で残っていたとしても原画が現存しない作品は多数。

その土地には縁も所縁もないはずの山下菊二が描いた曙村。今では身延町へと名前を変えた。それでも油絵の放つ不安感や閉塞的な空気は、あの赤茶けた水に浮かぶ魚のように、いつまでも鼻にまとわりついている。

戦後七五年、未だ他人の不幸に驚くほど冷淡な態度をとることのできるニンゲンがいる。そいつは未だ一部の階級に与えられる特権なのか。溜息、舌打ち、痰を飲む。抗う気概はあるか。毎度のごとく自問をしては、いつものように口を瞑ったまま。ただまっすぐ赤犬を見つめ、己の親指を握りしめる。ひどく喉が渇く。あくまで真実は曲げられないとして戦うヒトの言葉、抑圧するものをひょいと乗り越える言葉、どこかに隠れてはいないか。俺の右手が操縦桿を引き抜き、左手がキャップを捻る。真っ白な液体を頭から浴びせ、無様な自分を塗りつぶす。一三七センチ (E 二一四センチの世界に目を見開き、再び声にすべき言葉を探しはじめる。



## 結果として

俺はアクリル板の向こう側で深々と頭を下げる。すると、思っていたとおり一斉にフラッシュがたかれた。

いつだってテレビに向かって茶番だと揶揄していた。こんな俺にまさか順番が回ってくるとは思わなかった。

だって俺は一般人だぞ。

芸能人が一般人と結婚したという報道が流れると、端正な顔に笑みを浮かべる新婚さんに向かって「おまえは何様なんだ」と舌を打ったものだが、ここは大目に見てくださいと言いたい。一般人なんです。

「報道の内容は認めますか？」

記者が問いつめる。俺は今まで観てきた数々の茶番を思い返し、適当な言葉を摘まみ上げる。

「皆様に誤解を与えてしまったことには反省したい」

再び頭を下げると会場が瞬く。一つフレーズを発すると、妙な達成感がある。

何故、一般人の俺がこんなところに立っているのか。それは、同じく一般人であった妻が一気にブレイクしたからだ。SNSでちょいちょいアップしていた手抜き弁当エッセイが書籍化された。『ずぼら主婦の手抜き弁当』は、まさかの二〇〇万部。本年度のレシビ本大賞とエッセイ賞を同時受賞。

フェミニスト方面のヒトが「ずぼら主婦」に反応したが、妻が「駄目男を働かせるためには弁当で釣るのが一番」と発言したことが神対応とされ、次回のベストカップル賞にノミネートされるのではないかとさえ囁かれはじめたところだった。

「結局、コンビニ弁当だったということですね？」

記者たちは限定質問で俺を追い込む。

「弁当は食べてない。パンです」

頭を下げれば会場は瞬く。こんな日が来るなんて。日本中がテレビやスマホで俺を観ている。内心少々楽しくなっていた。期待に応えなければならないという使命感さえ湧いてきた。

つまらない質問はのらくらかわす。最後のフレーズはもう決めているのだ。妻だってこの顛末をまたSNSにアップしようとして企んでいるはずだ。期待に応えたいではないか。

「結局、奥様のお弁当を食べていたのですか？」

そこで俺は顔を上げる。会場で一番大きなカメラを真っ直ぐに見つめた。

「結果として事実と反するものがあつた。改めて事実関係を説明し、弁当を正したい」

俺は日本中が沸き立つ様子を思い浮かべながらフラッシュに目を細めた。

## 二〇一一年三月一日、備忘録。

その日は、奇しくもセガレが三歳を向かえる誕生日だった。翌日が休みだということもあり、俺は有給休暇をとって、家族三人で過ごすことにしていた。

セガレを小綺麗に飾り、襖の前に立たせて何度もシャッターを切る。そして、たくさん写真から視線が逸れているものを削除していった。

誕生日の記念撮影というわけではない。かねてから海外旅行したいと言うワイフのため、セガレの誕生日には皆でパスポートを取ろうと決めていたのだ。そこで厄介になるのは若いセガレの写真だ。スピード写真で撮ることははじめから諦めていた。インターネットでパスポート取得について調べると、写真紙に印刷すればデジカメ撮影でもいいとのことだった。

それらしく撮れた写真をパソコンに転送し、三五(E四五ミリメートル)に程よく顔が収まるよう加工する。そして、写真紙にプリントアウトした。

「上出来っ」

思いのほかうまくいったことに気をよくした俺は、自分たちの分も撮影することにした。

「外で撮ったら、七〇〇円はするだろ」

「そんなにする？ 四〇〇円くらいじゃなかったっけ？」

必要書類を確認にして、横浜のパスポートセンターへと出かけた。場所は日本大通り駅より徒歩五分。こんなところに日大キャンパスがあるのかしらと首を傾げたが、みなとみらい線に乗り換えれば、それはニホンダイドオリではなく、ニホンオオドオリであることを知る。横浜の埠頭からのびる西洋式街路であり、開港当時は物資や人々が行き交うメインストリートであったようだ。

改札を抜けると、すぐにスピード写真が設置されていた。

「やっぱり七〇〇円だよ」

パスポートセンターが近いからだろうか。少し歩けば、また同じような機械が設置されていた。

「こっちは四〇〇円」

この差は何かと首を傾げる。短くても五年は残る代物だ。三〇〇円の差で涙を呑みたくないだろうと思うが、そもそもデジカメで間に合わせたのだから何も言うまい。

平日にもかかわらず、パスポートセンターは随分と多くの人が列をなしていた。海外旅行など滅多にしない俺にとって、こんなにパスポート申請者が多いのは驚きであった。

整理券を引き抜いて、ジッとしていられないセガレを野放しにした。最近、数字に興味があるようで、カウンターに掲げられた番号を指さしながら、端から順番に「一」、「二」

と数えていった。数字を読み上げる度、当たっているのか俺に確認する。その度、俺も「一」、「二」と復唱した。

やがて順番が呼ばれ、電光掲示板に整理券と同じ番号が表示された。俺はセガレを抱え上げてカウンターへ向かう。そして、ワイフを椅子に座らせて背後から見守った。

ベテランの趣を感じさせる職員が手際よく書類の確認が進める。写真のチェックに差し掛かると、引き出しから虫眼鏡を取り出した。そして、書類に顔を寄せる。

「こちら、ご家庭で撮影されましたか？」

ワイフは一度俺に目配せしてから、恐る恐る頷いた。職員は写真を一枚ずつ丹念に眺めていく。

「襖かなにかの前で撮っていますね？」

ワイフは再び頷いた。数百円の写真代をケチったことを責められているのか。

「ちょっと紙っぽい柄が出てしまうかも知れませんが、まあ、問題ないでしょう」

職員は虫眼鏡を下ろすと、微笑みながら言った。

「写真、上手ですね」

俺の気分は一気に晴れ上がった。

「彼が撮ったんです」

ワイフがホッとした様子で職員に告げる。俺はいたく満足な気分でパスポート申請を終えた。

昼飯はファミリーレストランと決めていた。その名称に相応しく、小さな子供がいる家庭にとっては、なにかと便利である。背の高い子供椅子が用意されていることはもちろん、ご飯の大盛りが無料、そして、子供分のドリンクバー（スープ含）が無料である。

俺は、渋好きなセガレにあわせて、カレーの煮付け定食をご飯大盛りで注文した。

「子供のドリンクバーは？」

念のため確認する。ウエイトレスは誇らしげに「無料です」と答え、俺は頼まれてもいない微笑みを返した。

食事が届くと、俺は子供用のプラ皿に、大盛りご飯の大盛り分をよそって、骨を除いた煮魚を盛りつけた。すると、セガレはスプーンを握った右手と、本来、器を押さえるべき左手を駆使して、口の中へ運んでいった。

腹が満たされたところで、特別にドリンクバーの抹茶ミルクを二杯。もちろん、それが誕生日プレゼントというわけではない。本当のプレゼントは家に隠してあるのだ。

満腹になったセガレは瞼を重そうにしはじめた。子供の昼寝ほど嬉しい時間もない。ワイフにはこの辺りに来ると必ず立ち寄り手芸店があった。俺は彼女を買い物に行かせ、飲み放題のコーヒーで一息入れるつもりだった。

ワイフがそっとレストランを後にすると、想定外の事態が起きた。

セガレが眠らない。母親がいなくなったことに不安を覚えたのか、途端に目を覚ましてしまったのだ。腹が満たされた男児はもうジッとほしてられない。ゆっくりコーヒーなど飲めるはずもなく、諦めてレストランを後にした。

通りを挟んだ向こう側は山下公園だ。セガレを野放しにすると、やることは決まっている。船を指さす。「ヨット！」と叫ぶ。散歩中の犬に挨拶する。後ずさる。鳩を追いかける。カモメを追い払う。

一通りのイベントを終えると、公園の隅に設置されたレストハウスへと足を運んだ。店内には子供が遊べる設備がある。三歳になったばかりのセガレにはやや難易度の高い遊具だ。それでも、靴を脱がせてやると果敢によじ登ろうとしはじめた。そこには一〇人ばかりの子供たちが戯れており、なかには同じ背格好の子供もいた。言葉にならない奇声を上げて笑みを交わしている。来月にも幼稚園がはじまる。子供どうして笑い合う姿をみると、うまくやっていけそうだと、ホッとさせられる。

そして、一四時四六分。

「地震っ」

どこかのお母さんが声を上げて、遊具で遊ぶ子供に飛びついた。俺も慌ててセガレを抱え、脱がせた靴を拾い上げた。落ち着いた様子の店員がドアを開放すると、みんな一斉に外に飛び出した。海に面した公園が、まるで船の甲板のように揺れている。今まで経験のない大きな揺れだった。そして、長い。俺はセガレを抱えたままその場にしゃがみ込んだ。こんなところでは津波が来るのではないかと沖を眺めた。勿論、ワイフのことだって忘れてはいない。

「大丈夫」

俺はセガレを強く抱き寄せた。

しばらくして揺れがおさまると、とにかく海から離れようと考えた。公園の出口を目指しながら携帯電話を握る。ワイフと連絡をとろうとするが、一回目、電話が繋がらない。そして、二回目で電話は繋がった。あとになって思えば、奇跡的なことだ。居場所を尋ねると、ファミリーレストランに戻ったという。俺は山下公園にいることを伝え、パスポートセンターのある産業貿易センタービルの前で落ち合うことにした。

ワイフは眉を垂らして情けない顔になりながらも、手芸店内での騒動や、店の前の立体駐車場が大きく揺れていた様子などを興奮気味に話した。そして、買い物かごを放置したまま飛び出してきたとのことで、まず買い物を済ますため手芸店へ戻ることにした。

午後は、乗り物が好きなセガレのため、桜木町の「みなとみらい技術館」に連れていく予定だった。横浜ランドマークタワーのすぐ隣だ。これだけの地震があった後では、地下鉄を使う気になれず、桜木町まで歩くことにした。そこまで辿り着けば、自宅まで電車一本で帰ることもできた。

山下町からでもランドマークタワーは随分と大きく見える。その姿がとても逞しく思え、あそこにたどり着ければ何とでもなるような気がした。

水町通りを抜けると、「開港広場」という噴水公園がある。ここは日米和親条約締結の地であり、すぐとなりには横浜開港資料館がある。掲示板には、なんとも気になるポスターが貼られていた。そこに描かれた顰め面で頬を押さえるご婦人。「痛っ歯が痛い一歯科医学の誕生と横浜一」という企画展だそうだ。いい味を出している婦人画に目を奪われていると、再び大きな揺れが襲った。俺たちは小走りですぐ広場へ戻り、その場にしゃがみ込んだ。

「見てあれ」と、ワイフが声を上げた。

怖がりほど、怖いものがよく目につく。通りを挟んで向かいのビルが大きく揺れていた。材木よりも竹のほうが折れにくい。近年の高層建築は、少し揺れやすくできていると聞く。

しゃがみ込む人、オブジェに捕まって耐える人、広場は大きくどよめいた。そんな中でも、道路には多くの車が走っていた。彼らは気づいていないのだろうか。

揺れが収まると、俺たちは少しピッチを上げて歩き出した。とにかく、ランドマークタワーを目指そう。

途中、オフィスビルの外で、ヘルメットを被ったスーツ姿の集団が集まっていた。ビルの外へ避難したのだろう。そこで、今日が平日であることを思い出す。会社の皆はどうしているのだろうか、少々気がかりになった。

セガレのお尻を抱えていた腕が不意に温かくなり慌てて腕を引き抜いた。まだ袖が濡れるほどではないが、オムツが破裂しそうなほどに膨らんでいた。すぐにでもオムツ替えをしたいところだ。あたりを見渡せば、前方にみなとみらい線のロゴが見えている。「馬車道」駅への入り口だった。

駅のトイレを借りようと、小走りに階段を下ったところ、アナウンスが流れた。「津波の恐れがあるため、駅構内に立ち入らないでください」

俺はワイフと顔を見合わせ、慌てて階段を引き返した。なにはともあれ、ランドマークタワーだ。あそこに辿り着くことが全てのゴールのように思えてきた。

山下町から三〇分程度歩いたろうか。ようやくゴールイン。なにより多目的トイレへと駆け込んだ。無事、破裂の前にオムツ交換を終え、ホッと一息。ようやくプラザ内のベンチに落ち着くことができた。

館内では、どの線も電車が運休しているとのアナウンスが流れていた。大きな地震だったから無理もないだろう。しかし、山下町からここまで歩いてきた限りでは、たいして被害があるようには見えなかった。

「動くかなあ？」

ワイフの心配を他処に、俺はすぐに動き出すだろうと高をくくっていた。「震源って何処だったんだろうな？ 結構やばかったんじゃないか？」

ワイフの携帯電話は当時としては比較的新しい機種で、俺の骨董品とは違いワンセグ機能がついていた。とはいっても、ほとんど使ったことがない。四苦八苦したあげくに、どうにか受信、そこではじめて東北や北関東の様子を知った。それでも未だ被害状況は明確ではなく、小さな画面から読みとる限りでは、事の重大さが十分に理解できなかった。

セガレの気まぐれにつき合いながら、館内をしばらく散歩した。平日のランドマークタワープラザに来るのははじめてだった。人が多い割に、大半の店が閉まっている。平日はこんなものか。それとも、地震の影響なのだろうか。

博物館に行こうとは言い出さなかった。恐らく閉館しているだろうし、開いていても危険だろう。それに少し疲れていたせいもあった。

日が暮れはじめると、混雑を懸念して、早めに夕食を取ることにした。意志表示が十分にできないセガレだが、誕生日というもこともあり、何を食べたいか聞いてみる。

「うどん食びよ」

本当にうどんがいいのかと訝りながらも、リクエストに従ってうどん屋を探した。し

かし、残念ながら蕎麦屋しか見つけられなかった。そこは以前にも入ったことのある店だった。品のいい蕎麦屋にしてはボリュームがあって満足度が高い。メニューには、美味そうだし巻き卵の写真が載せられていた。ケーキのように見えないでもない。卵好きなセガレにはこれと決まり。あとは俺の蕎麦を分けてあげればいだろう。

うどんを食べたいと言っていたセガレだったが、文句一つ無く、だし巻き卵と蕎麦を口に運んでいった。満足そうではあったが、子供の誕生日に蕎麦屋とは少々味気ない。出汁巻き卵がバースデーケーキだったとはあまりに不憫だろう。夕食後には、タルトケーキで有名な喫茶に行くことにした。

パスタなどの食事もとれる店であり、夕食時でも混み合っていた。二組ほど順番を待ってからテーブルに着いた。セガレにはチョコレートケーキと決まっている。さらに、二人分の飲み物を注文した。ワイフは抜かりなく店頭で誕生日用の蝋燭が売られているのを見つけていた。

「蝋燭三本たてられます？」

「誕生日ですか？ お名前も入れられますが」

ウエイトレスは満面の営業スマイルを浮かべた。辺りを見回しても、震災の影は見られず、彼女の笑顔にも特に違和感はなかった。

やがて届いたチョコレートタルトには水色の細い蝋燭が三本、そいつは必要以上に大きな白い皿の中央に置かれており、タルトの周囲には、ストロベリーソースでHappy Birthday SEGAREの文字が描かれていた。

「誕生日おめでとう」

こちらが拍手をすれば、セガレも満面の笑みで手を叩いた。デジタルカメラで、懸命に蝋燭を吹き消そうとする姿をムービー撮影していると、横からワイフが吹き消した。

蝋燭を抜き取って、フォークを握らせる。セガレは器用に上から順にすくうようにして、口に運んでいった。それでもタルトが皿の上でよく滑る。皿に書かれたメッセージは無残に掻き消された。

堅いタルトの部分はお気に召さなかったようだ。俺はコーヒーの合間に少しずつ摘みながら口に運んだ。館内アナウンスによると、まだ電車は動いていないようだ。そして、五階のイベントスペースを休憩場所として解放するらしい。

俺たちは少々不安になりはじめた。

「まだ停まってるって」

「今日中に動くんだろか？」

「うちの方まで、バスってあったっけ？」

電車が動いていないのはよく分かった。しかし、ここにも今日中に帰られるのか分からない。食事とデザートを終え、体は十分に温まっていた。

「とにかく、駅まで行ってみよう」

セガレを抱え上げ、強い風の吹くビルの外に出ることにした。

桜木町の駅前まではムービングウォークが続いているが、地震の影響か、動いていなかった。寒い中でもセガレの機嫌は良く、真っ直ぐに延びる道を見ると「歩ける」と言いだした。フラフラと駆けていくその背中を追いかけながら、俺たちは駅前へ向かった。

ロータリーでは、どのバス乗り場にも長い行列ができていた。自宅の近くまで行ける

路線があったとしても、とても乗れる様子ではなかった。案内板の前では、職員の男性が眉を垂らしながら声を上げていた。

「いつバスが来るかは分かりません」

要するに乗ってくれるなということだろう。俺はセガレの背中をつつき、駅のほうまで走るよう促した。

途中、レンタカー屋の看板が見えた。これなら、タクシーで帰るより、ホテルに泊まるより、安上がりかもしれない。

「車を借りて、明日また返しに来てもいいよね」

それでも、電車で帰れるならば、それに越したことはない。ひとまず駅へ向かうことにした。地下鉄の改札には大勢の人が集まっていた。そして、知りたくなかったことがアナウンスされていた。

「今日中に電車が動く可能性は極めて低いです」

続いて、パシフィコ横浜が緊急避難所になっていると伝えた。つまり諦めて避難所へ向かえということだろう。子供を抱えて、途方に暮れていると、見知らぬ女性が声をかけてきた。

「このビルを管理している者です。小さなお子さんのために、避難場所を提供することにしましたが、いかがですか？」

親切心で声を掛けてくれたものと信じよう。しかし、大人は受け入れないとのことだ。子供たちだけで遊びに来た小中学生ならばありがたいだろうが、まだオムツも取れていない子供を一人で預けるわけにはいかないだろう。

「もう少し、帰る方法を考えてみます」と、ワイフは答えた。

「そうですか。この辺にいますから、いつでも声を掛けてください」

俺たちは小さく頭を下げ、その場を後にした。

最後の望みはレンタカーだったが、既に一台もないとのことだった。誰しも考えることは同じだ。

そこで決断した。

「パシフィコに泊まろう」

ワイフは頷いた。

外泊となれば、必要なものを揃えなくてはならない。オムツが足りない。お尻拭きやポケットティッシュも必要だろう。俺たちはドラッグストアを探し、それらを購入した。同じ店で軽食を購入することもできたが、どうも菓屋で飲食物を購入することに抵抗感がある。軽食は避難所へ向かう途中、コンビニで購入することにした。

それが失敗だった。避難所に向かうにつれて、同じ方向へ流れる人が増えていく。そして、途中のコンビニは缶詰状態だった。とても子連れで店に入れる状況ではなく、ワイフ一人が勇んで店内へと突入していった。

セガレを追いかけ回しながら店の外で待っていると、やがて疲れた様子のワイフが戻ってきた。

「お茶とチョコレートしか買えなかったよ。おにぎりとか、みんな売り切れ」

夕飯を早めに済ませておいて良かった。一晩だけのことだ。多少の飲み物があれば凌ぐことはできるだろう。



パシフィコ横浜に到着すると、奥の方へと人の流れが誘導されていた。一番北側のアネックスホールが避難場所のようだ。椅子と長テーブルが並べられた多目的室には、既に多くの人で埋め尽くされていた。廊下にも人が溢れ出し、みんな地べたに腰を下ろしている。どうせ夜になったら横になるだろう。俺たちも廊下の隅にスペースを見つけ、地べたに座ることにした。

辺りには、俺たちのような家族連れのほか、スーツ姿のビジネスマン、トランクを引きずった旅行者、学生の集団など、金曜日の夜ということもあって、様々な人たちの姿があった。

避難民と呼ぶほどの悲惨さはなく、皆、落ち着いた様子だった。男女は肩を寄せ合い、仕事上がりのビジネスマンはワンカップ片手に談笑していた。女子中学生の集団に至っては、どこからか探してきたパーティションで、自分たちだけの空間を区切り、修学旅行しながらに騒いでいた。

夜が更けると寒さは増したが、空調はなされており、イベント施設だけあって、トイレや授乳室などの設備も充実していた。家族三人で環境の整った避難所にいられたことは、不安を抱えながら家にいるよりも良かったかもしれない。

二三時を過ぎたころ、避難所のスタッフより、一部の列車が動き出したと情報が流れた。館内がざわめき、帰り支度をはじめめる者も出はじめた。

その時、思わぬ優しさに触れた。

「ジュースとお菓子ありますか？」

帰りがけの若者が、俺たちの前に立ち止まって、紙パックのジュースと開封済みのチョコレート菓子を差し出してきたのだ。若者の視線はセガレに向いている。小さい子供を気遣ってのことだろう。普段より親切は断らないことにしている。

「お帰りですか？ ありがとうございます。とても助かります」

若者の優しさに触れる出来事は、これだけではなかった。

深夜になると毛布の支給があった。俺たちはしばらくそれに気がつかず、第一便の毛布を受け取ることができなかった。第二便の予定はあるそうだが、道路の混雑で、いつになるかは分からないとのことだった。

はじめにワイフが長い列に並んでいた。俺はセガレを寝かそうと、コートに包んで抱えていたが、どうもうまく寝付けないうだ。腕の中で藻掻き続け、ついに泣き出してしまった。周囲の心配そうな視線が集まる。俺は行列のワイフに歩み寄り、セガレの世話を交代した。こんなところで慣れないことをするもんじゃない。普段から寝かしつけるのはワイフの役割なのだ。

間もなく、遠くに聞こえていたセガレの泣き声は止んだ。どうにか眠れたようだ。それでも、いつ来るか分からない毛布を待ち続けていると、ワイフが一人で小走りに駆け寄ってきた。

「どうした？」

「男の子が毛布を貸してくれたよ。あの子は毛布に包んで寝かしてある」

一緒に、お菓子も分けてくれたという。

セガレの毛布さえ手に入れば、自分たちはどうにでもなる。しかし、毛布を与えてくれた若者も寒いだろう。俺はやはり毛布を待つことにした。その間に、ペットボトルの

飲用水、そして、たくさんの蜜柑が届けられた。たった一晚の避難で、これだけの支援物資が届くことに驚かされた。

毛布を手にした時には、深夜二時をまわっていた。ようやく若者に毛布を返すことができ、俺たちも安心して眠りについた。

三時間くらい眠ると、寒くて目が覚めた。毛布をかけていても床が冷たい。とても長い時間は眠れなかった。それでも、眠気はいくらか引いていた。もう起きているほうが楽だろう。

トイレへ向かうと、同じように眠れず起きていた人たちが、みんな同じ新聞を読んでいた。一面には大きい見出しで、「東北、関東巨大地震」と書かれている。

トイレを出ると、神奈川新聞が配布されていた。号外かと思えば、しっかりした朝刊だ。なんて行き届いた支援だろう。俺はワイフとセガレが眠る場所まで戻って新聞を広げた。そこで震災の全体像をはじめて知ることになる。大寫しになった惨状の写真が並び、記事の内容はまるで頭に入らなかった。

新聞を捲る音で、ワイフが目目を覚ました。

「眠れた？」

ワイフはまだ眠そうな眼をして無言で頷いた。

次第に、みんな活動を再開しはじめた。始発で帰ろうという人は、夜も明けないうちに避難所を後にした。やがて薄明かりが差し込んでくると、セガレが起きてきた。

「おはよう」

笑顔を向ければ、満面の笑みが返ってくる。まったく強い子だ。愛おしい姿に両手を伸ばし、そっと抱き寄せた。お尻の下に腕を通せばオムツが異様に膨れている。途端、俺は顔を顰めた。

先に気づいてしまった以上、俺の役目だ。俺は溜息とともに立ち上がりセガレを抱えて授乳室へ向かった。小さくノックし、何も返答がないことを確認して扉を開くと、高校生くらいの女子集団が屯していた。まさか母親という訳ではないだろう。

「入ってもいいですか？」

更衣室を覗いてしまったような気まずさを感じたが、オムツのとれていない子供を抱えた俺が遠慮する場ではない。

「オムツ交換ですか？ どうぞ」

一人がボソリと呟き、俺は毛布の散らかった女子部屋に突入した。オムツ台にセガレを寝かせて、交換をはじめた。疲れていたのか、それとも、招かれざるオッサンがいるためか、皆、一様に無言を通していった。何だかプレッシャーを感じ、思わず手際が良くなる。俺はF1ピットクルー並のスピードでオムツを交換し、再びセガレを抱え上げた。

「失礼しました」

「こんなところで屯するなよ」

「暖かくていいところ見つけたね」

なんて言って部屋を後にすべきか考えあぐね、結局、無言で部屋を後にした。

子供は朝から元気だ。避難所を縦横無尽に歩き回るものだから、まだ眠っている人を蹴っ飛ばしはしないだろうかと冷や冷やする。起きている人々は疲れているだろうに、セガレに優しい笑顔を届けてくれた。

「帰ろうか」

十分に陽が昇ったところで、俺たちはその場を離れることにした。回収場所に毛布を積み上げ、避難所を支えてくれたスタッフの方々に礼を述べる。若者たちの優しさと救援物資でいっぱいになってしまった袋を下げて、避難所を後にした。

外の風はとても冷たかった。寒くて眠れないと思っていた避難所は、随分と暖かかったようだ。

さあ、家に帰ろう。一日遅れの誕生日プレゼントが待っている。

## マスクの下で

誰もが口を閉ざしたまま電車で揺られている。椅子取りゲームに負けた俺は左手に吊皮、右手にスマホ。マスクで口を塞いでいる。ヘッドホンで耳まで塞いでいる。鼓膜を擦るのはエブリデイ・アイ・ハヴ・ザ・ブルーズ。特別にブルーズが好きなのではない。多少ロックンロールに親和性があったから、BBキングくらいは聞いておこうとかつて蔦屋で借りたベスト盤。英語は苦手だ。何を言っているかさっぱり分からない。豊かな濁声は管楽器。所詮ニンゲンは一本の管だと聞いたことがある。肛門から息を吹き込めば聞こえてくるだろう君の声。エブリデイ・アイ・ハヴ・ザ・ブルーズ。おそらくそんな歌ではない。

なかなか心地のよい時代が来たものだ。出社することは悪とされる。実際ちょっとした罪悪感を抱いているのだからニンゲン社会の受け止め方は変わった。不要不急の出勤はするなと上司の上司は言う。不要不急かは各自で判断しろと上司は言う。GoToは一時停止で、ソーリーの会食は国民の誤解だそう。最近の都知事はヒット作に恵まれないが、その年の漢字は「蜜」。三つあったはずだけど、思い出そうとすれば四つ五つと出てくる出てくる。日常は窮屈で話題は退屈だ。

昭和の悪習が排除されはじめてるのは好ましい。ニンゲンの社会活動は確かに無駄が多い。生き物だか有機物だか知れない新型の輩が見事に打ち砕く。形式ばかりの顧客訪問に時間を割いても誰一人楽しい思いはしていなかった。週報に書き込めるネタができたと一時の安心。結局、年末の数字には結びつかない。リモートで顔色が伺えるようになった科学技術も尻を叩く。行かないほうがマナーですよ。呼ばれたら、あなたの責任で向かいますけど。

GoToはビジネストラベルを支援すれば良かったのではないか。個人を狙うより文句は出にくいだろう。企業への気遣いは好きでしょう。なんだかんだと訪問のニーズはなくなる。人数はなるべく削ります。密にはなりません。誤解です。

二週に一泊くらい、ホテルで一人きりになれた生活が懐かしい。夜な夜な缶酎ハイ片手にパソコンを叩いていると雑務が片付く。誰のためになっているのか知れない週報とかさ。なにより重要な経費精算とかさ。パソコン仕事が済んだなら、もう一缶開けてローカルタレントの深夜番組を眺める。乾いた笑いをもらして眠りにつく。なにかと気分も晴れた。しかし、雑務が溜まるのは無駄に歩き回っていたからにすぎなかったようだ。今となっては雑務も夕飯前に片がつく。

あんた今まで何してたの？

妻は思うだろう。俺だって思う。誰も疑うことのない日常業務とは恐ろしいものだ。本当に夜な夜なデスクに張り付いていなければどうにもならなかった。コアタイムを回っ

て、これ以上の追加業務が舞い込んでこないと確認できたら終業時刻を見積もる。明日からの出張に備えるには最低限あの依頼まではこなしておきたい。なにより安らかな週末を迎えることが重要だった。

俺が勤める会社は、もともと仕事上がりに同僚と呑んで帰るという風土がない。三〇分ほど終電が早まるという話題にメディアは騒いだが、俺はウェルカムだ。

カメラの前でテレビ向けの輩がはしゃぐ。選抜された酔っぱらいが世間の代表として映し出される。

「三〇分あればあと三杯いけますからね」

新橋駅西口 S L 広場。

「飲みニケーションって最後が肝心なんですよ」

カメラに映される赤ら顔。

「カラオケだったら五曲はいけるでしょう」

俺はポカンと阿呆面。あのサラリーマン風情は、不景気な会社の実体をまるで理解していない大根役者なのではないか。昭和生まれは昭和のまま死んでいくのだろう。

昨夜は久しぶりに大学時代の友人から連絡があった。

「俺、毎日フツーに職場行ってるけど」

「おまえ研究職だもんな」

博士課程まで進んだ美濃野、修士課程でやめた俺。この業界に関わることは嫌いでない。それでもどっぷり浸かれるほどの気概はなかった。

「清水よ、おまえは勝ち組だ。三流大学でドクターなんて取るもんじゃない」

美津濃は言う。一般的にはそうなのかもしれないが、そんな実感もない。

「で、なんか用があったんじゃないのか？」

「まあ、そう言うなよ」

デジャブを見ているような気がする。

何年前にも似たようなことがあった。当時はスマホではない携帯電話だった。一〇年以上前か。俺は美津濃ではない誰かに連絡を取ろうとしていた。間違えてプッシュしたのがあいつの番号だった。

「おまえから電話なんて珍しいな」

「ごめん。間違えて掛けちゃった」

「まあ、そう言うなよ」

続けてこうも言った。

「たとえ間違えて掛けたとしても、そう言うな」

そのあと一方的にあいつは話し続けて、一時間ほどしてから電話を切った。

今回もそんな流れになるのだろう。それなのにあいつは言葉をつながない。気の利かない俺は尋ねることしかできない。

「おまえ、間違えて電話したんじゃないのか？」

「たとえ間違えて掛けたとしても、そう言うな」

どうやら以前の電話を覚えているようだ。

「あの時、おまえは一方的に話し続けて電話を切ったよ」

「俺は何を話した？」

そう聞かれると何も覚えていない。

まあ、そう言うなよ。

たとえ間違えて掛けたとしても、そう言うな。

その二言だけが妙に心に残っている。それを伝えるべきか考えたが、あいつ自身、同じ言葉を口にしたのだから、気に入っているフレーズなのだろう。

「あの頃はまだスマホじゃなかった」

「フィーチャー・フォンだったな」

なんだそれはと尋ねれば、あいつはだらだらと携帯電話の歴史についてしゃべり続けた。ウィキペディアを検索して朗読しているのではないか。

電話を切って、布団にもぐっても、あいつの声が響いていた。おかげで寝つきが悪かった。

俺はスマホを見ているのも億劫になり、両手で吊皮を握る。自分の腕を枕にした。しわがれ声を子守唄に、ニンゲンは所詮一本の管だと言っていたのは美津濃であったことを思い返していた。

俺がロックンロールに親和性があったのも、美津濃とのお遊びによるものだった。

大学へ入学した初日だったと思う。美津濃は俺に声をかけてきた。

「バンドやろうぜ」

そんなことを言うくらいだから、なにか楽器ができるのかと思うじゃないか。

俺は自ら積極的に友達を作ることは苦手であったが、声をかけてきたやつとは仲良くなれるという妙な自信があった。運動のできない男が女と巡り会うにはバンドしかないという一般論も否定しない。俺にはそれを断る理由がなかった。

「なんだよ。楽器できないのかよ」

大学の食堂で竜田揚げカレーを食いながら、はじめに言い出したのは美津濃だった。

「おまえこそ、なんでバンドやろうなんて言い出したんだ」

「乗ってくるやつは楽器ができると思うだろう。おれは好きな言葉を歌いたいんだ」

美津濃はジャケットの内ポケットからロディアのリングノートパッドを取り出した。ポエムでも披露する気か。何枚かページを捲るあいつを、俺は眉を顰めて声で制す。

「いきなりオリジナル？」

出会って初日の男から自作の詩を送られても、ひきつる以外の対処ができない。美津濃は手を止めた。

「カバーより簡単だと思わないか？」

なんだっていいのであれば、そうかもしれない。俺は曖昧にうなづく。あいつが歌うのであれば、俺は必然的に楽器を演ることになる。

「幼稚園の鼓笛隊では小太鼓だった。その後だって、ピアノカトリコーダーしか手にしたことはない」

「ピアノか。ヤマハの売れ筋商品だな」

美津濃は一つ言葉を拾い上げると、自分の持っている知識を延々と話し続けるのが常だった。ヤマハ・ピアノとスズキ・メロディオンが鍵盤ハーモニカの二大メーカーであること。楽器のヤマハとバイクのヤマハ同じ傘下だが、楽器のスズキとバイクのスズキは無関係であること。そして、あいつは「ヤマハ発動機社歌」を口ずさみはじめた。谷山浩子作曲のその歌を俺も知っていた。親父がどこからか手に入れた非売品七インチEPを流していたから。知っている単語を拾って、知識を披露するあいつの姿が親父と重なる。コンポの最上段に積まれたレコードプレイヤーが回りはじめ、俺は鼓笛隊だった頃を思い出す。実際の幼稚園時代を思い出しているわけではない。アルバムにスクラップされた愛らしい姿。俺はプラスチックの箸を両手に持ち、お椀の縁を叩きはじめた。あれが二人にとっては初めてのセッションだったと言えよう。

美津濃は普段からバツタみたいなカワサキの二五〇CCに乗っていた。あまり縁のない社名を高らかに歌い上げ、俺はお椀を連打した。

「おまえ、小太鼓に決まりだな」

ドラムではないのか。テーブルに開かれたリングメモには何も書かれてはいなかった。そこに「清水(E小太鼓)」と書き込まれる。その時、隣のテーブルでは後に妻となる井澤がため息をついていたという。

ルーチンとは大したもの、眠っていても電車の乗り換えができる。夢遊病者の集団がエスカレーターを上り、スマホで改札をひっぱたいて他線に乗り換える。

緊急事態制限が解除され、第一波が過ぎたとされた頃、乗車率三〇パーセントの通勤列車が物珍しくて目が冴えた。ソーシャル・ディスタンスなんて聞き慣れない横文字にも、妙に気が張っていた。

第三波が到来してしばらく経ったが、戻り始めた乗車率が再び下がることはなかった。一五〇パーセントを越えた頃、通勤者はコロナ以前の夢遊病者に戻っていた。俺だってその一人。人波に流され、レールに運ばれる。マスクをして静かにしていれば大丈夫だろう。半年間なんともなかったのだから。過信というか、実感が無い。恐怖も薄れた。危機的状况なんてテレビの向こう側の話だと、とりあえず数字だけを追って唇を尖らせた。

会社にたどり着けば、大体決まったやつと顔を合わせる。同じ仕事をしている部署のメンバーと顔を合わせることは滅多にない。出勤の理由が業務の問題だとは言い切れない。オフィスはだんだんと要領の悪いやつらの巣窟となりつつある。

「おはようございます」

「おう、また来たな」

あんたもだろうと苦笑いを浮かべ、キーボードを叩くでかい身体の前輩社員に小首を垂れる。小さな会社だ。普段一緒に仕事をする事のない社員とも、部屋を同じにしている。滅多に会話することの無かった巨漢の沼田さん。最近では、妙な連帯感が生まれはじめる。

顔を合わせるたび、気になっていることがあった。でかい丸顔にはいつだって小さな布マスクをつけている。前首相のコロナ対策を象徴するアノマスクかしら。今更、本人

ですらつけていないアノマスク。会うたび同じものをつけているから思わず見入ってしまう。実際、アノマスクがどんなものであるのか俺はよく知らない。妻が開封もせずに生活困窮者の支援団体へ送ってしまったから。

マスクが小さいのか、顔がでかいだけなのか、白い布マスクはどうしたってあれを連想させる。聞いてみればいいのだろうが、何となく気がひける。ビジネス現場では政治と宗教の話は御法度であるとインプットされている。社員同士の会話ならば構わないだろう。それでも妻からアノマスクは完全な失策であったとインプットされている。俺はなにかとインプットされる。妻と沼田さんの意見が割れたらどうしましょう。

「二六〇億円あれば救える命がたくさんあったはずだ」

俺は彼女の意見を押し通せるだろうか。

「どうした？」

沼田さんが手を止めて顔を上げた。俺は、突っ立ったままぼんやりと考え事をしてきたようだ。鼻が出ているマスク顔に小さく首を振り、俺は自分のデスクについた。

なんでオフィスに来なければならなかったか。一番の目的はマニュアルの印刷と発送だった。製品の取り扱い説明に使う資料を事前に送っておきたかっただけ。急務ではないが不要ではない。

外出自粛が求められるようになり、リモートワークに必要なものを購入するため、ある程度の補助金が出た。ヘッドセットは許されたが、十万を越えるゲームチェアは承認がおりなかった。本当は、2アップ、両面でカラー印刷できるレーザープリンターが欲しかった。さすがに申請すらしなかったけれど。

そのため、資料を持って顧客訪問をする前には一度オフィスに来る必要がある。ほかにもやりようはあるのだろう。コンビニプリント？ キンコーズ？ 販売代理店に頼み込む？ 顧客にデジタルで送ってしまう？ 色々悩むより自分でやっしまえと考えるいつもの悪い癖。

考えろ、考えろと自分に言い聞かせてきた。

「別にいいんだよ」

考えろ、考えろ。

「拘りがないところが清水のいいところ」

今では、おまえも清水だろう。妻は時折名字で俺を呼ぶ。

考えろ、考えろと自分に言い聞かせてきた。

時折、聞き覚えのある哲学者の入門書を手にとって難しい顔をする。世界の有り様は、俺の捕らえ様。

考えろ、考えろ。それは美津濃や井澤と出会ってしまったから。スポンジのようになんでも吸い込む俺がこの二人に出会ってしまったから。

美津濃が学食に井澤を連れてきたのは、ゴールデンウィークが明けてからのことだ。「バンドやろうぜ」と声をかけたのだろうか。井澤はギターのソフトケースを背負ってい



た。突然、目の前に現れた本格派の女。小太鼓とピアノしか経験のない俺を、ちっぽけな自尊心が追い込みはじめた。

「ギターできんの？」

「これベース」

その時点で、俺はもう駄目なキャラを演じて生きていこうと心に決めた。

「俺、小太鼓」

両手で箸を持ち、お椀の縁を叩きはじめる。チントンシャン。井澤は上手に笑った。

大学サークルが集まる別館には、ドラムセットやアンプなどが置かれた練習スタジオがある。防音設備など一切無いただの部屋だ。腹に響くベースの音を響かせて、二本の指で一心に弦をはじき続ける井澤の姿に、美津濃は見惚れた。次第に心の底から惚れ込んだ。

気づいたときには井澤に声をかけていた。

「つきあってくれ」

三週連続で断られ、ゴールデンウィーク明けには、スタジオに乗り込んでマイクを握った。

「土に根をおろし、風とともに生きよう。種とともに冬を越え、鳥とともに春を歌おう」

美津濃は連呼した。何度となく。笑いがこらえられなくなった井澤は演奏を止めた。

「どんなに恐ろしい武器を持っても、たくさんの可哀想なロボットを操っても、土から離れては生きられないのよ」

美津濃は裏声を震わせる。

「金曜ロードショー観た？」

「観た観た」

俺は啞然とする。

「で、つきあってるわけ？」

美津濃はうなずき、俺は絶望した。

それでも彼女は俺の子供を身ごもっているのだから、人生なにがあるか分からない。

俺たちに子供ができたことをまだ美津濃は知らない。安定期に入ったから伝えておいてもよかった。それでも日頃から連絡を取り合っているわけでもない相手だ。生まれてからの報告でいいのではないかと考えていた。

彼女から美津濃の名前を口にすることはしない。妻なりの配慮なのだろう。在学中は恋人同士だったわけだから。

コロナ以降、美津濃は不安でも抱えているのだろうか。どうでもいい電話の頻度が上がっている。

「お前の家は相変わらずお好み焼きにブルドッグソースなのか？」

驚いた。あいつはそんなことまで知っているのか。子供のころからお好み焼きがおいしいと思ったことがなかった。おかかかける。青のりもかける。当時、マヨネーズが細く出る容器など関東圏の我が家にはなかった。そんなものは箸で伸ばせばいい。しかし、なにより我が家のお好み焼きがいけてなかったのは、ブルドッグソースだったから。中濃とウスターは揃えていた。ドロドロかサラサラか以外に味の違いは分からない餓鬼

だった。これが家庭のお好み焼きというものなのだろう。母親に出された飯を受け入れないほど質の悪い餓鬼でもなかった。

野菜と畜肉を小麦粉で固めた料理を黙々と噛みしめていた。健気なあの頃がよみがえる。俺はスマホを握りながら随分と黙っていたのだろう。美津濃はなにか踏んではならない地雷でも踏んでしまったのではないかと俺の様子を伺った。英語で。

「アー・ユー・オーケイ？」

この場合はそれでいいのか？俺はなお余計な思考を回す。アー・ユー・オーケイ？は通常、ヒトの体調を伺うものであって、お好み焼きにブルドックソースをかけていいのか尋ねたいのであれば、イズ・イット・オーケイ？もしくはアー・ユー・オーケイ・ウィズ・ザット？

でも、俺の様子を尋ねたのかもしれない。

「おたふくだよ」

俺は答えた。

「残念」

「残念？」

「おまえのブルドックソースで食うお好み焼きというのが妙に頭に残っていてな。コンビニでたまに売ってるだろう。ミニチュアボトルみたいなブルドックソース。わざわざあれを買って試してみたんだよ。お好み焼きにブルドックソース中濃」

「どうだった？」

「食えないことは無いけど、美味くないわな」

ウマクナイワナ。そんな諸島があったような。スペイン語圏の流行歌があったような。どうも、こいつと話していると思いがしっちゃかめっちゃかになる。

「で、なんの電話だったんだ？」

「まあ、そう言うなよ」

それからあいつは一時間ほどベジタブルソースについて喋り続けて電話を切った。俺はまたうまく眠れない夜を迎える。

寝つきが悪いのはおそらく美津濃だけのせいではない。たまに罪悪感を抱えて会社へ行くことがあるにしても、一週間と外にでないことだってある。脳味噌ばかりで筋肉を酷使していないからだろう、眠りが浅い。かつては会社の往復だけで毎日三時間を要していた。なんだかだと歩く。乗車中だって人に揉まれながら直立を維持する。

筋トレの趣味でもあったらよかったのかも知れない。もともと時間の使い道がない俺だ。焼酎を舐めながら報道番組を眺めていても、連日似たような内容で、スマホを確認すれば一〇分で済む。テレビに向かって憤る妻の姿も見たくない。腹の子にも具合が悪そうさ。

横になって本でも読んでみようかと普段より二時間も早く布団にもぐる。活字が誘われて眠りについたところでそこは浅瀬だ。以前だったら考えられない八時間睡眠だよ。夢の上演時間だって長い。夜中に目を覚ますことも増えた。B級映画の二本立てだ。

夢はモノクロと聞かすが、誰もそうなのだろうか。俺は大抵カラーだけど。世界は薄暗いけれど、うっすら色はついている。だから余計にみすばらしい。身体が言うことを聞かない。よく見えない。よく聞こえない。割と半裸で、大抵のことは失敗で終わる。妙

に疲れて目を覚ます。それでも夢を見るのが嫌いではない。

本来ヒトは毎晩夢を見るものだって。だれかのインプット。朝起きて何も覚えていなかったならば見ていなかったことと同じだろう。ヒトは毎晩夢を見ると唱えた学者は、毎日八時間布団にもぐっていたのだろう。夢を糧に研究をしていたのであれば、もっと寝ていたかも知れない。

俺は新しい仮説を立てる。夢くらい見ない日があってもいいだろう。そして、眠る時間が長いほど夢を見る確率は上がる。八時間以上を眠る日を三日、五時間しか眠らない日を三日、 $n = 3$ の実験を行えば一週間で有意差を求めることができるだろう。

「バイトくびになった。ってか、店閉めるんだってよ」

線路の向こうにショッピングモールが完成したのは大学二年目の夏だ。

「商店街、大分やばくなってきたね」

俺はドラムセットを前に小太鼓以外も叩けるようになっていた。「ヤマハ発動機社歌」、「金曜ロードショー」、そのほかにもレパートリーは増え、いずれはライブハウスに立とうと目論んだ。

井澤がはじき出すベースに腹筋が刺激され、俺はバスドラムとハイハットを交互に踏み鳴らし、井澤のリズムにしがみつく。そして、美津濃はマイクに囁みついた。

「資本の増殖が第一です。奴隷の平和で満足です。抑圧された俺たちを政治屋さん達は救っちゃくれません」

バイトのくびがショックだったのか、美津濃は昼間っから酒を流し込んでいた。饒舌に御託を並べはじめると、そこに井澤がコーラスを挟み込んだ。

「格差、格差」

「貧民は見殺しだ」

「格差、格差」

「嗚呼みんな疲弊したよ」

俺は苦笑いを浮かべ、スタジオの外へダダ漏れする美津濃の声をかき消すようにドラムを乱打した。すると、あいつは俺が盛り上がったものと勘違いする。

「反米で自立が第一です。積極的平和で解決です。教育された俺たちを散々笑って馬鹿だと言いました」

「馬鹿だ、馬鹿だ」

「先人の人柱」

「馬鹿だ、馬鹿だ」

「自虐思想うんざりだよ」

途端、井澤は演奏を止めてマイクを握った。

「ちょっと待って、その二番なんなの？」

曲の途中で語り挟むやつかしら。即興ではじまった演奏をどうしたらいいものかはかりかね、俺はライドシンバルを一定のリズムで打ち続ける。

「この生きづらさは戦後日本がモノと金にしか価値を見いだせないからだ、ろう？」

「アグリー」

「政治家がアメリカと大企業のいいなりで法律をつくりかえるからだ、ろう？」

「アグリー」

ドタドン。バスを踏んでタムを打つ。

「対米自立で誇りを取り戻すんだよ」

「なにそれ？」

井澤はイライラとした指先で、再び弦を弾き始める。

「爺ちゃんはこの国を嘆いて死んだよ。自国の憲法で自分たちを護ることもできないこの見せかけの平和を」

「あれからずっと戦後が続いているじゃない。この発展もあなたのお爺ちゃんが懸命に頑張ってくれたからでしょう」

「この国のあり方が満足か？」

「満足とは言わない。でも、この平和憲法が唯一の救い」

「交戦権は国際ルールで認められている。積極的に平和を求めるためには米軍を追いだして再軍備する事が必要だと思うだ、ろう？」

「再軍備なんて死の商人たちが喜ぶだけ。あんたの嫌っているアメリカの企業や投資家が私腹を肥やすだけじゃない」

スタジオの外に唾然とした顔が並び始める。

「俺はこの国に誇りを持って生きていたいだけなんだよ」

「変えるべきは憲法じゃなくて、飽和した資本主義社会」

俺は変調し、エイトビートを叩きはじめた。井澤の指が弦の上を走り出す。

「格差、格差」

「貧民は見殺しだ」

「格差、格差」

「嗚呼みんな疲弊したよ」

ドラムを叩いているくせに、今まで曲をリードしたことが無かった。俺に引きずられて曲が加速する。あら快感。まあ快感。次第に気分が乗ってきた。

「馬鹿だ、馬鹿だ」

「先人の人柱」

「馬鹿だ、馬鹿だ」

「自虐思想うんざりだよ」

最後には「格差」と「馬鹿だ」が連呼され、スタジオの外から格差にうんざりした馬鹿どもが押し寄せてきた。ここは農学部。比較的恵まれた貧乏人の大学だ。狭いスタジオのなかで馬鹿どものモッシュがはじまる。スタジオの中心で背中合わせに声を上げる美津濃と井澤。そいつを軸に馬鹿どものシステムが回転し始める。回るはバター。若いだけで上質なバターだ。あとはバターになってドロドロと流れ出すだけだ。

年末になれば美津濃とウェブで飲み会なんかをしている。こんなことでもなかったら俺たち三人が再び顔を合わせることもなかっただろう。誘ってきたのはやっぱり美津濃だった。

「ZOOMでいつでもいい」

そう言われてしまうと断る理由はなかなか探せない。

美津濃は自らの不遇に一通りの愚痴を垂れた後、手のひらを返す。

「でも、コロナって言うておけば予算が取れるからな。シンプルっちゃシンプルだ」

「おまえ農学博士だよな？」

「いい加減な作文は昔から得意なんだよ」

彼女は笑い声を漏らしながら何度も頷いた。

あいつは俺以上に井澤の笑顔を拝みたかったはずだ。彼女が楽しそうにしてくれて正直ホッとしている。

「毎日、研究室通ってんのか？」

俺は適当に間をつなぐ。

「なんも変わっちゃないよ。変わっちゃないから不満の垂らしようがない。国から金もらって、国のために働く。俺向きだろ？」

「誇りを持って生きてるか？」

「必要とされる生き方したいだろう」

「相変わらずドMだな」

妻を味方に俺は多少饒舌になる。美津濃はカメラに向かって拳を突き出した。

「まあ、誇らしげに語れるような仕事じゃないけどな。農学にコロナってのは、やっぱ無理がある」

美津濃は笑った。そこを認めるか。一体どんな作文をしたら予算がとれるものなのか、俺には全く想像ができない。そこを問いつめるのは井澤の仕事だ。

「ステイホームと治産地消って何とかうまく絡められない？ 水産省支援でGy o T o魚屋キャンペーンとかやってたじゃない。小さな世界で生きることが迫られているんだから、これを機に地域の活性が進めばいいと思うけど」

「井澤らしいね。そんな課題に国が金を付けるわけないだろう。デカイ金が動かないと不安で仕方がないんだ。そもそも農業経済は俺の専門じゃない。食べるワクチンって聞いたことないか？ インフルでは進んでるんだよ。遺伝子組み替えの作物にワクチンを発現させるって技術」

そんなもの聞いたことがない。二人揃って首を傾げる。

「遺伝子組み換えって聞くと、食べ物だとおまえらはいちいちドン引きするだろう。でも、どうだ？ 食べて効くワクチンなんて聞こえがいいと思わないか？」

「おまえ有機農法がメインテーマじゃないの？」

俺の問いに、井澤が重ねる。

「土に根をおろし、風とともに生きよう。種とともに冬を越え、鳥とともに春を歌おう」

美津濃は裏声で呼応した。

「どんなに恐ろしい武器を持っても、たくさんの可哀想なロボットを操っても、土から離れては生きられないのよ」

そいつは十分嫉妬に値する。それっておまえ等がつき合うきっかけになった金曜ロードショーだろう。

眉間にしわを寄せてウィスキーを呷れば、美津濃は何かを察した。

「井澤、呑んでないね。酒呑めなかったっけ？」

彼女は俺に視線を送る。傾げた首の角度で理解する。

「子供できたんだよ」

ZOOMのレコーディングでもしておけばよかった。他人のことに涙を浮かべて喜べるヤツがいるものなのか。俺はあいつの姿にいたく感動したのだ。

結局、俺たちは在学中にライブハウスで演奏する事は無かった。ライブハウスに金を払わなくても、防音壁のない学内スタジオにオーディエンスが流れ込んで来たから。

美津濃と井澤には華があった。つまらん小芝居でもどこか見応えがあったのだろう。小芝居。そう。こいつらのやりとりはどうも芝居じみている。常々思っていた。度々癪に障った。

「俺は無力だ」

美津濃が叫べば、俺は心の中で「うるせえ」と思いながらクラッシュシンバルをひっぱたいた。それでもあいつは繰り返す。

「俺は無力だ」

声が震えていた。泣いていたのかも知れない。あいつはスタジオで大抵俺に背を向けているからその表情は読めない。

「生まれた場所だけで特権的な地位が与えられるなんて、ニンゲン社会に有り得ない」

二人は方向性が違っていたが、井澤の挟み込むフレーズが、時に美津濃を慰め、時に喚起した。

そして、美津濃はこうも言った。

「一番の敵は無関心だよ」

それは俺に向けられた言葉なのではないか。ムシャクシャするとエイトビートに変調した。そして、最後には「格差」と「馬鹿だ」が連呼され、スタジオの外から貧乏人の馬鹿どもが押し寄せてきた。そして、二人を軸としたシステムが回転をはじめ。やがてバターになるのが常だった。

今となっては懐かしい思い出だ。記憶は多少曖昧だ。

全ての問題は新しい年に持ち越された。

未曾有の事態は克服できず、新しい年には平時となるのだろう。せめて医療従事者を増やせ。金をばらまけ。新しい雇用を生み出せ。ノンポリだった俺にだって無様な世界がよく見える。

有要不急でオフィスへ向かえば、相変わらず沼田さんとそのほかよく顔を合わせる数名。生真面目と呼ぶべきか、柔軟性がないと捉えるべきか。

そして、今春、俺は父親になる。

それなのに毎日のように腹を立てている。ムカついているんだ。イライラしているんだ。自分が腹を立てていることを理解している。妻にバレていることも承知している。

仕事のせいだとしてみよう。たしかに仕事はしんどい。その反面、仕事をさせてもらっていることに感謝の気持ちを持つことだってできる。仕事を苦に自殺しようだなんて

思ったこともない。転職したいなんて気持ちもさらさら無い。どうしたって生活には金が必要だ。

そいつを資本主義のせいだとしてみよう。二人からのインプットも大いに影響している。確かに不愉快だ。もともと金を生み出すという活動に興味を持ってない。それでも生きていくために必要な金は稼がねばならん。十分な金がなければ楽しく生きていけない。大半が廃棄されるものに高値を付けて増産する会社組織。上に登って見下ろしたい景色などない。脱線しようにも行き場がない。なんだかんだと居座り続け、一〇年はとうに越している。底辺で這いつくばって一〇年。生産性向上という言葉に虫唾が走る。二桁成長を鼻で笑う。それでも居座り続けなければ生活が守れない。

ある日、沼田さんはポツリ呟いた。

「なんで現状維持が許されないのだろうな」

どんな上司の教科書的な言葉よりも響いた。

「現状維持」

上等じゃないか。

家族に八つ当たりをしてみよう。妻はいつだって俺を褒める。ニンゲンが実によくできている。本当にそうなのか。そいつは俺に違和感しか与えない。褒め続けるおまえが不憫で仕方がない。本心でそうなのか。全て計算の上で俺を持ち上げようというのであれば、その小芝居はやはりどこか癪に障る。

そして、もういい歳だ。きっと歳のせいだ。更年期障害だ。ふわふわの不惑。俺はふわふわ憤る。なにものにも惑わされずに憤る。会社に、システムに、家族に、そして、ゆがんだこの身体にも。しなやかさを無くした筋肉、ノートパソコンに首を垂らしてキーを打ち続けていることに三〇分と持たない。エルゴノミクスの重要さが身に染みる。腰の違和感。背骨の痛み。たるんだ腹。脹ら脛がこるのは何故だ。肉体の全てが不愉快だ。

他にはないか？

もっともって俺は不愉快なはずだ。そうだ。薬はどうだ？ 朝に一錠、夕に二錠、毎日飲み続けている薬があるじゃないか。あれのせいだ。きっと副作用だ。未だジェネリックの許されない高額な薬。でも、この医療制度はなかなかのものよね。なんて、システムが貧乏人を護るのは当然だ。護られていることすら不愉快に思えてくるのは何故だ。

貧乏人はシステムに追い込まれ、システムから護るための方策を求める。回り回って不愉快の根本はこのシステムにあると着地する。市場原理主義を止められない理由はなんだ。資本家様に巨額の富を与えて政策とする。アメリカさんに都合のいい法律をプレゼントして外交とする。格差を広げることで自分の立ち位置を固守する。黙って一票を投じなさい。お友達になろうよ。いつかあなたも甘い蜜を吸うことができるかもしれないよ。

かつて美津濃と井澤が嘆いていた世界があった。俺はようやく気づく。今も何ら変わっていない。延々と未来へ繋がる時間。それすら不愉快だ。これから生まれてくる俺たちの子供に、まともな世界を用意できる自信がない。当てつけに「勉強しなさい」などと言うのだろう。学業の先に何があるのか、うまく伝えることができない。「将来の選択肢を増やすためだ」と、聞こえのいいフレーズでお茶を濁す。このシステムが不愉快で仕方がないのに、このシステムの中でしか将来への道筋を立てることができない。

そして、何も成しえないまま消えていくであろう自分が不愉快だ。

「俺は無力だ」

あいつはずいぶん前から気づいていた。

俺は簡単にインプットされる質だから、最近では黄ばんだ本を手に取り、先人の記録に救いを求める。世界は解釈した通り目の前に現れると説いた者がいる。それはなかなか都合のいいシステムだ。それでいい。全てフィクションだったとしておこう。俺は今まで過ごしてきた時間と同じくらい生き続けるのだろう。長いよ。不愉快は続くよ。どこまでも。

最近では、リモートワークの合間にキーボードを叩いている。このフィクションを吐き出さないと気が狂いそうなんだ。

通勤電車の中では、スマホを片手にそいつを読み上げている。マスクの下でもごもごと文句を垂れる。垂らし続けて生涯を終える。全ては創作だった。なにもかもが癩に障る小芝居だった。

そして、今、俺は姿見の前に立つ妻をぼんやり眺めている。奥歯を嚙んで、日に日に大きく突き出るその腹に怯えている。



## ヒカリノドケキ

紀野は毛が薄くなってきたと感じはじめていた。もう髪型を楽しむ歳ではないのだろうと、ひと思いにバリカンを購入することに決めた。よく耳にするひげ剃りメーカーのそれは高価であるが、聞いたこともないメーカーの製品であれば格安カットへ二回通った程度でもとがとれる。星は四つ半。

週末朝早く、風呂場で全裸になって一八ミリメートルのコームで刈り落とす。ラスト・フォー・ライフをハミングしながらバリカンを滑らせる。世代的にトレインスポッティングのユアン・マクレガーを意識してしまう。禿からの逃避ではないのだと己に言い聞かせ、お洒落ボウズなのよとバリカンを楽しむ。ファン・マクレガー程度になったなら、風呂場の排水溝に台所のゴミ取りネットを装着してシャワーで全身にまとわりついた毛を洗い流した。

かつて自身の一部であった毛を回収して、トランクス一枚で風呂場から出たところ、寝間着姿の妻に見つかった。擦った目を丸める。

「え」

続く言葉には三秒の間があいた。

「いいじゃん」

紀野は口角を持ち上げ回収した毛を掲げた。それはもう誰のものでもない燃えるゴミ。

それから二週に一度は頭にバリカンを滑らせている。次第に事前準備や心の持ちようなども心得てきた。

妻はブラッド・ピットを思い浮かべたかもしれない。弛んだ腹に力を込める。かつて一緒に観た映画、最後にボウズ頭を魅せたカルトムービーに倣い、紀野はバリカン・クラブ規則を立てた。

第一条 バリカンする日については口にはいけぬ。

第二条 バリカンする日については口にはいけぬ。

第三条 バリカンは一人で行う。

第四条 シャツもパンツも脱いで全裸で行う。

第五条 前日から風呂場をしっかりと乾燥させておく。

第六条 バリカンはかならず家族が寝静まっている早朝に行わなければならない。

この第五条は割と重要で、乾燥した風呂場であれば手のひらで毛を回収することができた。ゴミ取りネットを排水溝にセットする必要もない。前日からドアを開け放ってお

けば風呂場は十分に乾く。そして、まだ誰も風呂を使用していない早朝に毛を刈る。静まりきった風呂場で全裸男が一人、バリカンのバイブレーションを響かせる。

首を下げて襟足から旋毛に向かって後頭部を刈るとき、舌が応でもあいつが目が付く。頭より豊富な毛を蓄えたあいつ。

「おまえも刈って欲しいか？」

紀野は左右に腰を振る。

手の施しようのない馬鹿げた行為が行われていることを妻は知らない。わざわざ白状するほどのことでもない。妻だって一つや二つどうしようもない秘密を持っているだろう。

「お父さん上手だよ。あんたもやってもらえば？」

紀野の妻はしきりに息子へバリカンをすすめる。新陳代謝の激しい年頃だ。髪を短くしてもらいたいという気持ちは分からないでもない。しかし、やたら毛の多い息子は妻の思いに反して短髪を好まない。眉間にしわを寄せてプリンを頬張る。紀野はビッグプッチプリン、妻は隣駅のスーパーでしか手に入らないというナントカプリン、チョコ菓子ばかりを好む息子は見栄えのしないチョコプリン。いつだって食い終わるのは紀野が一番速い。手持ち無沙汰になって、指先で頭頂を刺激する。あまりやり過ぎると禿を気にしていると誤解されそうで、頭上で手を組んで背筋を伸ばす。

ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ

まだ残暑の厳しい中、そんな一句を思い出している。

紀野がまだ息子と同じ年頃、学校では百人一首をどれだけ覚えているのかが一つのステータスとなっていた。暗記が苦手な紀野にとって、それは苦痛でしかない。

「暗記しようとするからいけない。その句に描かれている情景を理解すればいい」

先生、そいつはなお無理だよ。

しかし、妙なものがフックとなって記憶に残る一句もある。「どけき」とは一体なんなのだ。競技かるたがはじまれば、なにより紀友規の居場所を探した。苗字が同じであったことにも愛着が湧いた。

「どけき」とは「退け器」と書くのだろう。小僧だった紀野なりにその句の世界を解釈する。光の退け器は、強力な光を発することで敵を撃退する武器のようなものに違いない。春の日に散る花と聞けば桜であることくらい連想できた。紀友規にとって思い入れの強い木だったのであろう。シェル・シルヴァスタイン『おおきな木』とも重なった。桜吹雪の舞い散る中、賢明におおきな桜を守る友規。余りに強い光を放つ退け器のせい、その実体が何であるのか見当もつかない。

最近では桜のイメージも随分とダウンした。新宿御苑で私利私欲にまみれた連中を一掃する友規を夢想してしまう。

「なあ友規、おまえの学校ツーブロックはありなの？」

チョコプリンのスプーンを止めた息子はあまりいい顔をしない。

「別に問題ないけど」

バリカンを購入する以前に、ネット動画でセルフカットの下調べをしていた。そこにはやたらとツーブロックの刈り方がアップされていた。なるほど、もみあげから襟足までをバリカンで刈ってしまう分、素人にも簡単なようだ。

妻はナントカプリンを愛おしそうにチビチビ食べ続ける。

「都立の高校が駄目だったんだっけ？」

以前そんな報道がにぎわった。

「外見等が原因で事件や事故にあうケースなどがございますため」

友規は教育委員会的な声で答える。

紀野の「誰それ？」と妻の「何それ？」が重なる。そして、彼女のスイッチが入った。

「髪型一つで事件に巻き込まれたら堪んない。ツーブロックなんてボウズ頭にヅラをのせたみたいなものじゃない。人相が悪いヤツだったらボウズ頭だけの方がよっぽど事件に巻き込まれそう。あ、別にお父さんのボウズが駄目って訳じゃないけど。そもそも、キミは人相悪くないしね。どっちか言うとトッチャン坊やじゃない。童顔童顔。ヅラのつけてツーブロックにしたら可愛くなりすぎる。あ、別にヅラをのせるって、別にあれだから、あれ？」

途端スイッチが切れる。旦那を前に毛の話題は相応しくないと考えたのだろう。そして、友規が被害を被る。

「あんた、お父さんにツーブロックにしてもらいなさいよ。床屋もさ、なんか行きにくくなったじゃない」

バリカン購入に至った理由として、昨今の状況を鑑みたのも一つだ。

友規は、首を固定したまま、いつまでもプリンを噛み続けた。

コームを取り付けてダイアルをお好みの長さにセットすれば、あとはそいつで頭を撫で回すだけ。ボウズ頭を造り上げることに大した技術は要らない。それでも今まで経験のなかったことが、なかなかの出来映えで仕上がるとどこか気分がいい。

はじめてオンライン会議でボウズ頭を披露した時、ボスや同僚の反応は上々であった。子供の強制的なボウズには悲劇的なものを感じるが、おっさんの自発的なボウズはイメージが悪くない。

「清められましたか」

誰かの妙なコメントに場が和む。ボウズ頭は会議に程良いアイスブレイクをもたらした。

ボスがその発表をしたのは、紀野がボウズ頭を披露したまさにそのミーティングでのことだった。

「一時止めていたあのプロジェクトな。ヒカリノドケキを再開することにする」

紀野は耳を疑った。

「プロジェクトリーダーは、引き続き紀野でいきたい」

「え、でも、あれは光が強すぎるって」

「そうだ。問題が明確であることは逆に取り組みやすい。光を極力抑えた退け器に取り組んで欲しいんだ」

ボスは話を続けた。

「ソーシャルディスタンスが求められる今だからこそ退け器が必要になる。行列のできる店、子供同士の距離をとることが難しい保育現場、通勤電車も密になってきた。きっとニーズは多いだろう」

「新しい光の退け器か」

紀野はつぶやいた。単に眩しいというだけの退け器では駄目。光の持つ僅かな圧力を利用するか。光速度不変の原理を利用して空間を歪めてしまうか。光を減速させる技術は応用できないか。一人、ブレインストーミングをしている間に、ボスの口からプロジェクトメンバーが指名されていく。堀河、小野、蟬丸。

「自粛自粛でキミガタメの売り上げは激減している。まだシノブレとアサボラケが踏ん張っているからやっていけるが、新しい生活様式に適應したこれからの技術を提案していきたい。ヒカリノドケキは時代のニーズに合っている。紀野、そうだろう？」

急なご指名に慌てて口を動かしながら言葉を探す。

「ミュート、ミュート」

そうではない。そうだろうと問われても確信が持てない。

「あの、じゃ、まず近々プロジェクトのメンバーでミーティングしましょうか。二年ぶりの再開なんで、ちょっと当時の図面とか問題箇所とか見直しておきます。その辺のシェアと、今後に向けてのアイデア出しをさせてください」

当たり障り無い発言でその場をしのげば、ボスは早々ミーティングを締めはじめる。

「オーケー。シノブレとアサボラケの販売活動も引き続き頼むぞ。このピンチをなんとかチャンスに変えよう。ヒカリノドケキのキックオフには俺も呼んでな。じゃあ、今週も頑張りましょう」

別れがあれば再開もあり。まさにここは逢坂の関。

蟬丸は会議チャットに書き込んだ。

小さな頭にネックウォーマーを斜めに被せバリカンを構える。刈り上げたいところ以外を隠してしまえば失敗しない。ネット動画でそんな情報を得ていた。紀野は慣れたふりをして友規に安心感を与えつつ、恐る恐るバリカンを滑らせた。

ある程度刈ったところで髪を押さえ込んでいたネックウォーマーを外した。悪くないのではないか。気分が乗ってくれば他のことを考える余裕も生まれる。

ヒカリノドケキ再開にあたって、子供たちの置かれている状況をヒアリングすべきと考えていた。

「おまえの学校、ソーシャルディスタンスとかどうなってんの？」

「は？」

パンツ一枚でバスチェアに腰を下ろした背中に、クエスチョンマークが浮かぶ。

「授業中マスクしてるわけ？」

「してるよ」

「隣の女の子とかと席が離れてたりするわけ？」

「それ小学校でしょ。中学はもともと机くっつけてないから」

そうなのか。コロナ禍でなくとも、そもそも近年の標準的な学校生活を知らない。中学生ともなれば座ってられない小僧も少ないだろう。席について前を向いている分には、感染リスクは小さいようにも思う。

むしろ自由闊達な学業が望まれるのは大学で、再開が進まない理由は講義以外の時間が重視されるからなのだと聞いた。保育現場に続くニーズは荒ぶる大学生なのか。屋上で鍋を囲みながら騒いでいたあの頃を思い返す。

「体育の授業とかはどうなんよ。なんか対策してんの？」

ヒカリノドケキ成功のキーはどこかにないか。

「体育は、そんなことより熱中症」

そっちできましたか。

「水飲む時間と決まってるわけ？」

「別に決まってないけど、こまめに飲めって」

締め切った風呂場に男が二人。紀野は頼りない背中から活発に放出される赤外線を目を細める。

「暑いよな」

「昔、こんなじゃなかったんでしょう？」

まだ紀野が校庭で全速疾走できた頃、町中に設置されたスピーカーからは時折光化学スモッグ注意報が流れた。しかし、高温注意情報などというものを耳にすることはなかった。熱中症という言葉も普及しておらず、日射病に気をつけろとは言われたが、ほとんど帽子すら被らなかった。

「そうだな」

「なんで？」

曇りのない視線が鏡に反射する。

「それは、あれだ。どんなモノだってその温度に応じた量の赤外線を出している。太陽自体もそうだし、暖められた地面もそう。大気中の二酸化炭素、メタン、フロン、水蒸気なんかはそいつを吸収して散乱させる。だから、あれ？」

そんなことを聞かれているのではないのだろう。偉そうに知識を披露しながら、もみあげを処理するふりをして鏡の外へ逃げる。

「このピンチをなんとかチャンスに変えよう」

ボスの声を思い返す。

ボスの言葉ではない。最近、誰もが口にしていて、そいつを耳にする度いつも違和感を覚える。この世界は、再びひさかたの光のどけき春の日を迎えることができるのか。ピンチから目を反らすべきではない。そいつには同意だ。紀野は鏡へ映り込み、友規の視線を受け入れる。息子は父親を疑うように眉を歪めていた。

チャンスに変える必要はあるのかい？

しかし、それより左右のバランスが問題なのだろう。右側ばかり刈り上げ部分が露出している。

家での散髪需要が高まる中、頭に被せるだけで好きな髪型にできるソリューションが必

要なのではないか。製品名はナガカラム。堀河にも相談した方がよさそうだ。

中長期の製品提案はよしとして、目の前のピンチをどう乗り切るか。紀野は左の髪を持ち上げて調整に入る。

そこで友規の制止が入った。

「もう大丈夫。髪なんて待てばまた伸びる」

「バランス悪くないか？」

「左の感じが悪くない」

そして、友規は首を傾げた。

「待っていれば大丈夫だよな？」

「ごめん」

そう呟くと鼻の奥がツンとした。

紀野はキックオフ会議の五分も前に参加していた。やがて、堀河、小野、蟬丸が画面に顔を出す。ボスからはちょっと遅れるとチャットが入った。

そいつは好都合と、紀野は開口一番プロジェクトの変更を告げる。

「プロジェクト名はヒカリノドケキハルノヒとしたい」

「長くない？」

堀河の指摘が入る。

「そのころは？」

蟬丸は問う。

「ウツリニケリナでもよかった。ただこの四つの季節をいつまでも回し続けていたい」

二人はフリーズ。小野はリングライトの調整に余念がない。

紀野は友規の言葉を思い返しながらかくにまき立てる。

「ウィズ・コロナだ、ハンマー&ダンスだと、妙な言葉に踊らされているようにも思うが、俺たちはマスクをしながら懸命に息をしている。ワクチン競争も外交ツールになっているようだが、お陰で止まることはない。今、スピード感が足りないのは狂っていく気候への取り組みだ。この国には四つの季節があったはずなのに、寒いと言っていた翌週には急に暑くなる。真夏になれば大雨か高温で、子供たちはろくに外で駆け回ることもできない」

そして、紀野は二年前の図面を広げる。光の屈折率と立体幾何学に基づいた図形、レーザー媒質による誘導放出とそれを連鎖させる二枚の鏡。

「この光の退け器が優れていたところは、電源を必要とせず、太陽光を閉じこめて、増幅させることにあった。光は自由自在に操れるようになってきたんだ」

「光の操作は大事よね」

顔を真っ白にした小野がようやく言葉を発した。

「エネルギーの地産地消。小さな発電とコンパクトな送電網を俺たちが後押しする」

紀野は言葉を止めてウェブカメラを凝視した。

「ええと、小さな発電は分かった。けど、発送電分離が進まない中、コンパクトな送電なんてどうすればいい？」

堀河は黒髪を振り乱して問いかける。すると、小野はリングライトをさらに強めてカ

メラに寄った。

「マイクロ波無線送電を突き詰めれば、発電と送電なんて分けて考える必要は無いじゃない？」

予期せぬ発言に誰もが仰け反ったところ、ボスが現れた。

「わるいわるい。ちょっと遅れた。で、話は進んだか？」

途端、紀野は声のトーンを変えた。

「セルフカットが流行っているんで、ナガカラムというプロジェクトについて堀河と相談していたところです」

堀河はぼかんと口を開ける。

小野はリングライトの光を弱める。

蝉丸は目を閉じたまま頬に拳をあて、一発逆転を考え込みはじめた。

## 二人羽織ンピズム

初の一〇秒台まであと一歩、五輪候補とも言われていた妻が不慮の事故で両足を切断した。それでもタンクローリーから上半身だけでも逃れることができたのは鍛練の賜物だろう。コーチは落胆し、スポンサーは離れた。思いがけず一年延期となった大会だが、その間に足が生えてくるわけなし。そもそもやるのかやらないのか。頬杖を付きながらテレビ報道を見守る妻。事故当初は大きく報道されもしたが、メディアはすぐに飽きる。非日常に追われる市民もすぐに忘れた。女子短距離はこの国であまりメジャーなスポーツではなかったから。

「走るか」

俺は妻を見かねて背負い上げると、近所の土手を走った。無駄な肉のない彼女の体は軽い。腕を振るだけでも気晴らしになるのではないか。

「腕を振れ、もっと速く」

陸上のことなど何も知らないくせに偉そうなことを言う。それでも夫婦だ。彼女は俺の気持ちを察して腕を振る。懸命に腕を振る。すると、こっちも彼女のリズムに合わせないと転倒しそうで懸命に足を回した。彼女も俺に発破をかけるようになった。

「地面を蹴れ、もっと強く」

「もう無理」

土手の斜面に妻を寝かせて、自分も仰向けに転がった。緊急事態の最中、空の下にいるニンゲンが少ない。俺はなにか声をかけようと言葉を探すが、息が切れて言葉がでない。

「飲み物買ってきなよ」

「そうだな」

なんとか立ち上がり、妻を転がしたまま自販機を探した。ポカエリアスのペットボトルを一気飲み、もう一本を購入。そいつを持って土手に戻れば、彼女は薄ら青い空を眺めながら懸命に腕を振っていた。空を走る彼女を思い浮かべながら、しばらくその様子を眺めた。

妻の頬にポカエリアスのペットボトルをあてる。可愛い声を上げる歳でもない。彼女は無言でそれを手に取ると、一口含んでキャップを閉めた。

「走るか」

俺は再び彼女を背負い上げる。五分も走る体力は残っていなかった。俺は息を切らせながら土手を歩いた。

「ポカエリくれ」

背中にはりついた彼女は二人羽織でもするように、俺の前でキャップを開けると飲み口を口へ運んだ。それは勢いよく俺の鼻を突く。



「いてえよ」

彼女が笑い、肩を揺らす心地よい振動が背中に伝わった。わざとやっているんだろう。笑えるんならいくらでもやってくれ。鼻でも目玉でも突いてくれ。飲み口がそっと唇にあたる。そこから俺は首を上げ、彼女はそれに合わせてペットボトルを傾けなければならぬ。それなのに、いきなり垂直にペットボトルを逆さにするやつがあるか。俺は前屈みになってむせ返る。彼女はペットボトルを投げ捨て、俺の膝に手をついた。

「大丈夫？」

そう言いながらも肩を揺らす振動が背中に伝わる。笑ってんじゃねえかよ。鼻からポカエリが溢れひどい有り様だ。彼女は俺の首にかけられたタオルを手に取り、口もとをぬぐう。気が利くじゃねえかよ。それでも背中の振動は消えない。心地よい振動が消えないよう俺は大袈裟に咳をした。

それから妻を背負ってジョギングすることが日課となった。終盤、腕を力強く振り始めるとそれに合わせて懸命に地面を蹴る。息を切らせた後でも、二人羽織のポカエリアスは笑えた。

「私たち速いよ」

それは俺も感じていたところだった。日増しに彼女は腕の強さを取り戻し、かつてラグビーで鍛えた俺の脚力も中々のものだった。二人羽織一〇〇メートルなんて競技があれば、俺たちは世界的なアスリートになれるのではないか。

「もう一度、トラックで走りたい」

そう言い出した妻は、俺に背負われたままポケットからスマホを取り出す。そして、何やら番号をタップすると俺の耳にあてた。

「なに？そこは自分で話せよ」

「そうか」

妻は自分の耳にスマホをあてた。

「もう一度、トラックで走りたい」

相手はどうやら以前のコーチらしい。

「脚？脚なら心配ない」

そして、彼女は再び俺の耳にスマホをあてた。

「はじめまして。脚です」

かつては五輪候補とも言われた妻だ。不慮の事故に見舞われた彼女をコーチは無碍にできない。それでも新しいスターはすぐに生まれる。選手たちの邪魔にならないよう、俺たちは直線レーンを避けて円形コースで汗を流した。ポカエリアスはそこでも笑えた。

「羽織里さんですよ」

「あら、お久しぶり」

突然、彼女は地面に擦りつけそうな勢いで頭を下げた。

「申し訳ありません」

俺は状況が読み込めず小さく首を垂らす。妻は俺の肩で頬杖をつくとき、もう一方の手でポカエリアスのボトルを振った。軟体な彼女はボトルを見るなり何度も頭を下げる。

「ありがとうございます」

顔を上げるその目には涙が滲んでいた。ポロシャツにはポカエリアスのロゴ。どうやらかつてのスポンサーさんのようだ。

「しかたないよ。別にあなたのせいじゃないし」

「でも」

「選手でもないニンゲンにお金出しても仕方ないでしょう」

「ポカエリ、味がうまいよね」

俺が口を挟めば、妻は左の拳を俺の脇腹にあて、ペットボトルを口にあてがう。そして、俺は喉仏を誇るようにそいつを一気に飲み干した。ポカエリ娘は「わぁ」なんて声を上げて名人芸でも眺めるように何度も拍手をした。

気づけば、俺たちはCMに起用されるようになっていた。トラックを走る俺たちがドローンで全方向から映し出される。妻の腕、俺の脚。そして、二人羽織でペットボトルを一気に呷る。

資金が手に入れば環境も変わり、記録は伸びる。女子一〇〇メートル王者の大塚陽性が騒がれる頃、俺たちは女子一〇〇メートル選考基準に迫る記録を出すようになっていた。注目があつまればSNSという世論が黙っていない。女子なのか。男子なのか。オリンピックなのか。パラリンピックなのか。

オリンピズムとは「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」です。

五輪中止論者は、俺たちをダイバーシティの権化かのように持ち上げ、選考会に立たせないJOCをさらにバッシングした。聖火ランナーにならないかという声もかかるが、そこで妥協してほしいという提案なのだろう。

「スケジュールの都合で辞退させていただきました」

俺はメディアに報告する。言ってみただけだ。妻はスポンサーの大型車両と一緒に馬鹿騒ぎするのはごめんだとSNSに垂れ流す。契約は切られた。

そもそも世間が騒ぐほどオリンピックに出たいとは思っていなかった。祭りは終わり、俺たちはまた土手に戻った。ペットボトルが鼻にあたれば、背中が心地よく震えた。

## 夜勤はまだ明ける

「おまえいちいち暗いんだよ」

あいつはボロいセダンを洗車機にかけると、サービスルームで煮詰まったコーヒーを紙コップに注いだ。

音を消したままのテレビが感染者推移を映し出す。もう第何波なのか知れない。どうせ夏になれば熱中症で倒れるヒトの山が遥かに凌ぐ。それでも冬がくると山を数えている。昔からの癖だ。

ガソリンスタンドで過ごす夜勤も二〇年を超えた。セルフ給油が主流になってから、あいつがふらり現れない限り、真夜中をのらくら一人で過ごす。明るく振る舞う必要性はない。

あいつのスマホから歌声が漏れる。ギター一本で濁声を響かせる自身の動画。自撮りカメラの前で。ショッピングモールの賑わう駅前で。

「ぼちぼち拡散されてるわ」

デカイ身体から声をあげる趣味は気持ちがよさそうだ。他人様に撮られた動画だってアップされている。たいしたものじゃないか。

「相変わらずマズいコーヒーだな」

俺にとって趣味らしい趣味と言え、リングノートに三色ボールペンを滑らせること。描く絵は大抵決まっている。

「文句あるなら自販機で買え」

山下菊二を知ったのは、給料が入って街に買い物へ出た日のこと。大きなビルディングの小さな画廊に足を止めたのは靴紐が解けたから。何気なく視線を運んだ無人の部屋に作品が並んでいた。山下の後期作品であるコラージュにフォーカスされた展覧会だった。金を取られる様子は無さそうだ。安心して小さな空間に足を踏み入れると、一五点の作品が掲げられていた。知った顔があると思えばモナリザに昭和天皇。「ワイパー故障」に「ふて寝する」。作品タイトルにもにんまり。部屋の真ん中にはアンティーク調のテーブル、その上には画集が置かれ、自由に閲覧できるようになっていた。「あけぼの物語村」に惹かれたのは、それが代表作との説明があったからに過ぎない。陰鬱でヘタウマな漫画家が描いたような作品を隅々まで舐めた。首を吊った老婆。赤い水に浮かぶ男。たくさんの鎌。息苦しそうなお魚。力強い赤犬。鶏。リボンの愛らしい犬女。嫌な村だな。誰もいないのをいいことにカメラで納めた。その日はリングノートと三色ボールペンを購入しただけで、随分と満足して帰路に就いた。

何度も描き写していれば、だいたいの構図は頭に入る。ノートに描かれた何枚もの同じような絵。ヘタウマとは言い難いヘタクソな絵。犬女だけを描いた頁。何本もの鎌。

真っ赤な水の底に生息しているであろう甲殻類の想像図。いつまで経っても満足いくものが描けない。

県道沿いのガソリンスタンド、深夜の客なんて滅多にこない。サービスルームでペンを走らせているうちに夜が明ける。だったらいいが、そこまで楽にはさせてくれない。クラクションとともにハイビームが炊かれた。

「お客さん来たぞ」

「セルフだつたの。おまえ教えてやってくれ」

あいつは俺の頭からキャップを奪うと、ドアを押してフィールドへ駆けていく。本当にやってくれるとは思わなかったよ。女か。まだセルフではなかった頃、よくあいつとペアで夜勤をしていた。あの頃から、正社員のいない深夜になると勝手に洗浄機を動かしてボロいセダンを洗車することが常だった。

あいつは派手に回転する洗車機を眺めながら、給油口にノズルを差し込む。愛想よく窓拭きもこなした。最後にはCDを一枚売りつけることに成功したようだ。車の走らない県道に立ち、深々と頭を下げながら車を見送った。

一連の動作を見守った後、サービスルームに戻るあいつから目を逸らせてノートに視線を落とした。

「うちの客に勝手にモノ売るな」

「売れるわけねえだろう。くれてやっただけだ。CD貰ったなんて拡散してもらえればラッキーだ」

あいつは俺にキャップを被せて煮詰まったコーヒーを継ぎ足す。口癖のように「マズい」と呟くが、味の分かるようなやつではない。

「まだ仕事してるんか？」

「そりゃしてるさ。世界の使用期限をきっちり教えてくれるなら、あと幾ら必要か逆算できるだろうけどよ。あいつらの態度を見てると、以外となんともなんないんじゃないの。なんとも思うだろう」

なんともなんないなんとも世界は臨海点を越えた。灼熱の地球へ暴走をはじめたと言われて久しい。確かに真夏は耐え難い。焼けたアスファルトにヒトが倒れる。増水した川にヒトが呑まれる。それでも真冬になれば深夜のダスターは凍る。

「そいつ歌にすれば？」

「どいつ？」

俺だって夜勤を辞める予定はない。貧乏暮らしなりに金も要る。未だにガソリンのニーズだってある。後戻りができないと知れば使い切ってやれという気になったのか。御上が馬鹿みたいに資本を増やし続けることが好きならば、庶民だって阿呆のように商品を喰い続けることが好きだ。後戻りのできない世界で清貧を気どる必要はない。かといって、派手にやらかすには元手が足りない。どんなときだって貧乏人には覇気がない。貧乏人が暴徒に化けたところで被害を受けるのも貧乏人。世間は割と冷めている。まな板の上の鯉か。SNSというガス抜きシステムがうまく働いているようにも思う。

「あけぼの村物語」には顔の見えない男が立っている。腕の色から察するに赤犬ではなさそう。四人の人間の中でも最も遅しく描かれたそいつはシャベルを握る。山下はかつての大戦で逃亡兵の鼻と両耳をシャベルで削ぎ落とすことを強いられた。水死体のよう

に浮かぶ男に耳は残っているが、その水は赤黒く染まっている。流れた血のようであり、気化したガソリンで鼻をやられている俺には、使い古された有機溶媒のようにも見える。

洗車機が止まるとあいつは再び外に出た。半分凍ったダスターで手際よくドアの隙間に残った水を拭っていく。フロアマットをくたびれた洗浄機にかけ、車内に掃除機をかける。いったい何キロ走ったのか。ここで知り合った頃からずっと黒煙を吐き出すセダンに乗り続けている。

有機溶媒から顔を覗かせる魚たち。息苦しそうではあるが、白目が漫画のようだ。あちらこちらに視線を向けている姿にはどこか愛嬌がある。ガソリンに浸った魚などとても食えない。なんてことを思いながら青インクで魚に陰をつけていれば腹が鳴った。

深夜という時間帯は、大した仕事をしていなくとも、起きているだけでやたら腹が減る。出勤前には唐揚げ弁当を買っていた。プラゴミに包まれた飯に吐き気をもよおす。なにかもかがゴミに思っていた頃、エコバッグさえ持ち歩いておればエスディーゾーズだと自分に暗示をかけた。後戻りのできない世界でエコバッグなど必要ない。所詮は厚手のポリ袋。以外と知られていない石油でできたポリ袋。それでも無策の挙げ句に強制される三円は癪に障る。

「腹減ったなあ」

洗車を終えたあいつが戻ってきた。手には三円のコンビニ袋を下げている。用事が済んだならさっさと帰ればいいのに、あいつもここで飯を食うつもりか。口を閉じて食えないやつと一緒に食事をとることは好ましくない。

「明日仕事は？」

それとなく早く帰った方がいいのではないかという提案を試みる。

「リモートだから適当にはじめるよ」

随分と気の利いた返答をしてくれるのではないか。溜息を殺して、鼻から抜く。

仕方なく一緒に飯を食う。離れて座ることがマナーと定着したのが唯一の救い。肩をつけあって飯を食う必要はない。それでもクチャクチャと口から溢れる咀嚼音が気になって仕方ない。聞きたくないものほど耳が鋭敏になる。ノートに描かれた何本もの鎌を思い返す。そいつで顎を落としてやりたいところだが、こんなところに鎌はない。側溝を掃除するため、シャベルはあったはずだ。深夜の静かなサービスルームに咀嚼音とマズいコーヒーを啜る音が響く。

テレビの音量をあげたいが、始終点けばなしで、リモコンの在処が分からない。あいつはまたスマホを開いた。ギターを握ったあいつの濁声が咀嚼音に重なる。その歌声は嫌いでないのだ。大半はカバー曲で選曲も悪くない。フォークソング、昭和歌謡、子供に向けたアニメソング。大抵、家族連れの多いショッピングセンターの前で歌う。子供が立ち止まるよう仕掛けるのも戦略だそうだ。

唐揚げ弁当を平らげると、テレビは豪雪で孤立した村に物資が届いたと伝えた。

「自衛隊の皆様は相変わらず頼もしいね」

冬の異常気象はどこか安心してしまう。

「本当は雪掻きなんかしてないで、機関銃でもバラバラ撃ちたいんだろうよ」

飯を終えて、再びリングノートを開く。真っ直ぐ線を下ろして折り返す。両の鼻から鼻水をのぼしながら首を吊る老婆。「あけぼの村物語」はある事件を描いている。強欲な

山林地主の金貸しが村人を自殺に追い込んだ。報復を組織した村人たちであったが、地主の返り討ちにあってさらに死者を出す。

「おまえいちいち暗いんだよ」

あいつは俺のノートに目を落とす度、それを言う。愛嬌のある魚たち。老婆の鼻水に舌をのぼす愛らしい犬女だっている。大きな黄色いリボンまでつけている。三色ボールペンに黄色はない。

「じゃあな。明日も仕事があっから」

リモートだから適当にはじめるのではなかったか。いやみの一つも言いたいが、長居されても億劫だ。俺は小さく手をふる。ボロいセダンは、無駄に明るいフィールドを黒煙で汚した。

入れ替わるように一羽の鶏が入ってきた。まさかガソリンで動いているわけではないだろう。何もないコンクリートを啄み、痛かったのか、天に向かって声を上げようとしている。おいおい、まだ夜明け前だぜ。

「レジ締めの日だぜ」

随分と生意気なことを言う鶏だ。俺はノートを閉じて、レジからレシートの控えを引っ張り出した。客なんてほとんど来ないからたいして印字はされていない。打ち間違いなんてしていたらすぐ分かる。それなのに一万円足りない。

「あの野郎」

俺はノズルを握りフィールドの中央に立つ。

「この秘密は絶対明かしてはだめだ。明かしたら、必ず社会から落ちるんだ」

大声をあげることは苦手だ。他人様の気の利いた言葉をカバーするだけで冷や汗が垂れる。仕方がないから上手くもない絵を描く。あの野郎だけに憤っているわけではない。夜が明けるまであと三〇分。気持ちは落ち着かない。陽が出る前にあと一台でも車が入ろうものならば、トリガーを引いて噴油してやろう。雷が落ちてもドライバーは安全であるように、ガソリンを浴びた車に着火してもきっと中の人間は無事だろう。炎に包まれる悲壮な表情。そいつを眺めることが慰みになるかしら。

「今日はなんと誤魔化して生きよう」

嫌なことを言う鶏だよ。県道にノズルを向け、拳銃に見立てて両手で構えた。アメリカの餓鬼みたいに口を尖らせながら銃声を真似る。わずかにトリガーを引けば思いのほか勢いよくガソリンが噴き出す。慌てて計量器に戻した。

水で流すより火をつけた方がはやいかしら。腕を組んでその油だまりに視線を落とせば、白目を持つ魚たちが顔をのぞかせる。一匹。また一匹。死んだ男も浮き上がる。気色の悪い粘液が肩に触れ、天井を見上げれば、首を吊った老婆が鼻水をのぼしている。嫌なことを言う鶏はいつの間にかその肩にとまっていた。赤犬たちがピカピカのオープンカーに乗ってやってくる。助手席には大きなリボンを結んだ犬女。真っ黄色のオープンカーだよ。未だにこんなものが売られているのかね。フィールドに立っているからには、セルフでやってくれと言い難い。

「オーライ、オーライ、オーライ。はい、オッケーです」

俺はその日一番の声をあげる。鶏はようやくそれらしく鳴いた。途端、空はうっすらと色を帯びはじめる。それでもまだ夢の中のように薄暗い。俺は遅い腕でシャベルを

握って朝を迎え撃つ。耳を削ぎ落とせと赤犬は言う。オーライ。鼻を削ぎ落とせと犬女は笑う。オーライ。長い間ノーとは言えないように仕込まれてきた。オーライ。滅び行く世界でガソリンスタンドの男は誰より前向きだ。はい、オッケーです。

でもやるんだよ。

金を触ることが嫌いだから通帳は全て男に預けている。稼ぐのは私、買い物するのは男。具材からナプキンまで買わせて、私は寝巻き姿でコトコトに煮込まれたカレーを食している。豊かさは誰かの犠牲の上に成り立っている。とは言え、男は時折見慣れないジャケットに身を包みコーヒーを飲みに出かける。

「帰りになにか買い物しようか？」

「味ごのみ系」

特別食べたいわけではないけれど、咄嗟に思い付いたのがそれだった。なにか買ってきてくれるというのであれば、なにか頼まないと損でしょう。なんて思いもありつつ、そんな急に言われても男が買い物に行く程度で手に入る欲しいものなんて思い付かない。エイトホールに足を突っ込んだ男は首をかしげてそれを隅に寄せる。そして、玄関に座り込んでスニーカーの紐をほどこきながら振り返った。

「本当は何が欲しいの？」

私は口を半開きにして間の抜けた顔を晒す。眉墨鉛筆の一本でも買ってきてくれるつもりだろうか。いいよ。どうせセンス無いし。いいよ。自分で選びたいし。

「好きです北海の味だったかな」

「好きです？」

私は若干面倒臭くなってきている。もうすぐ昼休みも終わるし、13時になったら、またパソコンの前に座って連絡可能なサインを出さなければならない。

「思い付かんし、味ごのみでいいよ」

「金で買えないものでもいい。本当は一番何が欲しいの？」

スチャダラエッセイ賞とちょっとばかりの影響。真っ先に思い付いたのはそれだった。それを口にしたところでなんになる。男は立ち上がる。そして、爪先を打ち付けてドアノブに手を掛けた。

「まあ、思い付いたら LINE して」

「行ってらっしゃい」

「さぼるんじゃないよ」

「仕事？」

毎月、給料入ってんだろ。ちょっと苛っとする。

「人生」

私は啞然として男を見送った。自室のデスクについてリモート会議ソフトに緑信号を灯す。なんだってんだ。会議の予定も、顧客とのウェブ面談の予定もなかった。今週中に仕上げなければならないレポートに手を付け、時折舞い込む面倒な問い合わせに舌を打



つ。なんだってんだ。着飾って買い物に行く男に言われたくない。マスクを捲ってコーヒーを啜るくらいしか喜びがないくせに。でも、私だって気づいている。往復二時間の通勤から解放されたというのに、以前より三時間も多く眠っている。自室のデスクに座っているのが難儀で、スチャダラエッセイ賞に向けた作品など一向に進まない。趣味で20年近く作文を続けている。書くことなどどうにもない。ある作家の言葉が響いた。書くことなんて無いことがデフォルト。それでも書きはじめると何か出てくることもあるんですよ。やっぱり身体を動かさないとほじまらない。響いたんじゃない。そんなこと分かっていた。分かっていたことが言葉となって現れた。きっかけはどこかにある。私はスマホを構えた。

『スチャダラエッセイ賞とちょっとばかりの影響』

それをLINEで送れば、直ぐに返信があった。

『合点承知』

えっ。

スチャダラエッセイ賞とちょっとばかりの影響を買ってきてくれるというのか。なかなか金で買えるものではない。買ってしまうほどの金を積めば買ってしまうのかもしれないが、私は我が家の資産状況を知らない。自分の月収がどの程度のものかくらいは把握している。ヤンチャDE文学賞ほど賞金は高くない。だからと言って、スチャダラエッセイ賞を買収できるものではないだろう。知らんが。ちょっとばかりの影響も我が家の財力でどうにかなると思えない。知らんが。

気づけば私は作文をはじめていた。今日中にこなさなければ首を切られる仕事などないのだ。青信号を付けてさえおけば、私はせせとリモートワークをしていることになる。なんなら予定表に適切な顧客名を入力して赤信号にしておけば、顧客と面談中だったということにもできる。身体を動かす時間はある。やっぱり身体を動かさないとほじまらない。書きはじめると何か出てくることもあるんですよ。書くことなんて無いことがデフォルト。

世間に風穴を

金を触ることが嫌いだから通帳は全て女に預けている。稼ぐのは俺、買い物するのは女。具材からパンツまで買わせて、俺は寝巻き姿でコトコトに煮込まれたカレーを食している。豊かさは誰かの犠牲の上に成り立っている。とは言え、女は時折見慣れないドレスに身を包みケーキを食べに出かける。

「帰りになにか買い物しようか？」

「海苔ピーバック」

特別食べたいわけではないけれど、咄嗟に思い付いたのがそれだった。なにか買ってきてくれるというのであれば、なにか頼まないと損でしょう。なんて思いもありつつ、そんな急に言われても女が買い物に行く程度で手に入る欲しいものなんて思い付かない。パンプスに足を突っ込んだ女は首をかしげてそいつを隅に寄せる。そして、玄関に座り込んでスニーカーの紐をほどきながら振り返った。

「本当は何が欲しいの？」

俺は口を半開きにして間の抜けた顔を晒す。ウィスキーの一本でも買ってきてくれるつもりだろうか。いいよ。重いだろうし。いいよ。自分で選びたいし。

「柿の種、でもいい」

「でもいい？」

俺は若干面倒臭くなってきている。もうすぐ昼休みも終わるし、13時になったらまたパソコンの前に座って連絡可能なサインを出さなければならない。

「思い付かんし、海苔ピーパックでいいよ」

「金で買えないものでもいい。あんたは一番何が欲しいの？」

ヤンチャ DE 文学賞とちょっとばかりの影響力。真っ先に思い付いたのはそれだった。それを口にしたところでなんになる。女は立ち上がる。そして、爪先を打ち付けてドアノブに手を掛けた。

「まあ、思い付いたら LINE して」

「いってらっしゃい」

「さぼるんじゃないよ」

「仕事？」

毎月、給料入ってんだろ。ちょっと苛とする。

「人生」

俺は啞然として女を見送った。自室のデスクについてリモート会議ソフトに緑信号を灯す。なんだってんだ。会議の予定も、顧客とのウェブ面談の予定もなかった。今週中に仕上げなければならないレポートに手を付け、時折舞い込む面倒な問い合わせに舌を打つ。なんだってんだ。着飾って買い物に行く女に言われたくない。マスクを捲ってケーキを嗜むくらいしか喜びがないくせに。でも、俺だって気づいている。往復二時間の通勤から解放されたというのに、以前より三時間も多く眠っている。自室のデスクに座っているのが難儀で、ヤンチャ DE 文学賞に向けた作品など一向に進まない。趣味で 20 年近く作文を続けている。書くことなどとうにない。ある作家の言葉が響いた。書くことなんて無いことがデフォルト。それでも書きはじめると何か出てくることもあるんですよ。やっぱり身体を動かさないとはいじまらない。響いたんじゃない。そんなこと分かっていた。分かっていたことが言葉となって現れた。きっかけはどこかにある。俺はスマホを構えた。

『ヤンチャ DE 文学賞とちょっとばかりの影響力』

そいつを LINE で送れば、直ぐに返信があった。

『合点承知』

えっ。

ヤンチャ DE 文学賞とちょっとばかりの影響力を買ってきてくれるというのか。なかなか金で買えるものではない。買ってしまうほどの金を積み上げれば買ってしまうのかもしれないが、俺は我が家の資産状況を知らない。自分の月収がどの程度のものかくらいは把握している。スチャダラッセイ賞ほど応募総数は多くない。だからと言って、ヤンチャ DE 文学賞を買収できるものではないだろう。知らんが。ちょっとばかりの影響力も我が家の財力でどうにかなると思えない。知らんが。

気づけば俺は作文をはじめていた。今日中にこなさなければ首を切られる仕事などないのだ。青信号を付けてさえおけば、俺はせっせとリモートワークをしていることになる。なんなら予定表に適切な顧客名を入力して赤信号にしておけば、顧客と面談中だったということにもできる。身体を動かす時間はある。やっぱり身体を動かさないとはいまらない。書きはじめると何か出てくることもあるんですよ。書くことなんて無いことがデフォルト。

あくかな？

あいつらは金を触ることが嫌いだから全てを俺に預けている。稼ぐのは俺、買い物するのも俺。具材からパンツまで買わせて、おまえらは寝巻き姿でコトコトに煮込まれたカレーを食している。豊かさは俺の犠牲の上に成り立っている。そして、おまえらは時折見慣れないドレスに身を包み肉を食べに出かける。

「帰りになにか買い物しようか？」

俺たちは被害者であって搾取されている。だからそいつを打倒すれば解決するんだという理屈はいつだってウケがいい。

「新しい鉛筆とちょっとばかりの影響力」

その図式に魅せられた時点で、もうシステムの中に取り込まれている。

「なにそれ？」

自己増殖する羽目になったシステム。

「海苔ピーバックとちょっとばかりのウイスキー」

人間を無視した無目的な運動。

「本当は何が欲しいの？」

俺は口を半開きにして間の抜けた顔を晒す。

「一本のウイスキー」

ガス抜きは完了。見えない敵は戦いを拒み続ける。

## 灰かぶり婆さん

今日は六畳一間のアパートで一人シャドーボクシング。昼飯は蒸かした芋だけとする。昨日は戦争の惨たらしさ伝える映像作品ばかりを見続けた。創作、記録映像にかかわらず。昼飯は蒸かした芋だけとする。腹を壊したふりをして畳の上でのたうち回る。

住所はある。健康保険証はどうか。運転免許証は学生のうちに取っていた。バイトに仕送り、あの頃は一番潤っていた。今だって不自由を感じても不都合はない。ましてやコロナ禍、余計なことはしなくていい。無理のない範囲で経済を回し、それが済んだら部屋に籠もっている。自粛と補償はセットで聞かなくなった。俺のような奴は無気力であることが何よりの社会貢献だろう。

ドアベルが鳴った。この部屋を訪ねる奇妙なヒトなどあの婆さん以外にない。ドアスコープを覗きもせずノブを捻る。

「MASAYA、芋蒸かしたよ」

俺は剛史だ。

MASAYA。そいつが何者なのか俺は知らない。婆さんの息子、孫、旦那、弟、アイドル。いつしかどこからか芋を持って現れるようになった。和装の似合う品のいい婆さん。柔和な笑みがMASAYAであり続けることを決断させた。芋は固めに蒸かされ、デザートのように甘かった。

「ありがとう」

アルミの両手鍋いっぱい芋を受け取り、空になった雪平鍋を返した。婆さんは空の鍋で口もとを隠すような素振りを見せると満足そうに帰っていった。

あのヒトが柔和な笑みと芋を運んでくる限り、俺はここで生き続ける。家賃を払い続けるため、金を稼ぎ続ける。

そして、俺は婆さんに負けないくらい柔和な笑みでレジを打ち続ける。

「手提げ袋はご入り用ですか？」

若い女はまっすぐに俺を見た。

「袋は要りません。仕事は何時に終わりますか？」

二一時だと伝えれば、女は両手一杯に菓子パンやカップヌードルを抱えて店をあとにした。

バイトが終われば女が店の前で待っているものと思っていた。違うのかよ。がっかりして家に戻れば、アパートの錆びた外階段に女が座っていた。両手には菓子パンやカップヌードルを抱えている。女は立ち上がり、大きな若々しい笑みで俺を呼んだ。

「MASAYA」

がっかりだよ。

それでも、アパートへ招き入れて薬缶に湯を沸かした。カップヌードルを啜ったあとにチョコルネを食べた。風呂も沸かした。女の肌とはこんなにも滑らかなものであったか。汗をかきながらこの女と生きていく未来を思い描く。子供なんてとても養えない。二人の子供を大学まで送り込んだ両親の行いが奇跡としか思えない。

そして、零時の鐘が鳴る。女は俺を突き飛ばし、服を抱えて部屋を飛び出した。錆びた階段には外灯を閉じこめた靴を残していった。

翌日は唯一弾けるギターソロに磨きをかける。昼飯は蒸かした芋だけとする。そして、新たな芋を運ぶ婆さんが現れた時、俺はその足もとを確認するのだろう。婆さんは懸命に余生を楽しんでいる。それは俺がこの世界に生きる上でも、とても不自由で都合のよいことなのだ。

## 月曜日

俺はいつしか日常生活に投げ込まれており、コントロールの利かない月曜日にいる。この状態は望んで選択したものではない。

仕事から帰ったら直ぐシャワー。ルールを守らない俺に女はため息。ウィルスを躲しながら出勤を続けたのはおまえのためもあるんだぜ。別れはパラリンピック開催に関する意見の相違だったこととする。高卒で家を出た娘とはコロナ以前から疎遠だ。

緊急事態が解除された週末は、焼き鳥居酒屋で店主に絡んでやろうと企んでいた。一人飲みに利用していた馴染みの店だ。

「再開おめでとさん」

「いらっしゃいませ」

店主はひたすら炭火を煽って串を回している。もともと愛想のいい男ではないが、久しぶりの常連客なんだぜ。もう少し言葉はないものか。誰もいないカウンターにはアクリル板が並んでいる。

「とりあえずビール」

マスクで口を塞がれた店主は、俺の手元に視線を照らす。アクリル板で仕切られた空間にはタブレットが置かれていた。こいつで注文しろということか。ネギマだ、ボンジリだ、塩だ、タレだといちいち注文しながら、その都度、コロナ禍は何をしていたのか、バイトの娘はまだいるのかと、様子を探ってやるつもりだったのに。

俺はとりあえずビールのオーダーを送信する。

「ご注文ありがとうございます」

タブレットはこたえた。さっきの「いらっしゃいませ」もなんだか店主の声ではないような気がしていたんだよ。どんなやつが握っているのか知れない回転寿司屋にでも来た気分だ。とりあえず茶碗蒸し。どこもこんな店に変わっていくのか。焼き鳥も回り出すのかしらなんて鼻で笑えば、中ジョッキがベルトコンベアで運ばれてきた。俺は目を見開く。ひたすら炭火を煽って串を回している店主に視線に上げればどこか様子がおかしい。大判のマスクと和帽子の隙間から覗く目が薄っすら光を放っている。三本目の腕が伸びると刷毛でタレを塗りはじめた。

「商品が到着しました」とタブレットが点滅、ジョッキをベルトコンベアから退けると急かす。俺はそいつを手にとって一気に呷った。モモ、レバ、ボンジリ、タレ、タレ、タレ。

「ご注文ありがとうございます」

焼き鳥は間もなくやって来る。すると、色のない男が暖簾を割って入ってきた。ソーシャルディスタンスを保ってカウンターへ着くと、馴れた様子でタブレットを打ち込んだ。

「ご注文ありがとうございます」

嗚呼、これが新しい生活様式なのか。ジョッキを空けて焼酎に切り替える。カワもナンコツも全部タレだ。

「この店、落ち着きますよね」

思いがけず色のない男が声をかけてきた。視線はタブレットに向いたまま。しかし、俺にかけられた言葉であることは間違いなさそうだ。タブレットに男の顔が映し出されたから。戸惑っていれば男は言葉を重ねる。

「大声で喋らなければならない大衆居酒屋が苦手だね。バーなんて洒落た店じゃ何を頼めばいいかわからない。でもね、お喋りが嫌いではないんですよ。こんな湿気た店が自分には合っていました。自粛生活がいつまでも続けばいい。なんて人間、そんなに少なくはないと思いませんか？」

コロナ離婚に至った俺だ。自粛生活が続けばいいなどと思っただけではない。それが女への配慮であるような気がしている。生活の変化があいつのイライラを急速充填した。遅かれ早かれ同じ結末を迎えていたことだろう。災いが実態を暴く。自粛生活がいつまでも続けばいい。なんて人間、少なくともここにいます。

「うるさい居酒屋が苦手ってわかりますよ。リモート飲み会なんてのもね」

「あ、こういうのも嫌でした？」

大人数が苦手なだけだ。

「一対一なら悪くもないです」

グラスの氷を溶かしていれば、色のない男の目が光を放っている。でも、それは三本の腕を駆使する店主のそれとは違う。店内の照明を反射したものだということに疑いを持たない。発光ではない。濁った水晶が暖色のランプを跳ね返している。

「ほんとう？」

「これっきりならなおさら」

口を滑らすと男は微笑んだ。長い時間ヒトと過ごすことも苦手だ。筆筒と卓袱台のような夫婦だったらもっと長続きしたのだろう。それでも俺たちは食欲で、繁殖なんてする。早くも窮屈だった。男と会話を続ける必要はあるのか。本当は店主と話がしたかったんだよ。気になっていたのは、コロナ禍の経営などではない。愛らしいアルバイトの娘がいたこと。自分の娘と変わらない背格好の女。あの娘はどうなったのか。

三本腕に変わった店主に尋ねたところで何が返ってくると思えない。目の前のモニターに打ち込めば何か回答が得られるかしら。そろそろ男を退室させたほうがよさそうだ。画面から消すか。二席分のディスタンスを保ったそいつにロックグラスを投げつけるか。

「答えは決まりましたか？」

俺はタブレットで清算して男を消す。立ち上がれば、案の定、色のない男などいなかった。煙に包まれた店内から身を投げる。どこまでも落ちていく自分を感じたのは、店の明かりが届いていたから。やがて光の届かなくなった世界で平泳ぎ。当てがなくても動き続けなければならない。孤独を愛したことはない。そして、また誰かが決めた月曜日に浮き上がる。





## 火曜日

しんどいのは月曜日の朝だけで、火曜日は思った以上に日常を受け入れている。  
「俺の方こそ上げてもらいてえな。ポーズ」

しけてるボスを除けば悪い職場でない。ベルトコンベアが生産能力を決める、未だフォード式の思想が抜けない町工場。俺たちはベルトコンベアに逆らってカニ歩き。ゾンビのように緩やかに。時計を見上げることは極力避けたい。昼休みまでまだ二時間もあるのかよ。それより時計の下に垂れ下がった標語。

二〇〇〇万 筆筒に貯めて 明るい老後

デフレなんて止むわけがないと誰より実感している。それでも働けるだけで有り難いんだぜ。肩を並べてカニ歩き。感染リスクは低いだろう。節々の痛みは単純労働を繰り返しているせいか。免疫獲得の副作用か。

「カニアルキ、ナンデスルカ？」アリが問う。

流れてきた機塊の左から摘みを引っ張り出して、右の穴に差し込む。

「生産性向上だ」俺は答える。

機塊を引っくり返して、差し込まれた摘みを裏から引き出す。ベルトコンベアがこれ以上速く動かないだけのこと。俺たちが逆走すれば効率が上がる。眠気防止の意味もあると聞く。

俺はひたすら引っくり返して引き出す。この機塊が何になるのか知らない。もし、こいつが引っくり返して引き出すための機械になるなら、俺は職を失う。左から引っ張り出して右に差し込む機械であって欲しいと願う自分が嘆かわしい。

ところで俺はパンを焼く。ゾンビで終わらないために趣味の一つでも持とうと考えたのだ。どうせなら飯になる趣味がいい。それでも肉を食らうゾンビとは対極にありたい。菓子かパンを焼くなんてどうか。意外性もアピールしたいじゃない。

昼休みのベルがなる。引っくり返して引き出すことを止め、アリを昼飯に誘う。

「キョウハ、ナニパンカ？」

「クロワッサンだ」

感嘆の声を上げた後、アリは「トマトソースだ」と言う。俺も感嘆で応えた。俺はパンを焼き、アリは何かしらのタレを拵える。豆の入ったトマトソースはハズレだ。俺たちはそいつにパンを浸して同じものを食った。豆乳パックにストローをさす。アリは水道水。それ以外を飲んでいる姿なんて見たことがない。仕事上がりにも水筒へ水を汲む。強がって家族に仕送りでもしているのだろう。

老後の二〇〇〇万なんてよく言った。パンが無いならケーキでも焼くか。水曜日になって、節々の痛みが消えたなら、ややこしくないほうの古本屋へ行く。



## 水曜日

カムチャッカの海洋生物が藻類ブルームの悪夢を見ているとき、メキシコの娘は理不尽な商慣行の中で布地を織っている。

俺が古本屋で焼き菓子レシピを立ち読みしているとき、テキサスのウィリアム・シャトナー（九〇）は、緊張を隠しきれずにブラックファーストを飲み下している。

クロワッサンが魚焼きグリルで焼けるのであれば、クッキーだってできないはずはない。粉物は豊かさだ。薄力粉、卵黄、バター、粉砂糖。ココアパウダーを除けば全てが家にそろっている。クロワッサンの造形は素晴らしいが、かわいいに乏しい。やはりココアパウダーは買って帰るべきではないか。古本屋で分量を把握したならば、二〇時閉店の前までに、エブリデイ・ロープライスを売りにしたあのマーケットへ急がなければならない。

ウィリアムは真っ青なつなぎを纏って、鏡の前ででっぷりと膨らんだ腹を叩く。俺はどうかココアパウダーを入手する。俺たちは興奮をしている。すると何かが腹に降りてきて便意が込み上げてくるのだ。ウィリアムはせっかくつなぎに着替えたのに、そいつを脱いで便器に着座しなければならない。俺は脱糞を堪えながら家路を急ぐ。

両手を洗って一息。ウィリアムがニューシェパードの搭乗口へ向かう長い階段を三度折り返した時、俺は台所に立つ。俺たちはきっとそれぞれのやり方で資本増大に憑かれたゾンビにならないよう抗っている。

雪平鍋にバターを落とし、粉砂糖をいれて滑らかになるまで木べらで混ぜる。火にかけるわけではないのよ。ボウルというものが我が家の台所にはないだけ。大抵の調理は鍋一つで事足りる。卵黄を加えて、白身を飲み干す。薄力粉を加えたら粉っぽさがなくなるまでひたすら混ぜる。生地を二等分にしたら一方にココアパウダーを練り込み、しばらく寝かせる。

日本時間の今夜、ウィリアムは宇宙遊泳する。職場に転がっていたスポーツ新聞で知った。スタートレックのカーク船長だという。その映画を見たことは無い。餓鬼の頃は宇宙戦争映画より時間旅行映画が好きだった。それでもSF映画のキャプテンだと言うではないか。億万長者の弟がたった一〇分間の宇宙旅行をするよりは受け入れやすい。カーク船長ファンの酒宴にはたまらない興を添えるだろう。やはり一〇分間だという。上空一〇〇キロメートルのカーマラインを越えたら放物線を描いて落ちていくだけのアトラクション。

生地を寝かせている間に湯を沸かす。夕飯は冷や飯にちりめんじゃこ。そいつに温かい汁があれば上等。即席みそ汁はフリーズドライの具材が４種類から選べる。俺には割と高価なもの。使うべきところには金を使う。

飯を終えて、畳に身を横たえる。目を閉じて何も見えず、哀しくても目は開けない。

「管制塔よりニューシェパードへ、プロテイン服用後、ヘルメットを装着なさい」

宇宙船って垂直に上がるじゃない。やっぱり乗り込むときには、背もたれに寝っ転がるかたちになるのかしら。俺は畳を背もたれに、膝を持ち上げる。そして、エンジンの点火を待つ。

「チェック・イグニション・アンド・ゴッズ・ラブ・ビー・ウィズ・ユー」

強烈なGに首を揺らす。二分三〇秒ほど堪えたらふと力が抜けた。畳の感触が背中から消える。力のない世界に身体を強張らせる。

「筵の綾のようにまっすぐ生きなさい」

母の声が聞こえた気がしてふと目を開ける。俺は宇宙を遊泳できないまま畳に落ちた。

冷蔵庫から取り出した生地を切り分け、整える。プレーンとココアで渦を作る。格子柄を作る。パンダを作る。ココアの丸とプレーンの三角を作る。しばし、ウィリアムのことを忘れた。入れ替わり現れる職場の技能実習生アリの姿。毎日顔を合わせるその大きな目、厚い唇、偉そうな口ひげ、焼け爛れた右耳。その一つ一つをクッキーに仕上げる。

「嗚呼、パンも焼かなきゃ」

アリはタレを拵え、俺がパンを焼く。それが暗黙の約束になっていたから。パン生地ならば昨日から寝かせたものが冷蔵庫に残っている。焼き魚グリルでクッキーを焼くから、明日のランチは食パンだ。飯盒に生地を詰めてコンロに掛ければパンになる。はじめチョコチョコ中パッパ。今度こそ多少肉の入ったカレー味のソースでありますように。

明日の仕事が辛くても、少し夜更かしをすることになりそうだ。今夜はウィリアムが朝のテキサスからたった一〇〇キロメートルの宇宙へ到達するのだから。東京から水平に見れば熱海だよ。俺はちょうど同じ時間にグリルに着火して、クッキーを焼く。アリのためにクッキーを焼く。そうだ。一つロケットの形を作ろう。カカオの丸にプレーンで土星のリングを付けよう。こいつに目玉を付けたならば、あれだ。コスモ星丸だ。

「チェック・イグニション」

ウィリアムが打ちあがると同時にグリルを着火させてさ、一〇分間の飛行の間に焼き上げるんだよ。そしたら、明日アリに言うんだ。

「ウィリアムが打ちあがると同時にグリルを着火させてさ、一〇分間の飛行の間に焼き上げたんだよ」

そして、焼け爛れた耳の形をしたクッキーを渡したら気付いてもらえるだろうか。コスモ星丸よりは分かりやすいと思うんだよ。俺とウィリアムの合作。こうして繋がっていることにウィリアムは気付いているはずだ。SF映画の船長だもの。

「アンド・ゴッズ・ラブ・ビー・ウィズ・ユー」

遊び疲れて俺は眠る。

## 木曜日

前妻と別れても街を出るつもりはなかった。それでも家を出ていかなければならない。あいつが組んだローン。出ていかれたところで俺に返済能力があるわけでない。学生気分に戻って襤褸アパートに暮らすことも悪くはなかった。

なんて強がっていられたのも陽気のいいうち。先週まで短パンランニングで寝ていたはずだが。なんだよこの部屋、寒すぎるぜ。なんだよこの身体、冷えすぎるぜ。スリムだったあの頃はなんともなかったのに、これだけ無駄な肉を腹に巻いている今のほうが遥かに凍える。

早々に目を覚まして湯を沸かす。朝からどん兵衛でも食わないとやってられない。ふっくらお揚げに舌を脅かし、多少身体が温まったところで、シャツを脱ぎ棄て黄ばんだヒートテックを纏う。

「ナンとかサーモ」

前妻はいつもそう呼んでいた。思わず笑えた。全くあっていないが言いたかったことはよく分かる。

木曜日にもなれば週末気分がはじまっている。休日に何をしたいでもないが、飲酒は土日と決めている。行きつけだった焼き鳥居酒屋は制限解除がされた途端、気味の悪い店主と入れ替わった。新たな店を開拓するのも億劫だ。家で呑むことはない。家に酒があれば週末に限らずに呑み続けることは分かっている。平日は趣味で抗うと決めている。だから、俺はパンを焼く。

自分で敷いたレールを転がる安心感。ランチのためには平日だってパンを焼く。昨日の夜なんて、宇宙遊泳を楽しむウィリアム・シャトナー（九〇）を思いながらクッキーを焼いた。

「こちら台所よりカーク船長へ」

そして、今日こそ多少肉の入ったカレー味のソースでありますように。

工場に知った顔がいると思えば、焼き鳥居酒屋でバイトをしていた娘じゃないか。ベルトコンベアの前でカニ歩きの指導を受けている。少し膝を曲げて腰を落とす。ベルトコンベアに逆らって僅かずつ進んでいく。指導しているのは技能実習生のアリだ。

「なんでカニ歩きなんてしなければならないの？」焼き鳥娘が問う。

「セーサンセーコージョーデスヨ」アリは答える。

「どういうこと？」

アリは答えに窮する。理解はしていても、腹落ちしていないから、うまい言葉にならない。俺は助け舟を出す。

「君、焼き鳥屋にいた子だよな？」

「あれ、おじさん、ここで働いてんの？」

店で聞いていた声よりトーンが低い。愛想が悪いのは客ではないから当然か。挨拶代わりのキャッチボールを終えて、俺はベルトコンベアに逆走することと生産性向上の意味について説明する。

店主がどうなったのか聞いてみたいところだったか、どうも聞いてはいけないことのように思えて、うまい切り出し方が思いつかない。三本の腕で目を光らせる焼き鳥マシーンを思い返す。店主の成れの果てだったりして。なんて馬鹿な思いも拭えない。切り出せなかった理由はもう一つ。矢鱈よく喋る女だったから。

「ベルトコンベアの手が上から逆走しようなんて大した発想だね」

アリは流れてきた機塊の左から摘みを引っ張り出して、右の穴に差し込む。

「無策の感染拡大で、もう仕事変わるの三回目だよ。今度は何か月雇って貰えるやら」

俺は機塊を引っくり返して、差し込まれた摘みを裏から引き出す。

「でもやっぱり朝から働くのはいいよね。もう深夜勤務なんか戻れない」

焼き鳥娘は、二台の機塊を連結させる。

「この塊、何になるの？」

俺はアリと目を合わせる。そいつを知ったところで給料が上がるわけでない。

「焼き鳥マシーンになったりしてな」

娘は唇を噛んだ。妙なタイミングで黙るなよ。気まずい空気を昼休憩のベルが打ち破った。

「キョウハ、ナニパンカ？」

「食パンだ」

アリはなんであれ感嘆の声を上げる。そして、「カレーソースだ」と言った。俺も感嘆で応えた。俺はパンを焼き、アリは何かしらのタレを拵える。多少肉の入ったカレーソースはアタリだ。

「なに、おじさんたち楽しそうじゃない」

「おまえも一緒に食うか？」

俺たちはカレーソースに食パンを浸して同じものを食った。焼き鳥娘がコンビニで買ってきたパスタも少しずつつきあう。俺は豆乳、アリは水道水、娘はボルビック。「軟水じゃないと気分が悪くなる」だなんて、水に硬さがあるなど信じていない。

「ウィリアムが打ちあがると同時にグリルを着火させてさ、一〇分間の飛行時間の間に焼き上げたんだよ」

俺は食後にクッキーを披露する。

「なに？ おじさんたち付き合ってるの？」

「ナイナイ。ワケナイデショウ」アリは口ひげが吹っ飛びそうな勢いで首を振る。

突飛な発言をする娘。俺は全力で否定するアリの姿にどこか傷付いている。

## 金曜日

俺たちは今日もベルトコンベアに逆らってカニ歩きを続けている。娘は相変わらずよく喋り続ける。

「今日が終われば休みだね。飲食店ばかりで働いてたから土日が休みってなんか新鮮」  
アリは流れてきた機塊の左から摘みを引っ張り出して、右の穴に差し込む。

「カニ歩きして同じ作業を繰り返しているばかりで、なんにも得るものないけど」

俺は機塊を引っくり返して、差し込まれた摘みを裏から引き出す。

「そういえば今週末に市議会議員の補欠選挙があるって知ってる？」

焼き鳥娘は、二台の機塊を連結させる。

「この塊、何になるの？」

俺はアリと目を合わせる。そいつを知ったところで給料が上がるわけでない。

延々と続くベルトコンベア。俺たちはカニ歩きのゾンビ。流れに逆らって緩やかに進んでいるのだからいずれそのはじまりにたどり着いてもよさそうなものだ。それでも、俺たちはこの工場のはじまりを知らない。俺、技能実習生のアリ、よく喋る娘、そのほか色のない男たちが蛇のようにうねるベルトコンベアの前に延々と連なる。一糸乱れぬカニ歩き。

時折、気まぐれのように現れるボス。果敢に挑むアリ。

「ネエボス、スコシダケアップネ、ボクノキュウリョウ」

ボスの顔色にわかに曇り、

「おまえのために俺の会社はつぶせねえな。ポーズ」

アリも俺も色のない男たちもみんなポーズ。髪型のことだよ。アリだけは立派な口ひげを蓄えている。黒い肌、輝く瞳、言葉に変換できない思いに時折見せる苦笑い。

「君の顔が好きだ」とは、とても言えない。

昼休みのベルがなる。引っくり返して引き出すことを止め、アリを昼飯に誘う。

「キョウハ、ナニパンカ？」

「食パンだ」

感嘆の声を上げた後、アリは「トマトソースだ」と言う。俺も感嘆で応えた。豆の入ったトマトソースはハズレだ。アリだって食パンはハズレだと思っている。それでも、俺はこのやり取りが好きで、欠かさずパンを焼く。

「今日もクッキー焼いてきたわけ？」

最近では娘が割り込む。

「もちろん」

そんな笑顔で喜ばれると「おまえのためではない」とは言えない。年の頃でいえば、音

信不通になった娘と同じくらい。三人で囲むランチに、俺は新しい家族の形を思い描いている。

乾いたパンにまずいソースを浸して口に運ぶ。俺は、豆乳でそいつを胃の腑へ流し込んだ。妙な味ほど、どこか身体にいいような気もしている。

「何このソース。不味いよ」

容赦ない娘に、反射的に手が出た。

「出された飯の文句を言うな」

引っ叩かれた頭を摩りながら娘は漏らす。

「容赦ないなあ」

不味い飯を終えたらクッキーを摘まむ。娘はココアを練りこんだクッキーばかりを食う。プレーンは不味かったか。娘は指を舐めてスマホを弄りはじめた。

「おじさんたち、誰に投票するの？」

俺はアリと目を合わせる。投票に行ったところで給料が上がるわけでない。

「決めてないなら、この人にしなよ」

俺は目を泳がせる。LGBTQが働きやすい職場づくり、パートナーシップ制度の導入、と書かれたピンク色のポスターには、見知った女が頬笑んでいた。俺は手を伸ばす。また引っ叩かれると思ったのだろう。娘は身を引いた。

「ちょっと見せてくれ」

「なに？ 知ってる人？」

俺の手にスマホを置いた。

「前妻だ」

途端、娘は食らいつく。それも明後日な方向に。

「なに？ おじさんたちゲイじゃなかったの？」

「ナイナイ。ワケナイデショウ」

アリは口ひげが吹っ飛びそうな勢いで首を振る。

「前妻って、おじさん結婚してたの？ てっきり二人は付き合ってるもんかと思ってたよ」

「ナイナイ。ワケナイデショウ」

俺は全力で否定するアリの姿にどこか傷付いている。

LGBTQなんて言葉をはじめて雑誌で目にしたとき、またメディアが新たな食べ物を流行らせようとしているのかと鼻を鳴らした。

かつて前妻に漏らしたことがある。

「俺、Bかもしれない」

彼女は眉を垂らして微笑んだ。

「違う。あなたはGよ」



## 土曜日

最後の訴えをする前妻の前には三人の女しか立っていない。それも、かつて見た覚えがあるママ友だ。タレント議員が応援に来てくれるわけでない。大物政治家が声を張り上げるでない。多少派手に着飾った女が襷をかけて声を張り上げている。

「ぼくらはみんな生きている。生きているから歌うんだ」

こういうの泡沫候補というのだろう。それならそれでやり方というものがあるのではないか。特攻服でダンスパフォーマンスはしないのか。レオタード姿でマラカスを振ったりするものではないのか。

それ以上に俺の目を奪ったのは、必死にビラを配っているもう一人の女だった。それは前妻の娘。俺の娘と呼んでいいものか。親権の無い俺だ。あいつのことを娘と呼ぶ資格はあるのか。

離婚以前から父娘関係は希薄で、あいつが高卒で家を出て以来、視界に収めるのはじめてだった。バスケットボールを追いかけていた頃のあいつはショートボブで、あんなに長い髪を伸ばしていたことはなかった。マスクで顔の半分は隠れている。それでも俺の娘であることに見間違いはしない。

「アレ、オクサン？」

「ああ」

「元奥さん」

言い直さなくてもいいだろう。俺の両脇にはアリと焼き鳥娘。無視され続けながらビラを撒く娘が俺たちに気付きはしないか。なんとなくカニ歩きをはじめアリの真ん中に置く。なんとなくではない。焼き鳥娘が俺の隣にいることに都合の悪さを感じたから。なんとなくだが。

最後の訴えを駅前で行うという情報を掴み、三人でやってきた。焼き鳥娘のスマホが無ければ情報を捕まえることができなかった。アリが「イコウ」と言い出さなければ、来るつもりはなかった。

「おまえが話を聞いたところで、そもそも選挙権ないだろう」

「日本という国は日本国籍を有している人だけで構成している人だけではありません。参政権を持っている人には、持っていない人の境遇や立場を、頭と心の片隅に置いておいていただけると、うれしいです」

突然流暢な日本語で話しはじめるものだから、俺は唾然とした。

「なんだよ。だれのものまねだ？」

頭がパニックに陥り、曖昧な態度を取っていれば三人で来ることに決まっていた。

「ミミズだって、オケラだって、アメンボだって、みんなみんな生きているんだ友達なんだ」

前妻は声を張り上げる。

「いいこと言うよね」

焼き鳥娘は声を震わせる。

いいことであるのには間違いないだろうが、いまいち響くものがない。トンボだって、カエルだって、ミツバチだって友達だと言いたいのだろう。スズメだって、イナゴだって、カゲロウだって。選挙戦になれば、誰もが聞こえのいいことを言う。週明けには日常を取り戻し、俺はまたベルトコンベアの前でカニ歩きをしている。どうせ機塊を引っくり返して、差し込まれた摘みを裏から引き出す日々を繰り返す。

どうしたらここから脱却ができるのか。恵まれない境遇にあきらめる。恵まれない能力にあきらめる。地主なんかは我儘者で、役人なんかは威張る者。こんな浮世へ生まれてきたか。わが身の不運とあきらめる。

そもそも脱却したいと思っているのかすら分からない。アリの俺のパンを「うまい」と言って食う。不味いタレに苦笑いを浮かべる。そんな日々が嫌いでない。焼き鳥女がもたらすアクセントに目を丸める。思わず後頭部を引っ叩く。

「レズビアンだって、ゲイだって、バイセクシャルだって、トランスジェンダーだって、クエスチョニングだって、クィアだって、みんなみんな生きていこうではありませんか」

前妻は声を張り上げる。

「いいこと言うよね」

焼き鳥娘はもう泣いている。

なんだその語尾は。俺は前妻の政治家口調にうんざりしはじめる。明日、日曜日の夜になったら、どうせまた時空の外側へ逃げるのだろう。そして、同じような一週間をやり直す。少しだけ修正を加えながら同じ日々を繰り返す。成長など望んではない。成長のない世界では不都合か。

それでも俺のテロメアは日々削られ、老いることから逃れられない。工場には標語が掲げられていた。

二〇〇〇万 筆筒に貯めて 明るい老後

あれだよ。俺が求めているのはあれなんだよ。肉体がどうにも働けなくなった時に二〇〇〇万くれよ。なあ、二〇〇〇万くれよ。何も知らない俺だって、偏向報道を繰り返すテレビジョンから都合のいい言葉を拾っているんだぜ。国には通貨発行権があるんだろう。

「二〇〇〇万くれよ。俺に二〇〇〇万くれよ。通貨発行権行使しろよっ」

俺は声を上げていた。ビラを撒く娘が背筋を伸ばす。

「市議会に通貨発行権なんてありませんっ」

一〇年ぶりか。あいつが俺にパスをした。

## 日曜日

バリカンが早朝と決めている。前妻と暮らしていた頃からの癖なのだ。パンツ一枚、風呂場でバリカンをするなら、床の乾いている時がいい。刈り取った毛を集めるに都合いいから。

よく分かっていない奴は「耳のまわりとか難しいよね」などという。一番厄介なのは旋毛まわりだ。バリカンは基本的に毛並みに逆らう必要がある。渦を巻くあいつには四方八方から追い込みをかけなければならない。失敗すればキューピーだ。

残念ながら数年ほど前から苦労はない。旋毛付近に豊かさが無くなってきたから。攻めるべき相手がいない。それでも今日はバリカンが上手いこと走らない。

昨日は、何十年ぶりにたんこぶなど拵えた。

「二〇〇〇万くれよ。俺に二〇〇〇万くれよ」

叫んでいたら、まずは焼き鳥娘から一撃。

「なんだよ。通貨発行権ねえのかよ」

ぼやいていたら、娘から一撃。これには泣けた。なにせ一〇年ぶりの触れ合いだ。そして、娘は焼き鳥娘にピラを差し出す。

「うちの父を殴らないで下さい」

焼き鳥娘は黙ってピラを受け取った。続いて、涙を堪える俺とアリにもピラを差し出した。

「清き一票をよろしくお願いします」

「ワタシ、センキョケンナイデス」

その一言に対する切り返しは用意がなかったようだ。あたふたと幼い姿を目にした俺は、ここぞとばかりに助け舟を出す。そして、焼き鳥娘の肩を叩いた。

「大丈夫。彼女が参政権を持ってない彼のことを思って投票するから」

焼き鳥娘の顔が華やぐ。

「まかせてダーリン」

満更でもないようだ。

「ナイナイ。ワケナイデショウ」

アリは口ひげが吹っ飛びそうな勢いで首を振る。なんなんだおまえは。

鏡に向かって九ミリに刈り上げた頭に乘せた二つのこぶを愛でていれば、ガラケーが震えた。画面には「焼き鳥娘」の文字。

「おう。投票行くか」

「アリ誘って行ってきて」

「は？」

「私、期日前投票で済ませてるから」

思いもしない答えが返ってきた。

「あれって、なんか特別な用事がある奴が行くもんじゃないの？」

「今日、ハロウィーンじゃない」

電話を放り投げそうになる。

「おまえ、渋谷で馬鹿騒ぎする気か？」

ショートメールに、虎柄ブラジャーで青い髪を伸ばした写真が送られてきた。

「ハンティングだっちゃ」

そんな身なりで自肅警察に行くつもりか。その真相を探るのは辞めておいた。

投票所の前にはアリの姿。

「ごめん。待った？」

「ナイナイ。ワケナイデショウ」

俺はただ前妻の名前を書くためだけに会場へ向かう。会場は近隣の小学校。二メートルのディスタンスを保ちながらジグザグに並ぶ。色のない男たち、ボスもいる。あそこに見えるのは焼き鳥居酒屋の店主ではないか。

「お一人ずつお願いします」

案の定、俺たちは足止めを食らった。

「同伴したい」

投票所で誘導する人間どもは公務員なのか、バイトなのか。面倒な客が来たと眉を垂らす。同伴が許されるのは一八歳未満の家族なんだとか。そのほか、補助者・介護者なんかは許されるのだとか。

アリはまた突然流暢になる。

「日本という国は日本国籍を有している人だけで構成している人だけではありません。参政権を持っている人には、持っていない人の境遇や立場を、頭と心の片隅に置いておいていただけると、うれしいです」

「そうさそうさ。俺はこいつと一緒に投票がしたいんだ」

勘弁してくれと眉で訴える。アリは俺から離れるようにカニ歩き。すると、満足した様子で背中を向けた。

こんな抵抗で何が変わるか知れない。投票を終えて辺りを見回したが、既にアリの姿はなかった。

俺は日暮れを待ち、焼き鳥居酒屋へ向かう。タッチパネルを打ち込めばベルトコンベアがビールジョッキを運ぶ。今頃、あいつは鬼の格好で馬鹿騒ぎする輩を裁いているのだろうか。一緒に騒いでいるのと大差はない。どこかで第六波を望んでいる。しばらく出勤は控えるように。

「この店、落ち着きますよね」

思いがけず色のない男が声をかけてきた。視線はタブレットに向いたまま。しかし、俺にかけられた言葉であることは間違いなさそうだ。タブレットに男の顔が映し出されたから。俺はこの顔を知っている。また小さな恋でもはじめてみようかしら。

俺が居酒屋で色のない男と会話をはじめるとき、技能実習生のアリは渋谷で娘とハイタッチしている。



## 二〇二一年一二月 ～正月は初脂

「いつだって若者がやっていることは正しいんだ」

今年一番響いた言葉は何かって聞かれたらこいつをあげる。聞かれないだろうからあげておく。ねほりんばほりん。香港で民主化運動を繰り広げた息子へ、父親が投げた言葉だという。報道と言う名の広報を除けば、我が国の国営放送もなかなか楽しいことをしてくれる。サンチャンなんかは割りと好き。受信料は払っている。

いつか俺も言いたい。傷つき敗れてもなお立ち上がる我が子に向かって、肩に手をおいて言いたい。でも、あいつはいつまでも Youtube を眺めながら阿呆のように笑っているばかり。あいつくらい頃、俺は何をしていたろう。Youtube なんてものはなかった。そもそもネットワークにつながっているパーソナルコンピューターなんてものが普及していなかった。手軽に情報を漁るならテレビかラジオ。エアチェックなんかする様になるのはハイティーンになってから。餓鬼にとって情報を媒介するものと言えばもっぱらテレビ。あとは悪友の言葉をどこまで信じ込めるか。俺は割と信じやすい質だったから一九九九には恐怖の大魔王が降ってきて世界は滅する予定だった。多くの餓鬼は怯えていたと思う。

翻って己自身の現況を鑑みるに、これはやっぱり良いとも悪いとも言えねえなあ、俺の場合は。君はどうだ？ 俺はこれは憂うべき状況とは思っていないけれども、ならばこれが良いのかと問われれば、まあまあだと答えざるをえないのがおおいに不本意だ。

言わずと知れたエレファントカシマシのガストロンジャー。最近の宮本の有り様が気になる。令和二年度（第七一回）芸術選奨文部科学大臣賞大衆芸能部門を受賞したとか。なんですかそれは。おまえは第一線から身を引いた爺さんか。俺だって歌謡曲を踏んできた世代だ。嫌いではないよ。それでも、なんなんですかそれは。最近、エヌエッチ系でよく観るではないか。国営放送にチャホヤ甘やかされて気持ちよくなってはいないか？ RCサクセッションにあこがれてバンドを組んだと聞いたが、結局、清志郎を継げるメジャーな輩はいない。未だこの国の音楽の最高峰は紅白歌合戦なのか。

学校から冬休みの予定表というものが配られたと発覚。冬休みも三日目に入った頃、ようやくあいつのペンで書き込まれた。一月一日は初脂だそう。スーパーマーケットで牛脂でももらってこい。その時、俺はおまえの肩を叩いて言うだろう。

「いつだって若者がやっていることは正しいんだ」

初詣ではなく、初脂だと予定表に書いたのだから、そいつを見事に実行してみせろ。餓

鬼男子一匹、それこそが本来あるべき姿であると思うんだ。いつだって若者がやっていることは正しいんだなんて、見事な親父の発言のように思えるが、おんどりゃなにさらしてけつかんねんとブーメランが返ってきてもおかしくはない。

俺が生まれたのはそう所謂高度経済成長の真っ只中で、それは日本が敗戦に象徴される黒船以降の欧米に対する鬱屈したコンプレックスを一気に解消すべく、我々の上の世代の人間が神風のように猛然と追いつけた、繁栄という名の、そう繁栄という名の、繁栄という名のテーマであった。

おい宮本、さっさと帰って来いよ。そして、俺たち世代のことをもっと批判してくれないか。

嗚呼そして我々が受け継いだのは豊かさどっちらけだ。あげくがお前人の良さそうな変な奴がのせられて偉くなっちゃって、それでもそこそこ俺達は生活してんだから訳わかんねえよなあ。おい。

俺たちの親と言えば、繁栄、繁栄、東京オリンピック、大阪万博、お祭り気分でワイワイしても許される世代だった。でも、俺たちは馬鹿の一つ覚えのようにそいつを繰り返すべきではなかった。東京オリンピックで、格差、格差、大阪万博で、衰退、衰退。あげくがお前人の良さそうな変な奴がのせられて偉くなっちゃって、岸田という男はどうにも掴みどころがなく、こちらもなんだか動きにくい。若者はえらいなあなんて阿呆のように口を開けて眺めているのが関の山。

「がっかりされるかもしれないが、グレタの発言に感動する人たちに共感はしない。誰も彼女に世界の複雑さや多様性を教えなかったのだろう。優しくて誠実な女の子だが、情報に乏しい。大人は未成年者が極端な状況に陥らないように全力を尽くすべきだ。誰かが子どもを自分の利益のために利用するなら、それは非難に値する」

プーチンのように居直るか。

Youtube に馬鹿笑いしていたあいつは、いつの間にやら真剣なまなざしでタイピングをしている。しかも、英文だよ。そいつは学校から案内された英語の教材なのだという。勉強は紙とペンだろうと言いたくもなるが、実際問題、仕事の上でペンを握ることは少ない。対面での営業活動が少なくなったから尚更だ。そもそも英文なんて本社へのEメールでしか使う機会がない。タイピングで十二分じゃない。ジョン・ハズ・ビーン・オフロヤサン・ファン・フォー・テン・イヤーズ。例文はもう少し考えられたものであって欲しい。

あいつは一月一日が初脂であることに、まだ気づいていない。実は本気で正月に牛脂を集めに行くつもりなのかもしれない。お節料理など食わない昨今、何か少しでもいいも

の食ってやろうと、すき焼きなんかを食す正月も増えている。

ポイント・オブ・ノー・リターンまであと何年残されているのか。牛肉など食うなよと言いたい若者も少なくはないだろう。食は文化なのだからそれは言い過ぎではないのと反論したくなる自分もまだここにいる。正月にはすき焼きだって食いたい。

一〇年後にも初脂を迎えらえるのだろうか。正月に牛脂を集めるあいつの正しさをいつまでも認め続けられるよう、なにをはじめるべきか。

大阪・関西万博開催迄あと一二〇☒日。



## 全裸の夢

昨年春先になると鼻が垂れるようになった。これが花粉症なのかしらと疑っていたが、二年目になって確信した。

歳を食っても短パンを愛して止まない俺は、ポケットに鼻セレブを突っ込み、アングラス・ヤングを気取ってグリーンのパロアジャケットを羽織った。短パンに厚手のジャケットだ。寒い季節に脚を鳥肌にするか、暑い季節に脇汗をかくか。俺はまだ肌寒く、花粉舞い散るこの季節に鼻を吸って外へ出た。

エイトホールブーツを鳴らして通りを歩けば、土佐犬とゴールデンレトリバーが夢中でじゃれ合っていた。その両脇には必死の形相で綱を引く飼い主たち。通りを塞がれ立ち往生していると、土佐犬の飼い主が俺に気付いた。

「すみません、すみません」

スキンヘッドに入れ墨した男は、眉を垂らしながら何度も頭を下げ、土佐犬を引きながらコンパスで円を描くように蟹歩きをはじめた。

「犬は犬が好きだね」

ボソリ呟いて男の脇を抜ける。そんなに犬が好きなら首輪につながれて人間と生きる道を選ばなくてもいいではないか。俺は短パンから足を伸ばし、「自由フランス軍歌」をハミングしながら大きく腕を振って闊歩する。向かうは蔦屋だ。

蔦屋に行く日は日曜日と決めている。土曜日にCDを借りてしまうと、どんなに草臥れていようが、翌土曜日の返却が余儀なくされる。日曜日に借りておけば週末のいずれかに返せばいいだろう。

仕事帰りの疲れた身体を部屋に転がしながらテレビを眺めていたところ、久しぶりに彼女の歌う姿を目にしたのだ。別段ファンだったわけでもないが、軽く恋をしてしまうミュージシャンっているじゃない。俺の世代で言えば、ヴァネッサ・パラディだったり、ドロレス・オリオーダンだったり。そして、彼女もその一人。バンドメンバーと夫婦になったなんて話を何処かで聞いた。子供もいるそうだが、液晶モニターに映し出された彼女の以前と変わらぬ印象になんとなく安堵した。CDの一枚すら買ったことがない。それでも、学生の頃にダビングしたカセットテープが実家に転がっているはずだ。当時の学級に随分と熱狂していた男がいたのだ。自己主張の強い面倒な男だったから、彼女にほのかな恋心を抱きつつも、手放しで同調する気にはなれなかった。

三度鼻を吸って立ち止まる。鼻セレブを一枚引き抜いて大きく息を吸った。そして、鼻を覆って鼻汁噴射。小首を振りながら何度も擤鼻していると、息を切らした飼い主とゴールデンレトリバーが俺を追い越していった。尻尾がフサッと臍を撫で、背筋がゾクッとした。

そういえば、最近、全裸の夢を見ない。かつてはよく見たのだ。社会に出る以前のことだったか。会社で中堅と呼ばれるようになるまで見ていたような気もする。その夢は突然見知らぬ街に全裸で立つところからはじまる。それほど人通りの多いところではない。辺りの人々には見えていないのか、全裸の俺を気にする様子はなかった。それでも、こっちは恥ずかしくてしかたがない。電柱に隠れ、街路樹に隠れ、あてもなく彷徨い、やがて地下鉄への入口を見つける。

なんで犬の尻尾で思い出したのか。俺は首を傾げ、湿ったティッシュを丸めてポケットに突っ込む。そして、さらに一枚、新しいティッシュを引き抜いた。

「嗚呼、きりねえな。あれが欲しいぞ」

あれとは以前兄貴の家でその存在を知ったあれだ。正月になれば隔年くらいで帰省する。去年は実家の近く家を構えた兄貴のところにも立ち寄った。チンパンジーみたいな写真と共に子供ができたという便りを受けていたからだ。冷たい弟だと思われまいよう、半ば義務感で顔を出す。

チンパンジーと指先で握手を交わしてから、俺は立ち上がる。

「男子便所借りるぞ」

「ウチに男子便所はねえから」

馬鹿兄弟のやりとりに兄嫁から失笑を買った。

他人様宅での小便には、便器の水たまりに直接注ぎ込んで音を立てぬよう、放尿角度には十分注意を払う。また、飛沫を最小限に抑えるため、やや中腰で便器までの落下距離を多少でも縮める。青春期、はじめて一人暮らしの女宅を訪ねた際に体得した技だ。

用を足して便所から戻れば、兄貴はなにやら管の伸びた器具を咥えていた。その先には小さな哺乳瓶のようなものが付いている。そして、兄貴は腕の中に収まる赤子の鼻へ、小さな哺乳瓶の乳首を差し込んだ。むずかる赤子を押さえ込み、一気に口をすぼめる。兄貴が赤子の鼻を吸っている。ズズって。俺はその姿に大いに驚かされた。バカ親は赤子の鼻を吸うほど親バカになれるのか。

でも、あの器具はいいよな。あれなら自分の鼻だって吸えるだろう。いくら鼻セレブがソフトだと言ったって、皮膚への摩擦がゼロになるわけではない。花粉の季節、擤鼻のしすぎで鼻を赤くしている連中に、もっと普及していいのではないか。見ようによっては小型の水煙管のようでもある。胸ポケットからスッと抜き取り、スマートに自分の鼻を吸ってみせれば、小粋な感じにも見えないだろうか。ジョニー・デップあたりが鼻吸い器をはじめれば、花粉の季節を多少は楽しめるようにもなるだろう。

そんな日が来るのを妄想しながら再び歩き出す。すると、今度は毛の薄い小型犬がキャンキャン吠えていた。綱がピンと張られたゴールデンレトリバーは物珍しそうに鼻を寄せる。さっきとは打って変わって大物の風格を見せつける。

「それにしても、犬は犬が好きだね」

俺はボソリ呟き、その脇を抜けた。

蔦屋は、この辺りでは比較的新しいが、あまり目玉のないショッピングモールの中にある。スーパーマーケットや薬局なんかも入っているから、文句を言いながらも利用頻度は高い。

建物に入るとやたらと甘い臭いが漂ってきた。鼻孔を左右に振ればスーパーマケッ

トから匂ってくるようだ。

「なんか甘い匂いしない？」

「スーパーの中のパン屋じゃない？」

ユニクロとGAPで身を固めた無難な男女の他愛ない会話が耳に届く。途端、理由も分からず腹立たしさが込み上げた。俺は男女に顔を背け、ブーツを鳴らして鳶屋の自動ドアを踏んだ。

五十音順の棚に沿って彼女たちのコーナーへ足を運ぶと、「スーパーベスト」、「シングルコレクション」、「グレーテストヒッツ」という傷だらけのCDが並んでいた。俺は其中でも比較的傷の少ない「スーパーベスト」を手を取った。テレビではくしゃくしゃの笑顔を見せていた彼女だったが、若かりし頃のつるんとしたすまし顔で視線を外している。俺はそのジャケットを眺めながら試聴コーナーへと足を運んだ。

店内の一画にはラジカセが並んでおり、自由に視聴ができるようになっている。そして、そこにはしょっちゅう見かける少年がいた。CDを回しては俺の知らない歌を鼻歌で奏でる。一曲聴いてはCDを取り出し、次の一枚を取りに行く。俺は少年が愛用しているラジカセの隣に立ち、顎の下からヘッドフォンを装着した。そして、聞き覚えのあるタイトルをいくつか再生する。

「ああ、これこれ」

彼女の歌声が鼓膜を打つと、餓鬼の頃に通った地元の床屋を思い出した。あの頃はラジオから彼女の歌がよく流れていた。AM放送がモノラルだった頃、DJの口調もどことなくモノラル仕様だった。いい匂いがする粉を顔にまぶされながらDJの曲紹介に耳を傾ける。今週の第一位は？ ジングルに続いて、彼女らの曲名が読み上げられた。曲名に含まれる「Yeah! Yeah!」の言い回しは「いえいえいえい」だった。正確に言えば、や行の「え」、「ゑ」か？

ブーツの中でつま先を動かしてリズムを取る。サビの部分に差し掛かると、半ば無意識に合いの手を入れていた。

「いゑい♪いゑい♪」

新たな一枚を運んできた少年は、ラジカセにセットしながら怪訝な顔を向ける。途端、俺は全裸の夢にうなされた餓鬼の頃へと引き戻された。全裸だったのは夢の中だけではない。いつだって自分の存在が恥ずかしくて仕方がなかった。全裸で町を歩かされる多感な十代。何の武器も持たない丸腰の十代。ひとまず明かりを避けようと地下鉄へ逃げ込むが、電車に乗って帰るわけにも行かない。こっちは全裸なんだ。いくら周りの連中が気にしなかりょうが、俺は全くのスッポンポンなんだよ。

俺は疼く思いを奥歯で噛み締めながらカウンターへ向かう。バイトの若者に「スーパーベスト」を差し出せば、俺の思いなど露知らず、マニュアル通りにTカードを要求し、儀式的に検盤した。

「レンタル期間どうされますか？」

「あ、じゃあ一週間で」

今日にもPCに取り込んでしまうのだから、本当は一日あれば十分だった。しかし、平日の会社帰りに返却するのは億劫だ。そいつもさることながら、レンタルCDの取り込みが合法であるのか自信が持てず、一週間だけ楽しむという体にしておく。

俺はレンタル用の小さなバッグを提げて蔦屋を後にした。そして、鼻を吸りながら冴えないショッピングモールをあてもなく彷徨う。便所マークを見つければ途端に便意を催した。

便所に誰もいないことを確認し、個室に籠もる。ベロアジャケットを戸当たりに掛けて、短パンとブリーフを一気に下ろした。続いて、便座に腰掛け、彼女のCDを取り出した。ライナーノーツでも読もうかと、陰気臭い表情のジャケットを開くと、満面の笑顔が現れた。俺は途端に気恥ずかしくなりそいつを閉じる。そして、CDケースに戻してから、出すべきものをひねり出した。

外出時のウォシュレットは、ささやかな楽しみである。言うなればロシアンルーレット。温度も水勢もポジションも分からないまま、肛門に力を込めて「おしり」ボタンを押すのだ。放水が肛門付近を射抜いた瞬間、ビクリと身体を揺らす。しかし、少々期待はずれであった。物足りなさを覚えた俺は水勢を上げる。そして、毎度のように洗浄位置を一番手前にしなくてはならないのは、一般的な肛門位置とズレがあるからなのか。程良い放水が肛門を打てば、真一文字に口を結んで、しばらく放心した。

尻を水洗する前に軽く紙で拭うべきでないかと言う奴がいる。いきなり勢いよく放水したら周囲を汚すではないかという考えだ。俺もかつては同意した。しかし、歳を食うとどうも摩擦力に恐れをなす。皮膚や粘膜を傷つけて、酷い炎症を起こすのではないか。そして、「おしり」ボタンで放水を止めると、トイレットペーパーを何重にも巻き取り、洗浄後の肛門にそれをそっとあてがう。何度か繰り返し、すっかり湯を吸い取った。

操作パネルには小さく「マッサージ」というボタンがある。機能的には放水に強弱をつけるというものだが、肛門に刺激を与える意味は何なのか。どう考えても健康への効果は期待できない。それ以上に卑猥な思いがかき立てられ、外出時の使用は控えている。

もう一卷きトイレットペーパーを手に取り鼻をかみ、股を開いてそれを落とす。続いて、座ったまま「大」ボタンを押した。股の間を覗き込み、大量のトイレットペーパーがなんとか流れ切るのを見届けた。そして、ふうと一息。半ズボンを履いて立ち上げればいいのだが、どうにも重い腰が上がらない。俺はもう一度彼女を取り出し、その笑顔と向き合った。自然と奥歯に力がこもる。これは恥じらいだろうか。

全裸の夢は、俺を地下鉄へと運ぶ。下り階段を覗き込むと、そこには誰もいない。ひっそりとした階段が奥深くのびていた。そこで俺はこの世界が夢であることに気づき、その出口へとゆっくり下っていく。やがて夢から抜け出し、大量の汗にまみれた身体から掛け布団を退けるのだ。

手の中には彼女の笑顔。そして、俺は問いかける。

「全裸で出て行ったらどうなるだろう」

もちろん返答はない。

「刑法一七四条。公然とわいせつな行為をした者は、六月以下の懲役若しくは三〇万円以下の罰金又は拘留若しくは科料に処する」

そんなことが空で言える。何かの拍子にインターネット検索をしたのだ。「公然わいせつ罪」と入力して、エンターキーを叩けば情報は出てくる。何かの拍子にだ。

「馬鹿なヒト」

俺は目を丸めて顔をあげた。そして、個室の扉を凝視する。女の声のようだ。扉の向こ

うから届いたと考えることが自然だろう。しかし、ここは男の聖域、男子便所だ。ひょっとして間違えて女子便所に籠もってしまったのかしら。となれば、一七四条とはまた別の刑に処されることになりそうだ。手のひらが汗ばみ、彼女のジャケットを強く握った。

「痛い痛い痛いっ」

再び視線を落とせば、笑顔だった頁がくしゃくしゃの苦悶の表情に変わる。

「ゑ」

俺は、口目鼻から毛穴まで、顔中の開口部を全開にして阿呆な声を放った。写真の彼女が苦悶の表情で痛い痛い痛いっ。ありのままを見届けても、何一つ状況が理解できない。しかし、それは俺に大きな勇気を与えることになった。ここは夢か。そして、俺はシャツのボタンを外していく。ブーツを脱いで短パンとブリーフを脱ぎ去る。そして、再びブーツの紐をきつく結んだ。

水勢を最大にして再び「おしり」を押す。気合いを注入したなら優しく肛門を拭う。写真の皺を伸ばせば、彼女はすっかり笑顔に戻っていた。

「おい」

彼女に声をかけるが返答はない。

「馬鹿なヒト」

俺は声色を真似て、彼女をCDケースに戻した。

「さて」

俺は勢いよく立ち上がる。便器の蓋を閉じて衣類を積み上げると、その上に蔦屋のレンタル袋を乗せた。個室の施錠をそっと外して、扉の隙間から様子を伺う。そこは入ってきた時と変わらず、小便器が並ぶ男子便所。当たり前のことにホッと一息。便所には誰もいないようだ。餓鬼の頃なら大便後の個室を出ると言うだけで、それはそれはグレートエスケープであった。自宅以外での大便は悪だと信じられていたあの頃。その懐かしい感覚と唯一身につけたブーツの異様な重さを噛み締め、俺は大いなる一步を踏み出した。

そして、俺は男子便所の中央に立つ。目の前に手のひらを広げ、自分が全裸であることを確かめる。視線を滑らせ肩口から下におろせば、陰毛の向こうにチェリーレッドのエイトホールブーツ。続いて、辺りを見回せば真っ白なタイルの空間。開放感と緊張感が拮抗する中で、俺はSF的な宇宙船に立つキャプテンにでもなった気分だ。

しかし、何処かSF感が足りないのは、やはり便所に漂う獣の臭気と中途半端な体毛のせいだろう。どうせ生やすならチューバッカのように。無いなら無いでフリーザ様のように。無駄な体毛が俺を現実を引き戻す。

体毛といえば思い出す笑い話がある。職場の女に聞いた話だ。彼女の恋人というのがやたらと毛深い男であるらしく、嘘か真か夏であっても蚊に刺されないという。実際、男の胸元で毛に絡まれながらもがく蚊を目撃したのだとか。

「彼の毛はムダ毛ではないのよ」

なかなか秀逸な褒め言葉であったと思うよ。

俺はブーツを鳴らして歩きはじめる。クランクに入れば現れる洗面所。鏡に映る自分を横目に出口に向かえば、正面の壁に姿見が張り付いていた。強制的に自分自身と向き合う羽目になり、俺は立ち竦む。醜く膨れた腹。陰毛を中心として身体中に広がる中途半端なムダ毛。いくらお気に入りのブーツだって、こうあってはならない。

すると、女子便所へ向かう女が横切った。醜い全裸男が映る鏡の前を、細身の女が春色のトレンチコートを揺らして、小気味よくヒールを鳴らす。俺はその絶望的な背景に春色の女が収まる瞬間を切り取った。そして、声が漏れそうになるのを必死に飲み込み、男子便所へ引き返して行った。

そして、再び個室に籠もる。艶のある髪に隠れた女の横顔を思い返し、見られていなかったことに胸をなで下ろした。男子便所の中だったけれど、やっぱり一七四条に処されるのかしら。男子便所を覗き込んだとなれば、彼女にも非があるわよね。男子の聖域で全裸になってなにが悪い。

ヒトの気配に耳を澄ます。女が踏み込んで来たのか。まさか。ジッパーをずり降ろす音に続いて、小便器の排水口を打つ音が響きはじめた。俺は眉を顰める。男子便所とは言え、排泄が立てる音に無頓着な輩には嫌気がさす。

俺は再びCDケースを取り出し、彼女に問いかける。  
「全裸で出て行ったらどうなるだろうね？」

そして、声を裏返す。

「馬鹿なヒト」

続いて、ジャケットを強く握りしめる。

「痛い痛い痛いっ」

俺は堪えきれず笑い声を上げる。小便器の流水が止み、いくらかの静寂の後、ドアがノックされた。

「あ、入ってまます」

俺は答える。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫でえす」

この状況でノックをしてくるなんて、よっぽどの正義感の持ち主か、ただの物好きだろう。男はそれ以上何も問いかけてくることは無く、気持ち程度に洗面所とハンドドライヤーを動作させて消えた。

割といい奴だったのかもしれない。男はスマホでツイッターでも流し読みでもしながら、用を済ませて便所から出てくる女を待っているのだろう。幾分切なさが込み上げた。

「嫉妬しとっど？」

どうやら俺はあんな一瞬の出来事で春色の女に恋をしたようだ。こんな無防備な姿でなかったらそんなことはなかったろう。「あ、きれいな娘」程度の感想を抱いて便所を後にすればよかった。

それなのに俺は青春期の小僧のように胸を躍らせて逃げ出したのだ。青春期のドキドキ。それはきっと気の弱さによるものだろう。壮年期になれば、かかるストレスにも、かけるストレスにも随分と耐性がつく。多少の迷惑はお互い様だと身勝手な思考が定着し、いくらか強気で世を渡る。それをヒトの成長というのか。俺はもう全裸で便所を踏み出さなければ、胸の高鳴りさえ得られなくなった。それは劣化ではないか。

ロングコートに身を包み、突然、女の目の前で醜い身体を晒して「な」と同意を求める(?) そんな性的思考を持つ男がいる。あんな風にはなりたくないわけではない。俺はただ、全裸の夢に悩まされていた頃に戻って、失われたドキドキを再び味わってみたいと

思うのだ。

「全裸で出て行ったらどうなるだろうね？」

CDケースに視線を落として声を裏返す。

「あんた、やるって決めたんでしょ」

俺は舌を打つ。こんなところで脂っぽい上司の顔が浮かんでしまった。酒の席になると決まって聴かされる説教がある。いい歳して上にあがろうとしないのは、俺に覚悟がないからだという。

「覚悟ね」

青春期の気の弱さが懐かしく羨ましい一方で、壮年期の気の強さとチープなプライドが邪魔をする。冴えないショッピングモールを全裸で駆け抜けた時、俺は何を得るのか。そこには、どうしても一つ小さな心配が残る。どうやら経理の女が近所に住んでいるらしいのだ。通勤途中に未だ遭遇したことはないが、人伝に聞いた限り、この町に住んでいることは確かなようだ。仕事上の接点もなく、廊下ですれ違っても会釈程度の間柄だが、営業の馬鹿がショッピングモールを全裸で疾走したとなったら、さすがに黙ってはいないだろう。もし、ショッピングモールで全裸疾走する経理の女を見かけたら、俺だって黙ってられない。

「いや、意外と黙ってるかも。他人にはちょっと言い出せないよな」

でも、それは俺が今まさにそれを実行しようとしているからであって。

「いや、待て。本当に実行するのか？」

覚悟がないからだ。

「黙れ。油ずまし」

自問自答の末、個室のロックを外す。そして、そいつを掴まんだまま、扉を引くタイミングを計った。さながら学内で禁断の大便をしてしまったローティーンのように。男子便所にヒトの気配はない。こいつを開けると同時に駆け出したほうがいいだろう。姿見に映る絶望的な己と目を合わせてはいけない。高鳴る鼓動を感じながら「覚悟」と呟けば、不意にヒトの気配がして、反射的にロックした。嗚呼。

扉の向こうでは、子連れの人による小便の指導がはじまった。ズボンを下ろして、パンツを下ろして、そいつを掴まんで一歩前へ。少し長くなりそうだ。手持ち無沙汰になった俺はCDケースを袋に戻し、便器の蓋に無造作に詰み上がる衣類をたたみはじめた。縫い目を合わせて几帳面に折りたたむ。短パンの上にシャツとパンツを積み重ね、戸当たりに掛けられたベロアジャケットを見上げた。

「こいつはこのままでいいか」

男の小便指導は最後の手洗い指導へと移る。ちょっと手を濡らして、石鹸付けて、ああああそんなに付けないでいい。ハンカチは？ 何？ 忘れたの？ いつでもママが言ってるだろうっ。

全裸の俺は腰に手を当てて貧乏揺すり。速く出ていけとブーツでいい加減なモールツ信号を送る。ああもうビッチャビチャ、と言い残して子連れは消えた。

想定外の子供の登場に俺の心は挫かれる。自分にとって最大の敵が自分であることに気づいていない無敵の存在。ショッピングモールを全裸で駆け抜ける人間の覚悟に、指を差して笑うだけの無能な存在。世界にはそんな厄介な輩もいるのだ。

「でも、おまえらはそれでいい」

おまえらが成長する中で俺を思い出すことがあるだろう。全裸で駆け抜けたあのおっさんは何だったのか。しばらくはおまえらの笑い話になるだけだろう。しかし、ある時、あんな馬鹿がいたという記憶が、おまえらの支えになるかも知れない。そして、社会で揉まれるようになれば、あの時のおっさんを理解する日が来るのだ。その時、やるやらないは紙一重だ。

気持ちの整理が付けば、思いがけず清々しい気分でロックを外すことができた。便所の外へとゆっくり歩きだし、姿見に映る自分と向き合う。醜く膨れた腹。陰毛を中心として身体中に広がる中途半端なムダ毛。そして、お気に入りのエイトホールブーツ。その完璧なまでのおぞましい形に、俺は口角を持ち上げて親指を突き上げた。

「グットラック」

そして、便所から一步踏み出す。続いて、二、三、スキップしてから一気に加速した。まるで縁のない眼鏡屋の脇から飛び出し通りに出れば、直角に折れて商店の並ぶ通りを駆け抜ける。声は立てずに辺りに耳を澄ます。小さなショッピングモールだ。携帯ショップと美容室を横切れば、すぐに突き当たりのゴルフ屋にぶつかる。周囲に声をあげる者はいなかったが、自動ドアを踏んでゴルフ屋から出てきた男が目を丸めた。

一度、駅前の繁華街で全裸の女を見かけたことがある。気の知れた同僚とタクシーで客先に向かう道すがら、ふと白肌が目に飛び込んで来たのだ。何かの撮影だったのだろう。あの時は声を上げて盛り上がったものだ。しかし、それはタクシーという密室に守られていたからだ。歩いている目の前に全裸の女が現れたら、きっと俺も目を剥いて絶句したに違いない。

俺は珍妙な顔を晒す男から目を逸らし、折り返して登りエスカレーターに飛び込んだ。それは我ながら意外な行動であった。最上階まで駆け上がろうというのか。律儀に左に寄る人々を追い越し、俺は駆け上がる。災難なのは下りエスカレーターに乗る人々だ。彼らは強制的に醜い全裸男を目に焼き付けることになる。ドミノ倒しのように次々と目が見開かれていく。続いて、頭上にはファーストフードショップの見慣れたロゴが見えてきた。エスカレーターを駆け上がるにつれ店舗の全貌が現れる。次第に嫌な予感が込み上げてきた。

エスカレーターを上り切れば、案の定、小娘らの声が響いた。ブレザーを纏った茶髪の似たような顔が三匹、ヤバいだの、ヤバくないだの、キモいだの、キモくないだのと連呼する。俺は苦笑いを浮かべて、その場を走り去る。逃げるように茶髪の小娘らに背を向けると、不意に違和感を覚えて減速した。

そして、俯き加減に立ち止まる。

「違う」

全裸の夢に恥じらっていた頃とはまるで違う。あの頃の俺は全裸で歩かざるを得ない自分を恥じていた。それに対して今はどうだ。ヤバいだの、キモいだの、他人の評価に恥じている。

「違う」

そもそも俺に恥じらいはあるのか。全裸で一步踏み外した時から、俺は恥じらい以上に達成感を覚えていた。事を成した男が茶髪の小娘らの評価などに恥じらうわけがない



だろう。そこにあるのは理解のない貴様らへの怒りのみ。そして、俺は大人のあり方というものを見せつけてやろうと思いはじめる。

俺は振り返る。なに？ ヤバくない？ ちょっと怖いんですけど。怖い怖い怖い。慌てる小娘らから視線を外し、真っ直ぐにファーストフード店へと向かう。

「サンキューセットにスマイル一つ」

俺は呟く。

「サンキューセットにスマイル一つ」

ややトーンを上げる。

「サンキューセットにスマイル一つ」

三匹で群れ固まって、キモい、怖い、を連呼しながら後ずさる小娘らには目もくれず、俺は真っ直ぐにファーストフード店へ突き進む。ようやく気付いた。恥じらいなど躊躇齧りの甘え根性に過ぎない。自ら身銭を稼いで生き抜くため、疾うに捨て去ったものであった。

「サンキューセットにスマイル一つ」

窮屈な世界で生き抜く大人というものを、しっかりと記憶に焼き付けておけ。しばらくは笑い話のネタにすればいい。ある時、貴様らの支えになることもあるだろう。そして、いつしか紙一重の行動をとる日が来るのだ。

「サンキューセットにスマイル一つ」

多くを口にするつもりはない。俺は全裸でファーストフード店に乗り込む。カウンター越しには一人だけ色の異なるシャツを着た男が立った。店長と覚しきその男は、強い意志を持った眼差しで俺を迎え撃つ。そこで俺はオーダーするだけ。

「サンキューセットにスマイル一つ」

すると、背後からいくつもの足音が駆けてきた。咄嗟に振り返れば、制服を来た警備員らしき男たちが肩を揺らしている。次の瞬間、俺はブーツを鳴らして逃げ出していた。上ってきたエスカレーターを転げるように駆け下り、ゴルフ屋で折り返す。そして、美容室と携帯ショップを横切ると、眼鏡屋を折れて便所へ駆け込んだ。

洗面所を横切ると、試聴コーナーの少年がたっぷりの泡を立てて神経質に手を洗っていた。鏡越しに写るこぼれ落ちそうな目が俺を引き止める。俺は便所の真ん中に立ち、少年へと振り返る。

「なんだよ。糞でもしてたのか？」

少年は阿呆のように口を開いて、首を振る。

「おまえにも、いつか分かる日が来る」

俺は親指を突き立て、再び踵を返した。もと居た個室に目をやれば、丁寧にたたまれ服が積み上げられたまま。さすがに使用者はいなかったようだ。俺は個室に戻りロックをかける。そして、積み上げられた服の上に腰を下ろして息を整えた。

すぐにたくさんの足音が到着する。

「不審なヒトいませんか？」

「裸のおじさん」

あいつ、まともな応答ができるんだな。思いかけず口元が緩む。しかし、扉が何度も叩かれれば、すぐに身体が引き締まる。

「入ってまあす」

俺は気の抜けた声を出し、目一杯平然を装った。

「さっきの裸のヒトでしょ？ 警察呼びましたからね」

嗚呼。

「おまえらには、俺の気持ちが分からんのか？」

口をついた言葉が、なんだか芝居じみていて嫌気がさす。

「何があったか知りませんが、お店の中であんなことされちゃ困りますよ。男の子が怖がっているじゃないですか。何か嫌なことでもあったんですか？ お酒でも呑んでるんですか？」

随分とよく喋る警備員だ。警察が来るまで無駄話でつないでおけというマニュアルでもあるのか。ならばと、俺は無用な知識をひけらかす。

「刑法一七四条。公然とわいせつな行為をした者は、六月以下の懲役若しくは三〇万円以下の罰金又は拘留若しくは科料に処する」

「なになに、随分詳しいじゃないですか。法律関係の方？」

法律関係の方とは誰だ？

しかし、ここで刑法一七四条に処されたとして、俺の目的は達成されたのだろうか。ショッピングモールで全裸疾走することで得られたら満足は、示された覚悟は、土佐犬と相撲を取るよりも上等なものだったろうか。それよりも、もっと上等なものはなかったのだろうか。

「んあっ」

こんなタイミングで俺は思い出す。

「なになに？ どうした？」

春色のコートを纏った女の、黒髪に隠れた顎のライン。あれは美容室でバッサリ紙を切った経理の女だったのではないか。

「まずいよ」

「どうかしました？」

「俺は恋をしているようだ」

「は？」

俺はトイレトペーパーを巻き取り、大きく息を吸って擤鼻。続いて、尻に敷かれたCDを取り出す。そして、ジャケットの彼女に呟いた。

「実に久しぶりだよ。とてもいい気分だ」

## オイ、人間

人間はもう終わりだ！

ループしたまま頭を離れない。最新のヒット曲ではない。ポピュラー音楽に多少興味を持った同世代ならば知っているでしょう。真心ブラザーズ。メジャーな曲であるのか知らないけれど、蔦谷で借りたベスト盤には入っていたよ。ネットを叩けば二〇年も前の曲らしい。二一世紀の幕開けだ。俺たちの未来は幕が開いてから早二〇年が過ぎた。どんな時代にも人間なんてラランなんて曲があって、こいつは俺にとってのニンゲンソング。

アイ・ショット・竹中平蔵なんて唄を書いて光を浴びたい。それでも、あいつがどこまでの悪で、この国をどれだけ腐らせてきたのか、いまいち理解していない。ただ資本の増大に執着、中抜きは九割のアイコンとして認知している。みなさん野垂れ死んでくださいと、あいつらははっきり言わん。肝心を避けて上面な言葉に拳を握る。

拳銃の手っ取り早い入手方法はやっぱり警官殺しかしら。救いと言え、あいつらが俺よりも遥かに年上だということ。いつか死ぬ。いつか絶対死ぬ。普通に生きていれば、あいつらは俺よりも先に死ぬ。だから、自分の健康には気をつけて。週に二日は酒を抜く。あいつらのいなくなった世界を悠々自適に楽しみたい。

なにより気がかりなのが、瀕死寸前のこの地球。あいつらは全てを吸い付くして死んでいく。欲の限りに味わい尽くして地球とともに死滅するのが理想なのか。指を咥えて死ぬのを待っていたらみんな仲良く滅亡する。安心している人間が嫌いだ。誰が言った。非合法の暴力を否定するつもりはない。三島だ。一对一の決闘の思想を持ってすれば政敵の暗殺も厭わない。近代ゴリラだ。拳銃の手っ取り早い入手方法はやっぱり警官殺しかしら。

中二になった小僧は、未だ休日になれば「サッカーボールを蹴ろう」と俺を誘う。妻はそろそろあいつに性教育が必要だと言いはじめる。俺は苛々している。新しいスパイクが欲しいとあいつは言う。俺は苛々している。性教育に関するテレビプログラムを録画したから一緒に観ろという。俺は苛々している。小僧の未来に地球が無事であるよう祈っているくせに、あいつと遊ぶことすら拒んでいる。あいつが将来困らないよう性教育を受けさせることが、無上に面倒臭い。友達と遊んでくれ。勝手に学んでくれ。俺は苛々しているのだ。愛するおまえのため、こんなに社会を憂いているのだ。もう少し苛々させないよう気を配ってくれないか。

「偏差値五〇も無いようじゃ、大学なんか行けないぞ」

自分の顔面に拳を食らわせてやりたい。餓鬼の頃から勉強は多少できた。運動は音痴

だ。性教育なんか受けなくとも、なにか困るようなシチュエーションに出くわしたことはなかった。俺はもっと楽がしたい。易々とおまえの未来を守りたい。

「土日、ちょっと一緒に勉強するか」

小僧は渋る。そりゃそうだ。あいつは俺とサッカーボールを蹴りたい。

「いいお父さんでよかったね」

妻が追い込む。小僧の中に、俺の申し出は有り難いことなのだという価値観がねじ込まれる。あいつは唇を噛んでそいつを受け入れた。平日は身を粉にして働き、週末は勉強の面倒を見るのだ。一時間で勘弁してくれ。早々に自分なりの勉強方法を見つけてくれ。

高校受験を越えて、大学受験を越えて、就職試験を越えて、その先にあいつの平穏な生活が待っている。なんてレールを走る列車のシートはグランクラス。幼いころは電車の運転士になりたいと言っていた。おまえが大人になる頃、人間は遠方まで移動するというニーズがあるだろうか。最近では、サッカーの実況中継がやりたいなんて言っている。プロスポーツには、まだまだ人間を感動させる余地があるだろうか。テレビは消えるだろう。それでもダブーンとかあるじゃない。ネットビジネスはまだまだ将来があるかしら。仮想空間の活用方法を十分に理解していないが、電車の運転士より将来性があるのではないかと検索する。

三五年ローンを組んで一〇年。俺だってまだまだ働かなくてはならない。ポイント・オブ・ノーリターンまであと数年と言われる昨今、ローン返済は一体どうなる。あいつに教育を受けさせ、住宅ローンを完済する。そいつが人生の目標とは思わん。それでも、愛すべき家族のため、これが俺のプライオリティーと受け入れる。資本増大執着主義の国家で、なんとか己を満たし、楽しんで生活費用を稼ぐことはできないか。

ライ麦畑のキャッチャーが何より素晴らしい仕事だと感化された頃もある。最近だと、全国ツアーを回るミュージシャンのお抱え運転手になりたいなんて夢想する。「グリーンブック」という映画を観たばかりなのだよ。面倒臭い男たち。強く賢い妻。男が考えそうな設定だ。泣けるシーンがなかったのが救い。要所所できちんとオチがつく。竹中平蔵をシュートしたいほど資本増大執着主義を憎んでいるくせに、アマゾンプライムで鑑賞したの。嗚呼、俺の馬鹿。馬鹿な俺。言い訳がましく言うけれど、契約した覚えはないのだよ。俺のミスだろうか。妻のミスだろうか。小僧がネットでなにをしたことはないだろう。

「なんか最近送料かからないよね」

「知らん。俺、ネットで買い物しないし」

アカウント情報を調べてみれば年額を取られているではないの。ならば無料で観られる映画くらいは観てやれ。モノは買わんで地元で払う。俺なりの線引きでアマゾンを活用することに決めた。

それにしてもお抱え運転手。二ヶ月間、はじめて出会った男と二人旅をする。家族とも離れてひたすらハンドルを握る。家族との関係を絶ちたいと思ったことはない。収入を維持して家計を支え続けたい。それは心から思えることで、俺の価値なんてそんなものでいい。出世欲は無いが、現状維持は欲している。金というものが未だ信頼されている社会で、そいつを家族に供給し続けることに対し、多少の満足感、もしくは達成感と呼んでもいいようなポジティブな感情はあるのだ。

それでも人間と人間。距離を置いてみたくなることもあるでしょう。ビジネス向けのリンクドインでアカウントを取っている。長年会社員をしていれば、期待を煽る情報は流れ込むが、音楽家のお抱え運転手なんて仕事は舞い込んでこない。

それでも強く願っていただかなんとかなる。ある程度。チャンスを逃すまいとアンテナ張っているのだから。僅かな巡り合わせに手を挙げる。欲を言えば、金持ちの音楽家に誘われたかった。新太はどこにでもいるような駅前広場の路上音楽家だった。手売りで一〇〇万枚を目指す豪儀なことを言う。それでも自分で焼いたCD-Rは五〇〇枚に満たない。

「ダウンロードも含めてね」

新太はパンパンの顔で笑った。「声がいい」と多少SNSで話題になっていた。出る杭を打つ輩は一定数。「声がいい」なんてやつは幾らでもいる。成功者以外は否定するな。新太がいくら歌ったところで明日も陽は昇る。

鞆が壊れると路上音楽家が儲かる。

駅前まで足を運んだのは、ミスター・ミニットだか、プラスワンだか、修理屋があることを思い出したから。仕事用のリュックサックが使い物にならなくなったのだ。サムソナイトだぜ。多少奮発して買ったのに、サイドポケットのチャックがすぐにやられた。続いて、一番長いチャックも解れてきた。メーカーのサイトを見れば、チャック一本で修理に一万円は越えるという。しかし、そいつは製造屋だけの悪徳商法ではないようだ。ミスター・修理屋は、メジャーを当ててチャックの長さをはかると、製造屋と変わらない金額を告げた。

「ちょっと、考えます」

新品買っちゃおうかな。早くも足が東急ハンズへ向かい始めるが、それではあいつらの思う壺だ。所詮、修理屋も製造屋も資本家の手のひらで転がる。チャックが駄目なら、洗濯ばさみで止めておけばいい。踵を返してショッピングモールを後にしたところ、新太の歌声が割り込んできた。

いいな いいな 人間っていいな

新太から一〇メートルほど距離を取ったところには手を取る親子。飛沫対策かしら。そんな歌を今の子供たちが知っているのかしら。音楽の教科書にでも載っているのかしら。母親が懐かしんで立ち止まったのかもれない。

でんでんでんぐり返しでバイバイバイ

親子は拍手もせずに去っていく。座り込んだ新太の脇にはCDの詰まった段ボールが置かれていた。極太マッキーで「目指せ一〇〇万枚」と書かれている。

「一枚、買うよ」

そんな声を掛けたのは、修理屋にも、製造屋にも金を使うことをやめたから。新太の

CDを写真におさめて「一〇〇万分の一枚買いました。# 新太」と垂れ流すことが粋なことのように思えたから。

俺は財布から一〇〇〇円札を一枚取り出す。新太は段ボール箱から一枚を引き抜き、立ち上がる。そして九〇度に腰を曲げながらCDを差し出した。

「ありがとうございますっ」

駅前広場に響き渡る声。俺は顔が熱くなり、咄嗟に一〇〇〇円札と引き換えた。

「これ唯一のオリジナルソングなんです」

新太は一〇〇〇円札をポケットにねじ込んで歌いはじめた。生歌も商品の一部なのか。この場を去るわけにもいかない雰囲気。そんな大きな声を張り上げて、小さなマウスワールドに効果はあるのか。最低でも二メートルは確保しなければならない。俺はジリジリと後退る。真正面でない方が良いだろう。俺は左へサイドステップ。すると、新太はこっちに顔を向ける。俺は右へサイドステップ。やはり、新太はこっちに顔を向ける。俺は左右にステップを踏みながら徐々に後退を続ける。あいつが立ち位置を変える様子はない。なんとか安心のできるディスタンスが確保できたところで歌は終わった。なんの歌であったのかまるで分からないまま俺は小さく拍手を送る。そして、また直角に腰を折る新太に小さく手を振った。

家に帰ると驚いた。うちの小僧が同じCDを持っているというのだ。

「いいないいなノヒトでしょう」

それも無料で貰ったと言うではないか。SNSを駆使しているわけでもない小僧にモノをくれたところで宣伝効果はない。親父にすら伝わっていない有り様だ。

「よくそんな歌知ってるな」

「ユーチューブで見た」

小僧の情報源は大抵それだ。

そんな思いがけない出来事も俺の背中を押したのだろう。気づけば新太のお抱え運転手だ。

「たった一曲しか入っていないCD-Rが一〇〇〇円かよ」

俺はぼやきながら自棄になって何度もリピートした。一五年以上も昔に買ったソニーのスティック型デジタルウォークマンに取り込んで、鼓膜を揺らした。かつてソニータイマーなんてことも囁かれていたが、こいつは随分と長持ちしている。そろそろ無線イヤホンに対応したモデルに切り替えたいと思いつつ、未だに耳からコードを垂らしている。

品のいい言葉選びだ。多少ハスキーなれど品のいい声だ。この品のよさが弱みになっているのではないかと分析をする。弾き語り青年に興味を持つおっさん。要するに、若かりし頃、同じような夢を抱いたわけだ。バンド仲間とスタジオに入る。下手な演奏は学内イベントでしか披露する機会がなかった。

駅前広場をだらだら歩いて新太の姿を探す。次に顔を合わせた時には、CDを買ってから一月が過ぎていた。あいつは相変わらずパンパンの顔で、CDの在庫を抱えて、ギター一本で座り込む。フラワーカンパニーズ「ハイエース」を歌っていた。知っている歌だった。ユーチューブばかり見続ける小僧からパソコンを奪い取り、何度かミュージックビデオを鑑賞した。

「あのビデオ最高だよ」

声に出していた。新太は「歌の中を」と繰り返し、最後にジャラン。俺を見上げた。

「あ、おっさん」

二度目の顔合わせだ。気さくにもほどがある。そんなことで社内人やっていけるのか。説教の一つも垂れたくなるおっさんの腐れ根性を必死に押し殺した。

「ハイ、イエス」

無理に笑う。

「車の運転でも出きれば、もっと遠くで歌えるんだけどな」

機会は逃さない。

「おっさんは運転できるぞ。車ないけど」

「車は持ってるぞ。免許ないけど」

そして、機会は逃さない。

「ハイエース？」

「ハイ、イエス」

パンパンの顔がさらに膨らんだ。

家には親父さんのハイエースがあるけれど、免許は返納したそうだ。そんな年寄りの親父さんがいるようにも見えないが、深掘りする意味はない。俺には免許がある。新太の家には使われなくなったハイエースがある。

翌週、教えられた住所をスマホに打ち込んで、あいつの家へ向かった。門の前には好好爺が一人。爺さんなのか。親父さんなのか。

「こんにちは」

頭を下げて様子を伺う。好好爺は無言で頷く。細めた目に何が映っているのか分からない。するとギターケースと段ボール箱を抱えた新太が飛び出してきた。

「この前話した友達のおっさん」

この世の全てに無言で頷くべきと、好好爺は悟っているようだ。俺の親父でもおかしくないほどの爺さんだ。職場の友達という体であれば、こんなおっさんでも不自然はないだろう。

こうして俺は後部座席に路上音楽家を乗せてハンドルを握ることになったのだ。とは言え、こっちは家族持ちのサラリーマンだ。金にならない労働に、数ヶ月も家を空けるわけにいかない。あっちだっけってどこかで働いている。俺は週末限りのお抱えドライバーとなった。CDの売り上げの一〇パーセントはいただけるという。煙草代の足しになればラッキーだ。

「次、右な」

カーナビはない。スマホのマップを眺めるあいつの指示通りにハンドルを切る。ヒトの集まる街中へ向かうのかと思えば、随分と見晴らしのよい田園風景が広がりはじめた。

「どこ行く気だ？」

「もうちょっと北のほう」

「北ね」

新太に指示されるままたどり着いた場所は、都内最大の水郷公園だという。サイドブレーキを引けば、新太は背もたれをフラットに倒し、車の中からリアゲートを持ち上げる。足を垂らして腰掛けると、エンジンを切るよりも先に歌いはじめた。夢中になれる

ものがある若者は美しいじゃない。俺は役目を終えて、あいつの声に鼓膜を揺らす。背もたれを軽く倒して一服する。弦を弾いて喉を震わせる新太。リアビューミラーで様子を窺えば、多くの車が停まっているもののヒトはまばら。車を止めた連中はすぐにその場を去っていった。公園の案内板には菖蒲が見頃であると書かれている。こんなところよりいつもの駅前広場のほうが立ち止まるヒトは多いのではないか。

あいつは構わず二曲目を続ける。無視され続けることには慣れているのだろう。俺だって仕事でアポが取れないことはある。メールを送ったところでスルーされることもしばしば。それでも無人の会議室でプレゼンテーションさせられた覚えはない。近いことはあった。地元代理店に集客を任せたまま飛行機で飛んだところ、セミナールームには誰一人いなかった。それでも、無人の空間でセミナーは強行しない。バナナの叩き売り営業だったらまた違ったかしら。無人の空間でがなり声をあげる。ヒトが集まるまでがなり声をあげる。如何にバナナが甘くて安くてお買い得かを訴え続ける。声もかすれる。

新太はどんな思いで三曲目をはじめたのか。遠目に一人の餓鬼が立ち止まっている。ここで唯一のオリジナルソング。品のいい言葉選びだ。多少ハスキーなれど品のいい声だ。この品のよさが弱みになっている。俺はそう分析して勝手に気を揉むが、何ができるでもない。エンタメ業界で働いたことなどない。実用性のない商品なんてどうして売り込んだらいいものか。スティーブン・キングだったらなんと言う。どうやってあいつの叩き売りをするだろう。

「芸術家が役立たずだと言うんなら、音楽に耳を塞いでいろ。本を燃やしてしまえ。詩なんか政治屋に任せて、映像なんか広告屋に任せて、絵画にも目を伏せろ。いつまでも膝を抱えて自粛要請に応じていればいい。そいつが嫌なら一〇〇〇円持ってこい。たった一〇〇〇円で豊かな自粛生活があんたのものだ」

とは言え、ここは水郷公園。家族総出で菖蒲なんかを拝みにきている連中だ。飯を食う以外の豊かさを、水郷、草花、青い空に求めている。新太の歌がそれらに敵うのか。首を振って天井へ紫煙を吐く。俺はあいつのマネージャーではない。ドライバーに徹していればいい。一〇パーセントの売り上げを受けとることができなくとも。

三曲を歌い終わると、あいつはさっさとギターをケースにしまいはじめた。

「なんだ。もう終わりか？」

「誰もいねえや」

「場所変えるか？」

「そうだな」

新太はギターを車内に戻すと、トランクを漁りはじめた。取り出したそれは釣竿か。

「おっさん、釣りするか？」

突然の申し出に、半開きになった口から煙が漏れる。釣りなんて、餓鬼の頃のわずかな記憶しかない。友人の親父さんに連れていかれたが、二秒で飽きた。

「もう歌やめるのか？」

あいつは頷く。パンパンの笑みにノーとは言えない。公園の溜池が釣り場になっているらしい。妙に詳しいのは、免許を返納する以前、爺さんと釣糸を垂らしに来たことがあるからだという。ヘラブナ釣りで知れた場所だとか。鯉と鮒の見分けくらいはつく。爺さんとの釣り話を続ける新太に頷き、俺はもう一本の煙草に火をつけた。



「煙草は？」

「吸わない」

「シンガーだもんな」

返事はなかった。

溜池は賑わっていた。釣糸を垂らしてじっと浮きを見つめる釣り人たち。賑わっているという表現が適切であるのか知れないが、釣りキチや釣り子にとってはなによりも豊かな時間なのであろう。

「エサ買ってくる」

溜池の側には釣具屋があり、酒屋が並んでいた。缶ビールの一本でも飲みたい陽気だ。途端にドライバーという立場が損な役回りに思えてくる。

何本目かの煙草に火をつけて、気まぐれに釣糸を垂らす新太の背中を写真に納めた。途端、妻からメッセージが入った。

帰りに醤油買ってきてくれない？

ご丁寧に有機丸大豆醤油の写真まで張り付いている。りょーかいのスタンプを返せば、サンキューのスタンプが送られてくる。それ以降、連絡はなかった。俺が返す番なのかもしれない。本当は醤油を頼みたかったのではなくて、俺がどこで何をしているのか探りかかったのではないか。そんな気もして、新太の背中を添付して送ってみる。

釣り???

ちょっと休憩中。

長そうな休憩。

確かにそうだ。休日を返上してこんなところに来たのは、こいつを釣り場に連れてくるためではない。弱い引きを釣り上げれば小さなクチボソ。新太はハスキーに溜息をつく。

「随分ヒトがいるじゃないか。ここで歌ったらどうだ」

「釣り場と図書館は騒がないもんだ」

爺さんの教えか。

「おまえ、歌いに来たんだろ。CDだって売れてねえぞ」

「売ってきてよ」

段ボール箱を抱えて売り子の真似をする自分を思い描く。

「んなことやるか」

後頭部に蹴りでも見舞ってやりたい。そんな衝動に駆られた瞬間、竿が大きくしなった。

「お、でかいでかい」

浮きが大きく沈み混み、水面が大きく揺れる。確かに大きそうだ。狩猟本能だろうか。こっちまで興奮が伝わってくる。

「おっさん、ちょっと、タモ」

「タモ？ なんだタモって？」

「網い」

網って言えよ。俺は地面に寝かされたタモとやらを拾い上げて新太に差し出す。しかし、あいつは思いがけない引きの大きさに釣竿を両手で握ったままだ。

「よし。じゃ、俺が捕まえるから、ちょっとこっち寄せろ」

俺は知った風な口をきく。

「分かった、ちょっと待て」

素直に応じるあいつに少々気分がよくなった。いったん魚を泳がせ、タイミングを見計らってまた引き寄せる。釣りキチの視線を感じる。釣り子の黄色い声が聞こえる気がした。俺はがに股に腰を落として両手でタモを構える。肉を食って生きているくせに、アブラゼミより大きな生き物を捕獲した記憶がない。水面が弾け、鱗が煌めいた。胸が高鳴る。たかがヘラブナ。されどカジキマグロと格闘しているような気分だった。

煌めく魚影に、俺は今だとタモを振り下ろした。網などアブラゼミを捕まえる以外に使ったことがなかったのだ。タモは釣糸を断つ。竿は跳ね上がる。新太は仰け反る。

「あ、ごめん」

あいつはひっくり返りそうになりつつ、なんとか踏みとどまった。愛想笑いを浮かべる俺。爺さん譲りの細い目が、宇宙人と遭遇したかのように見開かれた。

「下から掬えよっ」

「ごめん、よ」

新太は釣り場で騒げない。あいつはそそくさと釣竿をたたみ、俺たちは釣り場から退場した。

上から叩く奴があるかよ。知らねえもんは知らねえんだよ。知らないってどっかで見たことくらいあるでしょう。知らねえもんは知らねえんだよ。金魚すくいだって下から掬うでしょう。知らねえもんは知らねえんだよ。虫は上に逃げるから上から押さえ込むの。知らねえもんは知らねえんだよ。魚は下に逃げるから下から掬い上げるの。知らねえもんは知らねえんだよ。

駐車場に戻れば、あいつはやり場のない怒りを飛沫に変えるように、マスクもせずに大声で歌いはじめた。俺は運転席で煙草に火をつけて、リアビューミラーに映る背中に煙を吹きかけた。

陽が傾きはじめ、でんぐり返しでバイバイする頃、思いがけないことが起きた。

「さっき釣り場にいましたよね」

釣り子から声がかかる。

「タモ網のヒトは？」

釣りキチは嫌みっらしい笑みを浮かべた。

「おっさんご指名え」

新太は振り返って声をあげる。若い二人は困ったように両手をふる。根が営業マンなもので、下手に出るのは得意だった。煙草を揉み消して運転席を飛び出すと、タモを握ってがに股で蟹歩き。釣り子が笑えば釣りキチも悪い気はしない。下手に出たからには手ぶらで帰らせるわけにはいかない。新太が唯一のオリジナルソングを披露しはじめる。無難な歌に釣り子は「いい歌」と呟く。あんたの性格がいいのだ。売り込むべきは釣りキチだ。俺は若造の目をまっすぐ捕らえながらタモを振る。

「今、手売りで一〇〇万枚チャレンジ実施中なんですよ。これも何かのご縁だと思って是非一枚」

釣りキチが釣り子に視線を落とせば、小さく微笑む。お一人様お買い上げ。続く、高田渡「魚釣りブルース」に若い男女はポカン。俺だって辛うじて知っていた程度だ。

ワキにゃ酒でも一本抱き抱えて  
あの小川まで魚つりに  
日頃のウップンをエサにして  
糸をたれて一日過ごします

「いいの演ってるじゃない」

釣り名人然とした男が柔和な笑顔でやって来る。めざせ一〇〇万枚の段ボール箱に視線を落として、一枚を拾い上げる。

「魚釣りブルース入ってんの？」

オリジナル一曲しか入っていないと言いつらい。俺は名人の目をまっすぐ捕らえながらタモを振る。

「今、手売りで一〇〇万枚チャレンジ実施中なんですよ。これも何かのご縁だと思って是非一枚」

「あんときのタモさんか。ありゃ酷かったな」

名人が遠慮なく大声をあげれば、「タモさん」が釣りキチのツボに入ったらしい。笑い声が響き渡ると、帰りがけのファミリーやら老若男女が何かあったのかと集まりはじめる。フォーク、アニソン、歌謡曲と新太のレパートリーは広い。テレビ放映したばかりの「スタンド・バイ・ミー」なんかも持ってくる。ザ・コーデッツ「ロリポップ」を選曲するところが憎い。俺は口の中に指を突っ込んで頬を弾く。気付けば一〇枚を売り捌いていた。

拍手で見送られるなんて高校の卒業式以来だ。俺は三度クラクションを叩いて公園を後にした。

ハイエースとあいつを家まで送り届ければ、爺さんが無言の笑顔で出迎えた。朝からずっと立っていたのではないかと訝る。

俺は約束通り一〇〇〇円をいただいた。帰りがけにブレモルを二缶、小僧には愛のスコール・マンゴー味、思いがけず有機丸大豆醤油まで稼ぎで買ってしまった。その夜は、家族で乾杯をした後、巨大なヘラブナと格闘した話を、両腕を広げながら披露した。

その週は土曜日に駅前広場でライブをするから、日曜日に遠征したいとのことだった。駅前ではさすがにタモ網を振りながら営業活動とはいかない。妻のママ友に見つかりでもしたら家庭に亀裂が入る。

日曜日、たどり着いた先はまた水辺であった。本当は釣りに行きたいために俺を雇ったのではなかろうかと紫煙を吐く。しかし、一〇枚を売り上げた前例があるからして、これが無駄な活動だとは言いきれない。

「ここは湖か？」

「沼って呼ばれてるな」

沼の定義をよく知らないが、底無しのイメージがつかまとう。そして、どう見てもヒ

トがない。誰一人いない。釣り人がいないことをよしとして新太はリアゲートを日よけに喉を鳴らす。「魚釣りブルース」に引き寄せられる釣り人もいない。今日は練習のつもりだろうか。

あいつにとって俺はお抱えドライバーかもしれないが、俺にとってはお抱えシンガーとも言える。そう思えば、煙草を吹かしながら鼓膜を震わせるこの時間がとんでもなく贅沢なものにも思えてくる。

あいつは三曲終わると、ギターを片付けながら突飛なことを言い出した。

「ちょっとミミズ掘ってくる」

あたりを見回せばエサが買えそうな店はない。新太はプラカップとスコップを手に沼岸の草むらでしゃがみこんだ。その姿は微笑ましくも、逞しくも感じられる。ウチの小僧を連れてきたら、いい刺激になるかもしれない。

新太がミミズを掘っている脇に、なにやら見慣れないものを発見した。煙草を揉み消して、ハイエースの運転席をおりる。なんだあれは。目を細めて腰を曲げながら歩み寄る。次第にその輪郭がはっきりしてくると、思い浮かべたのは竹中平蔵の顔だった。あと矢ガモ。手に取ることは躊躇い、丸まった新太の背中をつついた。

「おいおい、えらいもんが落ちてるぞ」

あいつは俺の指の先に視線を向ける。

「クロスボウじゃん」

そして、躊躇うことなくそいつを拾い上げた。

「クロスボウ？ ボウガンじゃなかったっけ？」

「同じ同じ。ボウガンは製品名だよ」

「ウォークマンみたいなもんか」

「セロテープみたいなもんだ」

もう一つくらい気の利いた例をあげてみたいが出てこない。

「なんで、こんなものが落ちてるんだろうな」

「銃刀法の改正があるからじゃねえの。いつからだっけ。届け出をしないと不法所持になるらしい」

「おまえ、変なことに詳しいよな」

「親父が持ってた。どこで手に入れたか知らんけど。こんなフルサイズのじゃなくって、ピストルクロスボウだったけど。やばい。不法所持で捕まるって騒ぎだして、メルカリで売った」

その名称から小型のクロスボウがあると理解する。それよりあの爺さんとメルカリが結び付かない。

「こんな危なそうなもん、素人が取引できんのか？」

「その時はまだ閣議決定かなんかのタイミングだったから。別に問題なかったんじゃない。割りといい金になったらしいよ。気まぐれに金くれたから大量のCD-Rに変えてやった」

新太はライフル銃のようにそいつを構え、沼に立つ鷺に向けた。

「スポーツ用かな。こんな立派なやつ初めて見たよ」

「おいおい、撃ったりすんなよ」

あいつはそっと地面に戻した。矢も何本か散らばっていた。

視線を運べばエロ本も落ちている。よっぽどヒトが来ない場所なのだろう。新太は針にミミズを通して糸を垂らした。

CDを売る気なんてさらさら無いようだ。暇を持て余してタモ網を構えても、浮きが揺れる様子はなかった。時折、聞いたこともない怪鳥の音がする。新太が釣糸を垂らしている間中、俺はクロスボウのことが頭を離れなかった。気に入らないのは、時折、竹中平蔵の顔が浮かんでくること。気を紛らすべく新太に問いかける。

「何か釣れんのか？」

「バス釣りで有名な沼なんだけどな」

「ブラックバス？ あの外来生物か」

「よく知ってるじゃん」

「ボウガンで射抜くか」

「乱暴だな。元々ニンゲンが持ち込んだんだろう」

魚釣りに縁のない俺に言わせればどっちもどっちだ。唇に針を引っ掛けて釣り上げる娯楽は乱暴でないのか。いくら待ってもクチボソ一匹釣れない。先週のヘラブナだって釣れたわけでないが。沼には魚がなければニンゲンもいない。俺は業を煮やして文句を垂れる。

「CD売る気あんのか？」

新太はプラカップに蠢くミミズを沼へ撒いた。

「帰るか」

あいつは渋々帰りのサービスエリアで夕焼けライブを決行した。結局、CDは一枚も売れなかった。妙な疲れにつつまれた車内、ぼんやりクロスボウのことを考えながらハンドルを握った。

よっぽど気になっていたのだろう。ある日、夢に出た。

俺が驚いたのは今、首を射抜こうとしている新太の引いたクロスボウは、以前私が拾って帰ろうとした見覚えのあるクロスボウなのである。俺はフルサイズクロスボウは使ったことはなく、フルサイズよりはコンパクトなピストルクロスボウを使っていたので、あれは憧れのクロスボウなのだ。(困るなァ、せっかくみつけたフルサイズクロスボウで首などを射抜いてはキタナクなると、俺は思っているが、とめようともしないのだ。そうしてトリガーはさーっと引かれて、竹中平蔵の首はスッテンコロコロと音がして、ズーッと向うまで転がっていった。(あのボウガンは、もう、俺は使わないことにしよう、首など飛ばしてしまっ、キタナク、捨てるのは勿体ないから、メルカリで売ってしまおう)と思いながら俺は眺めていた。俺が変だと思うのは、首というものは皮と肉と毛で出来ているのに、スッテンコロコロと金属性の音がして転がるのを俺は変だとも思わないで眺めているのはどうしたことだろう。

目を覚ました時、辺りは闇に包まれていた。ハイエースの荷台。隣で新太は寝息をたてている。昼間から赤玉なんかを飲んだせいで頭が痛い。

同行初日の成功が仇になったか、それ以降、CDの売り上げは伸びず、俺は苛々していた。それにもかかわらず、あいつは早々にライブを終了させて釣糸を垂らすばかり。

薄々感づいてはいたが、路上ライブ以上に、週末、爺さんと釣りに行くことがあいつの楽しみだった。爺さんが免許を返納したタイミングで、暇そうなおっさんを捕まえたわけだ。パディものの映画に感化された俺が、勝手な夢囀に浸っていたかっただけにも限らず、腹を立てて声を荒らげた。

「一〇〇万枚売る気あんのかよっ」

新太は餌を練りながら平然と答えた。

「ねえよ」

俺は絶句するほかない。地面を蹴ってあいつに背を向ければ目の前が酒屋だった。ひどく悪酔いしたい気分だ。店内に踏み込めば、自分が餓鬼だった頃、親父が昼間から飲んでた赤玉が目に飛び込んできた。スパークリングなどという小洒落た小瓶もあるではないか。悪酔いにはいい酒だと思われた。あいつの背中に文句を垂れながら一本を空ける。よくよく聞けば平日も仕事なんかしてないというではないか。爺さんの貯金を崩して、年金にすがるって、昼間から路上で歌っているという。

苛立ちは収まらず、遂には赤玉の五五〇ミリリットルボトルを呷る。一曲だけのオリジナルソングで一〇〇万枚を目指そうなんて虫のいい話だ。こっちはあの手この手で毎年一〇パーセント成長だ。資本増大からくり人形になって必死に会社にしがみついているんだよ。親の年金で食っている路上音楽家なんて、まったくの糞野郎だ。

あんなに資本増大執着主義を憎んでいたはずなのに、その対極にいるあいつの生き様を否定したくて仕方がない。一〇〇万枚はいつまでに達成するつもりか。そのストラテジーは。そのマイルストーンは。そして、おまえの描く五年後のビジョンはなんなのか。

俺は古びたエンジンのように泣いていた。そして、排煙を吹き上げながら新太の背後へ襲いかかる。釣り場に突き落としてやろう背中を押すが、その身体は想像以上に重かった。振り返ったあいつに腕を捕まされると、俺は簡単に転がされた。

潰れた俺は釣り人たちに運ばれ、ハイエースの荷台に放り込まれた。

「しばらく寝てろ」

新太は随分長いこと歌っていたように思う。こんなおっさんに捕まって哀れに思われたのだろう。同情した釣りキチや釣り子のたちがCDの一枚でも買っていったかもしれない。

目を覚まして夜だったのには参った。妻の顔を思い浮かべて慌ててスマホを取り出す。五件の着信と一本のメッセージ。

あんまり若い子に醜態さらすもんじゃないよ。

彼女は俺の様子を知っていた。新太がSNSで酔いつぶれた俺の写真をアップしていたから。酔っ払い介護なう。

ごめん。詳しくは明日帰ってから話す。

メッセージを送って煙草に火をつける。既読はついたが、いくら待っても返信はいただけなかった。深く息を吸い込んで車内を煙に満たす。

苛々するたびにボウガンのことを思い返す。

もう誰かに拾われてしまったろうか。

そして、ボウガンをと一緒に思い出す顔がある。ついでに矢ガモも。

俺が竹中平蔵にモノを申したところで、はい、論破。どうせ言葉を封じられて項垂れるだろう。何せ世論は間違っている。

世論は間違ってますよ。世論はしょっちゅう間違っている。なんでやるか、やらないか、あんな議論するか、私は分からない。

煙草のフィルターに火が迫る。鈍い身体を運転席まで運んで、そいつを灰皿で揉み消した。気まぐれにキーを回してランプを焚く。リアビューミラーに寝ぼけ眼の新太が映った。

「なに、帰るのか？」

「ごめん。起こしたか」

「そりゃ起きるだろ。酒抜けたのか？」

「多分な。なあ、あの沼まで案内できるか？」

新太は首を傾げる。あいつにとっては沼なんていくらでもある。俺にとって沼はあそこ以外にない。

「ボウガンだよ」

あいつは表情を固くする。

「クロスボウが一般名だったっけ？」

「ピアニカみたいなもんさ」

「は？」

あいつは何処か得意げな表情を浮かべ、マップの検索をはじめた。

「メルカリで売る気だろう」

「ああ、そうだ。この世は金が全てだ」

「今日、五枚売れたぞ」

「あと何枚だ？」

「九十九万九千…」と、あいつは指を折った。





奥付



## 奥付

Puzzle 文集 11

<https://puboo.jp/book/124104>

著者：puzzle

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/124104>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

---

Puzzle文集11

---

著 puzzle

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---